

(二)此一首は、お
とめ宛書簡の
本に記せるも
の也

田中一閑身まかりて後、妻の加賀國へ引こし侍りて、
いまはとふ人もなければ、かの墓所谷中の新ほりへ
はじめてまかり侍て

とふ人もいまはなつ野の草のはら露ばかりこそ友と
おくらめ

見ればかつむかしの夢のことぐさを思ひしられて袖
ぞ露けき

人の身のいまのならひをありし世にしらで過ぎにし
ひとぞはかなき

のり姫の君身まかりしち、ほどなく鈴木主水身ま
かりければ

見し夢にゆめをかさねてかた糸の心ぼそくもおもほ
ゆるかな

見るまゝにあなうつゝなやあだし野の露ときえゆく
夢のよの中

五月十八日はれいの講習にて、かの處へまかり、な
き人を思ひ出て

かよひにし人は夏野の草の露その名ばかりはきえ残

韻文集

りぬる

いつしかにむかしの人としのばれてことの葉草に露
かゝるらん

のがれすむみのゝを山のあはれさを松のあらしに吹
きもつたへよ (一葉集)

(二)よひ／＼はかまたぎるらんね所のみつの枕もこひし
かりけり (落葉考)

題しらず

捨てぬまにすてらるゝ身の思ひ出をしらでや人のま
ことゝはいふ (あさかり)

はいかい歌 二首

としの夜のふけゆくまゝにことしげき都の市の音し
づかなり

よるとしのめにはさやかに見えねどもまめの音にぞ
おどろかれぬる (一葉集)

自得

思ふことふたつのけたる其あとは花のみやこもひな
かなりけり (風俗文選)

題しらず

三五九

〔「風俗文選」に
は「買賣」を
顛倒せり、誤
なる事明な
り、この事支
考も云へり

あみざこを升にはかりて買ふ人は賣る人よりもあは
れなりけり (本朝文鑑)
猪の姿くふ事はさもなくて米くひあらず人のにくさ
よ (小ばなし)

骸骨賛

みな人のこれをまことのかたちぞとしらば此身がす
ぐに極樂 (あさかり)

無名庵の歸りに雪にあうて申つかはしける

去 來

かさすて、尻からぐべきかけもなしでつちもつれぬ
雪の夕ぐれ

かへし

芭 蕉

笠さして尻もからげずふる雪に定家の卿もはだしな
るべし (初 蟬)

羽紅が尾になりける時に申遣しぬ

九重の内には海のなきものを何とてあまの袖しぼる
らむ (同)

ふもとより梢にかゝる藤の花腹一ぱいのながめなり
けり (同)

月の雁羽裏も見せて渡り鳥

一行斜

名月や池をめぐりて終夜

雁雲端

雁の聲寢處廣ふ覺けり

減

其角吟

米搗も古郷や思ふ啼鳥

二月變化

春雨や蜂の巢傳ふ屋根洩

野外・飛 (芭蕉翁眞蹟拾遺)

西行上人像賛
すてはて、身はなきものとおもへども
雪のふる日はさぶくこそあれ花のふる日はうか
れこそすれ (風俗文選)

さてもそのうち御ざうしは十五と申春の頃鞍馬の寺
を忍出あづま下りの旅衣はるけき四國西國も此高館
の土となりて申ばかりはなみだなりけり

夏草やつはものどもが夢のあと

旅士は せ を (一葉集)

鉢敲自畫賛

鉢たゝきのうた

はせを

霜の夕にねをそへて、うかれ友鳥行さきは。たのし
き國のつれづれに、かをる茶の花目さまし。

夢にひとつまわれ、いさひとつ、南無あみだく。

此あかつきのひとこゑに、ふゆの夜さへも千鳥なく、
いさきかむ。南無阿彌陀く。

からさけも空也の瘦も寒の雨 (芭蕉翁眞蹟拾遺)

義を守ること唐がらしにならへ

芭 蕉

色をおもふこと饅餡のごとくせよ

去 來 (一葉集)

紀
行
日
記
集

目次

甲子吟行……………(三六五)

鹿島紀行……………(三七二)

卯辰紀行……………(三七三)

更科紀行……………(三八〇)

奥の細道……………(三八二)

嵯峨日記……………(三九〇)

甲子吟行序

我友はせを老人ふるさとのふるきをたづねむつひで、行脚の心つきて、その秋江上の庵を出、またの年のさ月待ころに歸りぬ。見れば先頭陀のふくろをたく、たゞけはひとつのたま物を得たり。そも野ざらしの風は、出たつあしもとに千里のおもひをいだくや、きくひとさへぞそゞろ寒げ也。次に不二を見ぬ日ぞ面白きと詠じけるは、見るに猶風興まされるものをや。富士川の捨子は惻隱の心を見えける。かゝるはやき潮を枕とてすて置けん、さすがに流よとはおもはざらまし。身にかふる物ぞなかりきみどり子はしやらむかたなくかなしけれどもと、むかしの人のすて心までおもひよせてあはれならずや。又さよの中山の馬上の吟、茶の烟の朝けしき、林下に夢をおひて、葉の落る時驚きけむ詩人の心をうつせるや。桑名の海邊にて白魚白きの吟は、水を切て梨花となすいさぎよきに似たり。天然二寸の魚といひけむも此魚にやあらむ。ゆき／＼て山田が原の神杉をいだき、また上もなきおもひをのべ、何事のおはしますとはしらぬ身すらもなみだ下りぬ。同じく西行谷のほとりにていも洗ふ女にことよせけるに、江口の君ならねば答もあらぬぞ口をしき。それより古郷に至りて、はらからの守袋より、たちちねの白髪を出して拜ませけるは、まことにあはれさは其身にせまりて、他にいはどあさかるべし。しばらく故

國にとどまりて、大和廻りすとて、わたゆみを琵琶になぐさみ、竹四五本の嵐かなと隠家によせける、此兩句をとりわけ世人もてはやしけるとなり。しかれ共山路きてのすみれ、道ばたのむくげこそ、此吟行の秀逸なるべけれ。それよりみよしの、よしの、おおくにわけいり、南帝の御廟にしのお草の生たるに、そのよの花やかなるを忍び、またとく／＼の水にのぞみて、洗にちりもなからましを、こゝろ見にすゞぎけん。此翁年ごろ山家集をしたびておのづから粉骨のさも似たるをもつて、とりわき心とまりぬ。おもふに伯牙の琴の音、こゝろざし高山にあれば峨々ときこえ、こゝろざし流水にあるときは流るゝごとしとかや。我に鍾子期がみゝなしといへども、翁のとく／＼の句をきけば、眼前岩間を傳ふしたゝりを見るがごとし。同じくふもとの坊にやどりて坊が妻に碯をこのみけん。むかし潯陽の江のほとりにて樂天をなかしむるは、あき人の妻のしらべならずや。坊が妻の碯は、いかに打て碯をなぐさめしぞや。ともにかまほしけれ。それは江のほとり、これはふもとの坊、地をかふるとも又しからむ。いづれの浦にてか笠着てさうりはきなながらの歳暮のことぐさ、これなん皆人うきよの旅なることを、しりがほにしてしらざるを諷したるにや。洛陽に至り三井氏秋風子の梅林をたづね、きのふや鶴をぬすまれしと、西湖にすむ人の鶴を子とし梅を妻とせしことをおもひよせしこそ、すみれむくげの句のしもにたゝんことかたふるべ

〔一〕「葉集」に、『路糧』

し。美濃や尾張や大津のや、から崎の松ふし見の桃、狂句
こがらしの竹齋、よく鼓うつて人のこゝろをまよはしむ。
こと葉皆蘭とかうばしく、やまぶきと清し。静かなるお
もむきは、秋しべの花に似たり。その牡丹ならざるは、
隠子の匂なれば也。風のばせを、霜の荷葉、やぶれに近
し。しばらくもあとにとゞまるものゝ、形見草にもよし
なし草にも、ならばなるべきのみ。のみにして書ぬ。

かつしかの隠子
素堂 爾爾

甲子吟行

別名「甲子紀行」「野晒紀行」「草枕」「芭蕉翁道記」(貞享二年)芭蕉自筆模刻
「甲子吟行」による

千里に旅立て路糧を包まず、三更月下無何に入と
いひけんむかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八
月、江上の破屋を立いづる程、風の聲をゝろ寒げな
り。

野ざらしをこゝろに風のしむ身かな

秋十とせ却て江戸をさす古郷

〔三〕こゆる日は雨降て、山みな雲にかくれたり。

霧時雨不二を見ぬ日ぞおもしろき

何某ちりと云けるは、此たび道のたすけとなり
て、萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆のまじは
り深く、朋友信有哉此人。

深川や芭蕉を富士にあづけゆく ちり

富士川のほとりをゆくに、三ツ計なる捨子のあは
れげに泣くあり。此川の早瀬にかけて浮世の波をし
のぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨置きけん、

〔二〕「同」で『關』
える

〔一〕本書「つたな
きなけ」とあ
り今「泊船集」
に従ふ

〔三〕「泊船集」に、
「道のべ」の前
書「眼前」とあ
り

〔四〕「葉集」に「歸
る」と誤る

〔五〕「同」に「今は」
の字を脱す

〔六〕「泊船集」に「浦
島の子」と

もとの秋の風、こよひやちるらん、あすやし
をれんと、袂よりくひ物なげて通るに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに
いかにぞや、汝ちゝに憎まれたる賦、母にうとま
れたる賦。ちゝは汝を悪にあらじ、母は汝をうとむ
にあらじ、只これ天にして、汝が性のつたなきをな
け。

大井川越る日は終日雨降ければ、
秋の日の雨江戸に指をらん大井川 千里

馬上吟
道のべの木槿は馬にくはれけり

廿日餘の月かすかに見えて、山の根際いとくらき
に、馬上に鞭をたれて數里いまだ雞鳴ならず。杜牧
が早行の殘夢、小夜の中山に至りて忽驚く。

馬に寝て殘夢月遠し茶のけぶり
松葉屋風瀑が、伊勢に有けるを尋音信て、十日計
足をとゞむ。腰間に寸鉄をおびず、襟に一囊をかけ
て、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有り、俗に
て髪なし。我僧にあらすといへども、浮屠の屬にた

ぐへて、神前に入事をゆるさず。暮て外宮に詣侍り
けるに、一の華表の陰ほのぐらく、御燈處々に見え
て、また上もなき峰の松風、身にしむ計ふかき心を
起して、

みそか月なし千とせの杉を抱あらし

西行谷の麓にながれあり。女どものいも洗ふを見
るに、

芋あらふ女西行ならば歌よまむ

其日のかへさ、ある茶店に立よりけるに、蝶と云
ける女、あが名に發句せよといひて、しろき絹出し
けるに書つけ侍る。

蘭の香や蝶のつばさに薫す

閑人の茅舎をとひて、

蔦植て竹四五本の嵐かな

長月のはじめ故郷に歸りて、北堂の萱草も霜がれ
果て、今は跡だになし。何事もむかしにかはりて、
はらからの髪白く、眉皺よりて、只命有てとのみい
ひて言葉もなきに、兄の守袋をほどきて母の白髪を
がめよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老たりと

しばらく泣きて、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して葛下郡竹の内と云所、彼ちりが
舊里なれば、日頃とどまりて足を休む。藪より奥に
家有り。

〔一〕竹の内
と云所に至
る。此所は例
の千里が舊里
なれば
〔二〕原書「藪より
奥に家」

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

二上山當麻寺に詣て、庭上の松を見るに、およそ
千とせも経たるならん、大さ牛をかくすとも云べけ
ん。かれ非情といへども佛縁にひかれて、斧斤の罪
をまぬがれたるぞ幸にして尊し。

〔三〕「葉集」に、
「御陵」

僧朝がほいく死かへる法の松

ひとり芳野のおくにたどりけるに、まことに山深く、
白雲峯に重り、煙雨谷を埋て、山賤の家處くち
ひさく、西に木を伐音、東にひびき、院く鐘の聲
は心の底にこたふ。昔此山に入て世をわすれたる人
の、おほくは詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の
廬山といはんもまたむべならずや。ある坊に一夜を
かりて、

枯打て我に聞せよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、おくの院より右の方二丁
ばかりわけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかにあ
りて、さかしき谷を隔てたる、いと尊し。かのとく
とくの清水はむかしにかはらずと見えて、今もとく
くと雫落ける。

露とくくこゝろみに浮世すゝがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば、必口すゝがん。もし
是許由に告げ、耳を洗ん。山をのぼり坂を下るに、
秋の日既になゝめになれば、名ある處く見残して、
先後醍醐帝の御廟を拜む。

御廟年を経てしのぶは何をしのぶ草

大和より山城を経て、近江路に入て美濃に至る。
今須山中を過て、いにしへ常盤の墳あり。伊勢の守
武が云ける義朝殿に似たる秋風とは、いづれの處か
似たりけむ。我もまた、

義朝のこゝろに似たりあきの風

不破

秋風や藪もはたけも不破の關

大垣に泊りたる夜は、本因が家のあるじとす。む

さし野を出る時、野ざらしを心に思ひて旅立ければ、

死もせぬ旅ねのはてよ秋のくれ

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほととぎす

草の枕に寝あきて、まだほのぐらきうち溜の方
に出て、

あけぼのやしら魚白き事一寸

熟田に詣づ。社頭大いに破れ、築地はたふれて草
むらにかくる。かしこに繩を張りて小社の跡をしる
し、こゝに石をすゑて其神と名のる。蓬しのぶ心の
まゝに生たるぞ、なか／＼にめでたきよりも心とゞ
まりける。

しのぶさへ枯て餅かふやどりかな

名護屋に入道のほど風吟す。

狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉

草枕犬もしぐるゝかよるの聲

雪見にありきて、

市人よこの笠賣らう雪の笠

旅人を見る。

紀行日記集

〔一〕「葉集」に、
「櫻の木」

〔二〕泊船集「一」
葉集「水」の
條「とす、籠
りの僧なるを
當時説りてコ
ハリの僧と云
ひならはした
るを其儘に使
ひたるならむ
か

馬をさへながむる雪のあしたかな

海邊に日暮して、

海暮て鴨の聲ほのかに白し

こゝに草鞋をとき、かしこに杖を捨て、旅寝なが
らに年の暮ければ、

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

といひくも山家に年を越て、

誰が聲ぞ齒朶に餅おふ丑のとし

奈良に出る道のほど、

春なれや名もなき山の薄霞

二月堂に籠りて、

水取や氷の僧の沓のおと

京に上りて三井秋風が鳴瀧の山家をとふ。

梅林

うめ白しきのふや鶴をぬすまれし

櫻の木の花にかまはぬすがたかな

伏見西岸寺任口上人に逢て、

我がきぬに伏見の桃の雫せよ

大津に出る道、山路をこえて、

山路来て何やらゆかしすみれ草

湖水の眺望

からさきの松は花より臙にて

晝のやすらひとて、旅店に腰をかけて、

つゝいけて其かげに干鱈さく女

吟行

茶ばたけに花見がほなるすゞめかな

水口にて廿年を経て故人に逢ふ。

命ふたつの中に生たる櫻かな

伊豆國蛭が小島の桑門、これも去年の秋より行脚

しけるに、我が名を聞て、草の枕の道づれにもと、

尾張の國まで跡をしたひ來りければ、

いざともに穂麥くらはん草枕

此僧我に告て云く、圓覺寺の大願和尚、ことしむ

月のはじめ遷化し給ふよし、まゝや夢の心地せらる

ゝに、先づ道より其角が許へ申つかはしける。

梅こひて卵の花をがむなみだかな

杜國におくる

白けしに羽も蝶のかたみ哉

二たび桐葉子がもとにありて、今や東に下らんとするに、

牡丹葉深くわけ出る蜂の名残哉

甲斐の山中に立よりて、

ゆく駒の麥になぐさむやどりかな

卯月の末、庵に歸り、旅のつかれをはらすほどに、

夏衣いまだしらみを取盡さず

本書には『晝のやすらひ』より『すゞめ』かな『まで無し』今『泊船集』によりて補ふ

『泊』一ともあり『活たる』とあり

『同』に『其角方』

『泊船集』に、『甲斐の國山家』

『本書』『歸り』の

『泊』により補ふ

鹿島 紀行 (貞享四年)

(探茶庵に傳はりし芭蕉自筆本を寛政二年に梅人の模刻したる「かしら紀行」による)

洛の真室須磨の浦の月見にゆきて、

松かげや月は三五夜中納言

と云けん狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋か

しまの山の月見んと思ひ立ことあり。伴ふ人ふたり

浪客の士獨り、獨は水雲の僧、僧はからすのごとく

なる墨の衣に三衣の袋をえりに打かけ、出山の尊像

を厨子にあがめ入て、うしろにせおひ、杖杖引なら

して無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩し

て出でぬ。今ひとり僧にもあらず、俗にもあらず

鳥鼠の間に名をかうふりの鳥なき島にもわたりぬべ

く、門より舟に乗て行徳と云處に至る。舟をあがれ

ば馬にもならず、細腰のちからをためさんと、かち

よりぞゆく。甲斐の國より或人のえさせたるひの木

もてつくれる笠をおのゝいたゞきよそひて、やは

たと云里を過ぐれば、かまかいの原と云ひろき野あ

り。秦句の一千里とかや。目もはるかに見たさる

、筑波山むかうに高く二峰並び立てり。かのもろ

こしに双剣のみねありと聞えしは廬山の二隅なり。

雪は申さず山はむらさきのつくば哉

とながめしは我門人嵐雪が句なり。すべて此山は日

本武尊のとばをつたへて、連歌する人のはじめにも

名付たり。和歌なくば有べからず、句なくば過ぐべ

からず。まことに愛すべき山のすがたなりけらし。蘇

は錦を地にしけらんやうにて、爲伸とやらんの長燈

に折入て、都のつとに持せたる風流にくからず。き

ちかう女郎花かるかや尾花みだれあひて、小男鹿の

つまこひわたるいとあはれなり。野の駒處えがほに

むれありく、又あはれなり。日既に暮かゝるほどに、

利根川のほとりふさと云處につく。此川にて鮭のあ

じろと云ものをたくみて、武江の市にひさぐものあ

り。青のほどは其漁家に入てやすらふ。よるのやど

なまぐさし。月くまなくはれけるまゝに、夜舟さし

くだして鹿島に至る。ひるより雨しきりに降りて月

見るべくもあらず。この麓に根本寺のさきの和尚、

今は世をのがれてこのところにおはしけると云を聞

『風俗文選』に

浪客の士、ひ

ととりは水雲の

僧

『本間自筆の家

に傳はれりと

稱する芭蕉自

筆本を寛保年

中秋瓜の模刻

せし『鹿島詣』

には下文の如

くあれど、本

書には『出山

の……せおひ

無し、今『鹿

島詣』により

て補ふ

『本書』『行徳に

いたる』今

『鹿島詣』に従

ふ

『先づむらさ

きの』

『同』に『爲伸

が長櫃』

『同』に『持た

せたるも』

『同』に『青の

ほど其漁家

に』

『同』に『この

麓』の『この

きて、尋ね入て臥ぬ。頗る人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく清淨の心を得るに似たり。曉の空いさゝかはれ間ありけるを、和尚おこし驚し侍れば、人々起出でぬ。月の光、雨の音、只あはれなる氣しきのみむねにみちて、いふべきほどの葉もなし。はる／＼と月見に來たるかひなきこそ本意なきわざなれ。かの何がしの女すら、時鳥の歌得よまで歸りわづらひしも、我がためにはよき荷擔の人ならんかし。をり／＼にかはらぬ空の月かけも 和尚

ちゞのながめは雲のまに／＼
月はやし梢は雨を持たながら 桃青

寺にねてまどがほなる月見かな 同
雨にねて竹おきかへる月見かな ソラ
月さびし堂の軒端の雨しづく 宗波

神前
此松の實ばえせし代や神の秋 桃青
ぬぐはじや石のおましの苔の露 宗波
膝折るやかしこまりなく鹿の聲 ソラ
野

(一)本書に「清淨あり、今「鹿島詣」に従ふ
(二)「鹿島詣」に、「はれけるを」
(三)本書「ことばもなし」とあり、今「鹿島詣」に従ふ
(四)本書に「花の秋」の句なし、
(五)「鹿島詣」に「りて袖」に又
(六)「鹿島詣」には、神前、田家、野と云ふ順に記せり
(七)「里の月」の句の初めの字本書に不明「鹿島詣」に従ひおく
(八)本書「自筆」とあり、今「鹿島詣」に従ふ
(九)「あるじ」を、「松江」かくす
(十)「桃青」と記す
(十一)本書「末五日」無し

卯辰 紀行 (元祿元年)

(別名「芳野紀行」)(乙州上梓「笈の小文」のうちより)

百骸九竅の中に物あり。かりに名付て風羅坊と云。誠にうすものゝ風に破れやすからんことを云にやあらん。かれ狂句を好むと久し。終に生涯のはかりごととなす。或時は倦て放擲せんとをおもひ、ある時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゞかうて是が爲に身安からず。しばらく身を立んことをねがへども、これが爲にさへられ、しばらく學て愚を曉ん事を思へども、是がために破られ、終に無能無藝にして、只此一筋につながら。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫道するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずと云となし。おもふ處月にあらずと云となし。儂花にあらずる時は、夷狄にひとし。心花にあらずる時は、鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸をはなれて、造化にしたがひ造化にかへれとなり。

もゝひきや一花摺の萩ごろも ソラ
花の秋草に喰ひあく野馬かな 同
萩原や一夜はやどせ山の犬 桃青

田家
かりかけし田づらの鶴や里の秋 おなじく
夜田かりに我やとはれん里の月 宗波
賤の子や稻すりかけて月をみる 桃青
芋の葉や月まつ里の焼ばたけ 同

歸路自準に宿す
塙せよわら干す宿の友すゞめ (七) あるじ
秋をこめたるくねの指杉 かく
月見むと汐ひきのぼる舟とめて ソラ
貞享丁卯仲秋末五日

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、
旅人とわが名よばれん初しぐれ
また山茶花を宿／＼にして

岩城の住、長太郎と云もの、此脇を付て其角亭において關送りせんともてたす。
時は秋よし野をこめし旅のつと

此句は露沾公より下し給はらせ侍りけるをはなむけのはじめとして、舊友親疎門人等、あるは詩歌文章をもて訪ひ或は草鞋の料を包て志を見す。かの三月の糲をあつむるに力を入す。紙布綿小など云もの帽子したうづやうの物、心々に送りつどひて霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけし、草庵に酒肴たづさへ來りてゆくへを祝し、名残を惜みなどするこそ、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覺えられけれ。

そも／＼道の日記と云ものは、紀氏長明阿佛の尼の、文をふるひ情を盡してより、餘はみな佛似かよひて其糟粕をあらたむるとあたはず。まして淺智短才

(一)本書「黄哥」とあれど「隨齋」の考に從ひて「黄奇」と改む

の筆に及ぶべくもあらず。其日は雨降、晝より晴れて、そこに松あり、かしこに何と云川ながれたりなど云と、たれ／＼も云べく覺侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云となかれ。されども其處／＼の風景心に残り、山館野亭の苦しき愁も、且つははなしの種となり、風雲の便りとも思ひなして、わすれぬ處／＼跡や先やと書集侍るぞ、猶醉ル者の怪語にひとしく、いねる人の謔言するたぐひに見なして、人また亡聽せよ。

鳴海にとまりて

星崎のやみを見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだててと詠じ給ひけるを、みづからかゝせ給ひてたまはりけるよしをかたるに、

京まではまだ半空や雪の雲

みかほの國保美と云處に、杜國が忍びて有けるをとぶらはんと、先づ越人に消息して、鳴海より跡ざまに二十五里尋ね歸りて、其夜よし田に泊る。

寒けれど二人ねる夜ぞたのもしき
あまつ繩手、田の中にほそ道ありて、海より吹上る風いと寒き處なり。

冬の日や馬上に氷るかけぼうし

保美村より伊良古崎へ一里ばかりも有べし。三河の國の地つゞきにて、伊勢とは海隔てたる處なれども、いかなる故にか萬葉集には伊勢の名所の内にえらび入られたり。此洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらこじろと云とかや。骨山と云は鷹を打處なり。南の海のはてにて、鷹のはじめてわたる所と云へり。いらこ鷹など歌にもよめりけりと思へば、なほあはれなる折ふし、

鷹ひとつ見つけてうれしいらこ崎

熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

蓬左の人／＼にむかひとられて、しばらく休息するほど、

箱根こす人もあるらしけさの雪

ある人の會

(二)「一葉集」に、
「現然と」

(三)本書「故主」にて「葉集」に從ひて補ふ

ためつけて雪見にまかる紙衣哉

いざゆかん雪見にころぶ處まで

或人興行

香を探る梅に藏見る軒端哉

此間美濃大垣岐阜のすきものとぶらひ來りて、歌仙あるは一折など度／＼に及ぶ。師走十日餘り名こ屋を出て舊里に入んとす。

旅ねして見しや浮世の煤はらひ

桑名よりくはで來ぬればと云日永の里より馬かりて杖つき坂のぼるほど荷鞍打かへりて馬より落ぬ。

かちならば杖つき坂を落馬かな

と物うさの餘り云出侍れども、終に季の詞入らず。

舊里や臍の緒に泣としのくれ

宵の年、空の名残をしまんと、酒飲み夜ふかして、元日寝わすれたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春

初 春

春立てまだ九日の野山かな

枯芝やや、陽炎の一二寸

紀行日記集

伊賀の國阿波の庄と云所に、俊乗上人の舊跡あり。護峰山新大佛寺とかや云。名ばかりは千歳のかたみとなりて、伽藍は破れて礎を残し、坊舎は絶て田畑と名のかはり、丈六の尊像は苔のみどりに埋れて、みぐしのみ現前とをがまれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ、其の代の名残うたがふ處なく、涙こぼるゝばかりなり。石の蓮臺、獅子の座などは蓬葎の上に堆く、双林の枯たる跡もまのあたりにこそおぼえられけれ。

丈六に陽炎高し石の上

(三)故主蟬吟公の庭にて

さま／＼の事もひ出す櫻かな

伊勢山田

何の木の花とはしらすにほひかな

裸にはまだきさらぎのあらし哉

菩提山

此山の悲しさ告よ野老ほり

龍尚舎

物の名をまづとふ芦のわかば哉

網代民部雪堂に會

梅の木になほやどり木や梅の花

草庵會

芋植て門は葎のわか葉かな

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有ことにや
と、神司などに尋侍れば、只何とはなし、おのづか
ら梅一もともなくて、子良の館のうしろに一もと侍
るよしをかたり傳ふ。

お子良子の一もとゆかしうめの花

神垣やおもひもかけず涅槃像

やよひ半過るほど、そゞろにうき立心の花の我を
道びく枝折と成りて、芳野の花におもひ立んとする
に、かのいらこ崎にて契り置し人の伊勢にて出むか
ひ、俱に旅ねのあはれをも見、且はわが爲に童子と
成りて道のたよりにもならんと、みづから萬菊丸と
名を云、まことにわらべらしき名のさまいと興あり。
いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに落書す。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜木笠

よし野にて我も見せうぞ檜木笠 萬菊丸

旅の具おほきは道のさはりなりと、物みなはらひ
捨たれども、よるの料にと紙衣ひとつ、合羽やうの
物、硯筆紙藥等書筒など、物に包てうしろにせお
ひたれば、いとと騰よわく、力なき身の跡さまにひか
ふるやうにて、道なほすゝます。只ものうき事のみ
多し。

草臥て宿かるころや藤のはな

はつ瀬

春の夜や籠。人ゆかし堂のすみ

足駄はく僧も見えたり花の雨

萬菊

葛城山

猶見たし花にあけゆく神の顔

三輪、多武峰、躰峠多武峰ヨリ龍門へ越道也

雲雀より空にやすらふ峠かな

龍門

龍門の花や上戸の土産にせん

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

西河

散花にたぶさはづかし奥の院 萬菊

和歌

行春に和歌の浦にて追付たり

紀三井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍のわたしを思
ひ、馬をかる時はいきまきし聖のと心にうかぶ。山
野海濱の美景に造化のたくみを見、あるは無依の道
者の跡をしたひ、風情の人の實をうかぶ。猶栖を
去りて器物のねがひなし。空手なれば途中のうれひ
もなし。寛歩駕にかへ、晩食肉よりもあまし。泊る
べき道に限りなく、立べき朝に時なし。只一日の願
ひ二つのみ。こよひよき宿からん、草鞋の我足によ
ろしきをもとめんとばかりはいさゝかの思ひなり。
時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ。もしわづかに
風雅ある人に出あひたるよろこびかぎりなし。日頃
は古めかしくかたくなゝりとにくみ捨たるほどの人
も、邊土の道づれにかたりあひ、はにふ葎のうちに
て見出したるなど、瓦のうちに玉を拾ひ、泥中にこが
ねをえたる心地して、物にも書付け人にもかたらん

高野

父母のしきりに戀しきじの聲

紀行日記集

(一)『布引の瀧』以
下の一段は竊
入なるべし、
『大和』の二字
恐くは衍。
(二)『和歌』は『和
歌の浦』の誤
ならん。
(三)『紀三井寺』の
次、恐くは句
を逸したるな
らん。

とおもふぞ、又これ旅のひとつなりかし。

衣 更

ひとつ脱いでうしろにおひぬころもがへ

よし野出て布子賣たしころもがへ 萬 菊

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子を
うむを見て、此日においてをかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子かな

招提寺鑑真和尚來朝の時、船中七十餘度の難をし
のぎ給ひ、御目のうち颯風吹入て、終に御目盲させ
給ふ尊像を拜して、

わか葉して御目のしづくぬくはゞや

舊友に奈良にてわかる。

鹿の角まづ一ふしのわかれかな

大阪にてある人の許にて。

杜若かたるも旅のひとつかな

須 磨

月はあれど留主のやうなり須磨の夏

月見ても物物たらはずや須磨の夏

卯月中頃の空も臙に残りて、はかなきみじか夜の

月もいと艶なるに、山はわかばにくろみかゝりて、
時鳥啼出づべきしのゝめも、海の方よりしらみそめ
たるに、上野とおぼしき所は、麥の穂なみあからみあ
ひて、漁人の軒ちかきけしの花のたえんくに見わた
さる。

海士のかほまづみらるゝやけしの花

東須磨、西須磨、濱須磨の三處にわかれて、あな
がちに何わざするとも見えす。もしほたれつゝなど
歌にも聞え侍るも、今はかゝるわざするなども見え
す。きすと云魚をあみして眞砂の上に干しちらし
けるを、鳥の飛來りてつかみ去る、これをにくみて
弓をもておどすぞ海士のわざとも見えす。もし古戦
場の餘波をとめて、かゝる事をなすにやといとゞ
罪深く、なほ昔の戀しきまゝに、てつかいが峯にのぼ
らんとする。導きする子のくるしがりて、とかくいひ
まぎらはすを、さまざまにすかして、麓の茶店にて物
くらはすべきなどいひて、わりなき體に見えたり。か
れは十六と云けん、里の童子よりは四つばかりも弟
なるべきを、數百丈の先達として羊腸嶮岨の岩根を

はひのぼれば、すべり落ぬべきとあまたゝびなりけ
るを、つゝ根笹にとりつき、息をきらし汗をひたし
て、漸雲門に入こそ、心許なき導師の力なりけらし。

須磨の海士の矢先に啼やほとゝぎす

時鳥きえゆく方や鳥ひとつ

須磨寺やふかね笛きく木下闇

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

(一)『葉集』に、
『秋なりける
とかや』
此一段錯誤あ
るが如し。

(二)『同』に『左右
にわかる』
『同』に『琴琵琶
など』

かゝる處の秋なりけりとかや、此の浦の實は秋を
むねとするなるべし。悲しき淋しさいはんかたなく、
秋なりせば、いさゝか心のはしをも云出べきものを
とおもふぞ、我心匠の拙きをしらぬに似たり。淡路島
手にとるやうに見えて、須磨明石の海^(三)右左にわかる。
吳楚東南のながめも斯る處にや。物しれる人の見侍
らば、さまざまのさかひにも思ひなぞらふるべし。
又うしろの方に山を隔て、田井の畑と云處、松風村
雨ふる里といへり。尾上つゞき丹波路へかよふ道あ
り。鉢伏のぞき、逆落などおそろしき名のみ残て、鐘
掛松より見下すに、一の谷内裡やしき目の下に見ゆ。

共代のみだれ其時のさわぎ、さながら心にうかび傳
につどひて、二位の尼君皇子をいただきたてまつり、
女院の御裳に御足もたれ船屋形にまろび入らせ給ふ
御ありさま、内侍局女嬭^(四)賀子のたぐひ、さまざまの御
調度もてあつかひ、琵琶^(五)琴などしとね蒲團にくる
みて船中になげ入、供御はこぼれてうろくづの餌と
なり、櫓筒はみだれて海士の捨草となりつゝ、千歳
のかなしひ此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁おほ
く侍るぞや。

更科紀行 (元祿元年)

(百我菰芭蕉筆更科紀行の敷衍による)

(一) 笈の小文に「獨旅」と誤る
(二) 「葉集」は「群路」と誤る
(三) 笈の小文に「大河ながれ」「大河ながれ岸下千尋の」
(四) 「葉集」に「めくるめき」
(五) 同一に「頭をたさきて」
(六) 同一に「旅情」と誤る
(七) 「推量して」は「シハカリテ」と誤る
(八) 「推量して」は「シハカリテ」と誤る
(九) 「推量して」は「シハカリテ」と誤る
(一〇) 「推量して」は「シハカリテ」と誤る

さらしなの里城捨山の月見んと、しきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて、俱に風雲の情を狂はすもの、又ひとり越人と云。木曾路は山深く道さかしく旅ねの力も心もとなしと、荷分子が奴僕をして送らす。おの／＼こゝろざし盡すといへども、羈旅の事心えぬさまにて、ともにおぼつかなく、物事のしどろに跡さきなるも、なか／＼にをかききとのみおほし。何と云處にて六十ばかりの道心の僧、おもしろげもをかしげもあらず只むつむつとしたるが腰たわむまで物おひ息はせはしく、足はきさむやうにあゆみ來れるを、伴ひける人のあはれがりて、おの／＼肩にかけたる物ども、かの僧のおひね物と一にからみて、馬につけて我を其上にのす。高山奇峰の頭上におほひかさなりて、ひだりは大川ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず。只あやふき煩ひのみ止む時なし。

かけはし、ねざめなど過て、猿が馬場たち峠などは四十八曲りとかや。九折かさなりて雲路にたどる心地せらる。歩行より行くものさへ眼くるめき、たましひしほみて足さたまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそる／＼けしき見えす。馬の上にてたゞねぶりに眠りて、落ぬべきとあまた／＼びなりけるを、跡より見あげて危きとかがりなし。佛の御心に衆生のうき世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしさも我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり。夜は草の枕をもとめて、ひるのうち思ひまうけたるけしき、結び捨たる發句など、矢立取出て燈のもとに目をとち頭た／＼きてうめき伏せば、かの道心の坊、旅懐の心うくて物思ひするにやと推量て、我を慰んとす。わかき時拜みめぐりたる地、あみだの尊き、數を盡しおのがあやしと思ひし事ども話つづくるぞ、風情のさはりとなりて何を云出るともせず。とてもまぎれたる月影の壁の破れより木の間がくれにさし入て、引板の音鹿おふ聲處／＼に聞えける、まことに悲しき秋のこゝろこゝに

寫者の手落か「笈の小文」に「其の」は「な」
(八) とも「は」本書の模様を見るに「云出る事もせず」より直ちに「まぎれたるやうに」を直して「し忘れたるやうなり」されど暫く流布の體に従ふ
(九) 「葉集」に「瑠璃」
(一〇) 本書「せらるも」とあれど、今「葉集」に「駒むかひ」
(一一) 「葉集」に「駒むかひ」
(一二) 本書には「更科」の句を「霧はれて」の次に置き次に「城捨山」と前書して「佛や」以下の句を並べ、城捨山は「快く」再案に入れたるなるべし、今「葉集」

盡せり。いでや月のあるじに酒ふるまはんといへば、盃持出たり。よのつねに一めぐりも大きに見えて、ふつ／＼かなる蒔繪をしたり。都の人は斯るものは風情なしとて手にもふれざりけるに、思ひもかけぬ興に入て瑠璃玉卮の心地せらるゝも處がらなり。
あの中に蒔繪書たし宿の月
かけはしやいのちをからむ蔭かつら
かけはしやまづおもひ出づ駒むかへ
霧はれて棧は目もふさがれず
越人
城捨山は、八幡と云里より一里ばかり南に、西南に横をれて、すさまじく高くもあらず、かど／＼しき岩なども見えす、只あはれ深き山のすがたなり。なぐさめかねしといひけんも、とわりしられて、そゞろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いと涙も落そひければ、
佛や城ひとり泣月の友
いざよひもまだ更科の郡かな
更科や三よさの月見雲もなし
越人
ひよろ／＼と猶露けしやをみなへし

身にしみて大根からしの秋の風
木曾の椽うき世の人のみやげかな
送られつおくりつはては木曾の秋
善光寺
月影や四門四宗も只ひとつ
吹飛す石は浅間の野分かな

おくのほそ道 (元禄二年)

月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふるものは日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて漂泊の思ひやます。海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひてや、年も暮春立る霞の空に白川の關こえんと、そとろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、も、引の破をつどり笠の緒付かへて三里に灸すゆるより、松島の月まづ心にかゝりて、住る方は人に譲り杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱にかけ置、やよひも末の七日、明ぼの空朧々として、月は有明にて光りをさまれるものから、不二の峰かすかに見えて、上野谷中の花の梢またいつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは

宵よりつどひて舟に乗て送る。千じゆと云處にて舟をあがれば、前途三千里の思ひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の涙をそそぐ。

ゆく春や鳥啼魚の日は泪

これを矢立のはじめとして、行道猶すゝます。人々は途中に立ならびて、後かけの見ゆるまではと見送るなるべし。

とし元禄二とせにや、奥羽長途の行脚只かりそめに思ひたち、吳天に白髪を重ぬといへども、耳にふれていまだ目に見ぬさかひ、もし生て歸らばと定めなきたのみの末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり着にけり。疲骨の肩にかゝれる物先苦しむ。只身すがらにと出立侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさがたき籠などしたるは、さすがに打捨がたくて、路次の煩ひとなれるこそわりなけれ。

室の八島に詣す。同行曾良が曰、此神は木の花さくや姫の神と申て富士一體也。無戸室に入て焼給ふちかひのみに、火々出見の尊生れ給ひしより、室

集ふによりて
文にこの小
文を缺く

(二) 本書「木曾の

とち」の次に

「身にしみて」

を「今」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

序に「全」の

曾良

曾良

曾良は河合氏にして惣五郎といへり。芭蕉の下葉に軒をならべて予が薪水の勞をたすく。此たび松島象潟のながめ共にせんを悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立曉、髪を剃て黒染にさまをかへ、惣五をあらためて宗悟とす。仍て黒髮山の句あり。衣更の二字力ありて聞ゆ。

二十餘丁山を登つて瀧あり。岩洞の頂より飛流して、百尺千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て、瀧の裏より見れば、うらみの瀧と申傳へ侍る也。

しばらくは瀧にこもるや夏のはじめ

那須の黒ばねと云處にしろ人あれば、是より野越にかゝりて直道(直)をゆかんとす。遙に一村を見かけてゆくに、雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて明れば又野中をゆく。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず。いかゞすべきや。されども此野は縦横にわかれて、うゐ／＼しき旅人の道ふみたがへんあやしう侍れば、此馬のとゞまる處にて馬をかへし給へと、かし侍りぬ。ちひさきものふたり馬の跡したひ

(一) 同「曾良
は」の次に
「は」なし

(二) 同「直路
を」

(一) 本書「芭蕉の文は芭蕉が素龍を連れて書して云ふ奥の細道を去る來が書したるを書し書によれり

(二) 其角筆の「奥の細道」には「代は」とあり(一七) 同「鳥は啼」

てはしる。ひとりは小姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結付て馬を返しぬ。

黒羽の館代淨坊寺何がしの方に音信る。思ひかけぬあるじの悦び、日夜語つゞけて、其弟桃翠など云が朝夕つとめ訪らひ、みづからの家にも伴ひて、親屬の方にもまねかれ日を経るまゝに、ひと日郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須のしの原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣。與市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八まんとかひしも此神社にて侍るときけば、感應殊にしきりに覺へらる。暮れば桃翠宅に歸る。修驗光明寺と云あり。そこにまねかれて行者堂を拜す。

其角筆に「桃翠が家」
「同」に「口付のこ」と

夏山に足駄ををがむ首途かな

當國雲岸寺のおくに佛頂和尚山居の跡あり。

たてよこの五尺にたらぬ草のいほ

むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍るといつぞや聞え給ふ。其跡見んと雲岸寺に杖をひけば、人々すゝんでともにいざなひ、若き人おほく、道のほど打さわぎておぼえずかの麓に至る。山はおくあるけしきにて、谷道はるかに、松杉黒く苦したりて、卯月の天今猶寒し。十景盡る所橋を渡りて山門に入。

さてかの跡はいつくのほどにやと、後の山によちのぼれば、石上の小庵、岩窟に結ひかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るがごとし。

木啄も庵は破らず夏木立

と取あへぬ一句を柱に残し侍りし。これより殺生石にゆく。館代より馬にて送らる。此口付のをのこ短冊えさせよと乞。やさしきことを望み侍るものかなと、

野を横に馬ひきむけよほととぎす

殺生石は温泉の出る山かけにあり。石の毒氣いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又清水ながるゝの柳は芦野の里にあり

て田の畔に残る。此處の郡守戸部某の此柳見せばやなどをり／＼にのたまひ聞え給ふを、いつくのほどにやとおもひしを、今日此柳のかけにこそたちより侍りつれ。

田一枚植てたちさる柳かな

心許なき日かす重なるまゝに、しら川の關にかゝりて旅心さだまりぬ。いかで都へとたよりもとめしもとわり也。中にも此關は三關の一にして、風騒の人心をとゞむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に茨の花の咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裝を改しとなど、清輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

うの花をかざしに關のはれ着かな 曾良

とかくしてこえゆくまゝに、あぶくま川をわたる。ひだりに會津根高く、右に岩城相馬三春の庄、常陸下野の地をさかひて山つらなる。かけ沼と云處をゆくに、けふは空曇て物影うつらす。すか川の驛に等躬と云ものを尋て四五日とゞめらる。先しら川の關いかにこえつるやと問。長途の苦しみ身心つかれ、

「同」に「空くもりて影うつらす」
「去來寫」に、「窮」に誤る
「葉集」に、「一巻」と誤る

且は風景に魂うばわれ懐舊に腸を断て、はか／＼しう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植歌

無下にこえんもさすがにとかたれば、脇第三とつゞけて三巻となしぬ。此宿のかたはらに大なる栗の木かけをたのみて、世をいとふ僧あり。椽拾ふ太山もかくやと間におぼえられて、物に書付侍る。其詞、栗と云文字は西の木と書て西方淨土にたよりありと行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用ひ給ふとかや

世の人の見付けぬ花や軒の栗

等躬が宅を出て、五里計り、楡皮の宿を離れてあさか山有。路よりちかし。此あたり沼おほし。かつみ刈ころもやゝ近うなれば、いづれの草を花がつみとは云ぞと人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋ね、人にとひ、かつみ／＼と尋ねありきて、日は山のはにかゝりぬ。二本松より右にきれて黒塚の岩屋一見し、福島にやどる。あくればしのぶもち摺の石を尋て忍の里にゆく。はるか山かけの小里に石半土

(一)其角筆「に
『わらべの来
て』

に埋てあり。里の麓部の来りてをしへける。昔は此
山の上に侍しを、往來の人の麥草をあらして、此石
をこゝろみ侍をにくみて、此谷につき落せば、石の
面下さまにふしたりと云。さもあるべきとにや。

早苗とる手もとやむかししのぶすり

月の輪のわたしをこえて瀬の上と云宿に出づ。佐
藤庄司が舊跡は左の山際一里半ばかりにあり。飯塚
の里鯖野と聞て、尋／＼ゆくに、丸山と云に尋ねあ
たる。是庄司が舊館なり。麓に大手の跡など人のを
しゆるにまかせて涙を落し、又かたはらの古寺に一
家の石碑を残す。中にも二人の嫁がしるし先あはれ
なり。女なれどもかひ／＼しき名の世に聞えつるも
のかなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらす
寺に入て茶を乞げ、こゝに義經の太刀辨慶が笈をと
めて什物とす。

けて臥す。夜に入て雷鳴雨しきりに降て、臥る上よ
りも、蚤蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこり
て消入計りになん。短夜の空もやう／＼明れば、又
旅立ぬ。猶よるの餘波心すゝます。馬かりて桑折の
驛に出る。遙なる行末をかへて、斯る病ひ覺東な
しといへど、羸旅邊土の行脚捨身無常の觀念、道路
に死ん是天の命なりと氣力いさゝか取直し、道縦横
に踏て伊達の大木戸をこす。笠指白石の城を過、笠
島の郡に入れば、藤中將實方の塚は、いづくのほどな
らんと人にとへば、これよりはるか右に見ゆる山際
の里をみのわ笠島と云。道祖神の社かたみのすゝき
今にありとをしゆ。此頃のさみだれに道いとあしく
身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、糞輪
笠島もさみだれの折にふれたりと、

笠じまはいづこ五月のぬかり道

岩沼にやどる。

武隈の松にこそめ覺る心地はすれ。根は土際より
二木にわかれて、むかしの姿うしなはずとしらる。
先能因法師おもひ出づ。往昔むつのかみにて下りし

(二)同「に丸山
の跡など尋ね
あたる是庄司
が舊館なり人
の教ゆるに任
せて泪をおと
し」
(三)同「と扶
をぬらしぬ」
の字なし
(四)「去來寫」に
「藤波」と誤
(五)「其角筆」に
「五日」と誤る
(六)「同」に「飯塚
にやどる」
(七)「同」に「臥る
上よりは南も
り」
(八)「同」に「蚤蚊
にせゝられて」
(九)「同」に「馬を
かりて」

人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあ
ればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代々あ
るは伐、或は植繼などせしと聞に、今將千歳のかた
ちとゝのほひて、めで度松のけしきになん侍りし。

たけくまの松見せ申せ遅ざくらと、學白と
いふものゝ饒別したりければ、

櫻より松は二木を三月越

名取川を渡て仙臺に入る。あやめふく日也。旅宿
をもとめて四五日逗留す。こゝに畫工加右衛門と云
ものあり、聊か心ある者と聞て知る人になる。此も
の年頃さだかならぬ名ところを考置侍ればとて一日
案内す。宮城野の萩しげりあひて秋のけしきおもひ
やらるゝ。玉田横野つゝじが岡をあをひ咲ころ也。
日かげもらぬ松の林に入て爰を木の下と云とぞ。昔
もかく露ふかければこそ、みさぶらひみかさとはよ
みたれ。藥師堂天神のみやしろなどをがみて其日は
くれぬ。納松島鹽がまの處々畫に書て贈る。且紺の
染緒付たる草鞋二足篋す。さればこそ風流のしれも
の爰に至て其實をあらはす。

あやめ草足に結ばん(五)わらぢの緒
かの畫圖にまかせてたどりゆけば、おくのほそ道
の山際に十符の菅あり。今年々十符の菅蕪を調て
國守に獻すと云り。

壺 碑 市川村多賀城に有

つぼの石ぶみは高さ六尺餘横三尺ばかりか。苔を
穿て文字かすかなり。四維國界の數里を記す。此城
神龜元年按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所里也天
平寶字六年參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣朝獨
修造而十二月朔日と有。聖武皇帝の御時に當れり。
昔よりよみおける歌枕おほくかたり傳ふといへど
も、山崩れ川落て道あらたまり、石は埋て土にかく
れ、木は老てわか木にかはれば、時うつり代變じて
其跡たしかならぬ事のみを、こゝに至て疑ひなき千
歳のかたみ、今眼前に古人の心を聞す。行脚の一徳
存命の悦び、羸旅の勞をわすれて涙も落るばかりな
り。

それより野田の玉川沖の石を尋ぬ。末の松山は寺
を造りて末松山と云。松の間／＼みな墓原にて、は

(一)同「に武隈
の松みせ申せ
遅ざくら學白
とせんべらし
たりければ」
(二)「同」に「玉田
横野のつゝじ
が岡は」
(三)「去來寫」に
「畫」を「畫」に
「贈」を「送」に
誤る
(四)「其角筆」に
「わらづ一足」
(五)「同」に「わら
づの緒」
(六)「數里」恐くは
「里數」ならん
(七)「壺碑」の原文に
比するに誤脱
多し

(一)「其角筆」に「終りは斯くのみ」と

(二)「去來寫」に「淨」を「上」に認る

(三)「其角筆」に「古き」なし
(四)「本書」住命「今」ふ「葉集」に従ふ
(五)「其角筆」に「海入て」
(六)「同」に「人と」も

(一)「誤記あらんも思ひ得ず」

(二)「其角筆」に「寝られず」

(三)「同」に「其のちに」なし
(四)「同」に「光か」
(五)「和」は「衍」

ねをかはし枝をつらぬる契の末も、終りは斯くの如きと悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相の鐘を聞。

さみだれの空いさゝかはれて夕月夜かすかに、まがきが島もほどちかし。あまの小ぶねこぎつれて、さかなわかつ聲／＼につなでかなしもとよみけん心もしられていとゞあはれなり。其夜目盲法師の琵琶をならしておく淨るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て、枕ちかうかしがましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから殊勝に覺らる。早朝鹽がまの明神に詣。國守再興せられて宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに石の階九段に重り、朝日あけの玉がきをかゞやかす。斯る道の果塵土のさかひまで、神靈あらたにましますこそ吾國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈あり。かねの戸びらの面に文治三年和泉三郎奇進と有。五百年來の佛、今日の前にうかびてそゞろに珍らし。かれは勇義忠孝の士なり。住名今に至てしたはずと云となし。誠人の道をつとめ義を守べし、名もまたこれにしたがふといへり。日既に午にちか

し。舟をかりて松島にわたる。其間二里餘、雄島の磯につく。

そも／＼事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥す。東南より海を入て江の中三里、浙江の潮をたゞふ。しま／＼の數を盡して歎つものは天をゆびさし、伏ものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり、三重にたゞみて、左にわかれ、右につらなる。おへるあり抱る有。兒孫愛すがごとし。松のみどりこまやかに、枝葉汐風に吹撓めて、屈曲おのづからためたるがごとし。其氣色自然として、美人の顔をよそほふ。千はやふる神のむかし、大山すみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきて海に出たる島也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木かげに世をいとふ人もまれ／＼見え侍りて、落穂松笠などうちけぶりたる草の庵しづかに住なし、いかなる人とはしられずながら先なつかしく立よるほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸て宿

をもとむれば、窓をひらき二階を作て、風雲の中に旅ねするこそあやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゞぎす 曾良
予は口を閉て、眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松島の詩あり。原安適松がうら島の和歌をおくらる。袋を解てこよひの友とす。且杉風濁子が發句有。

十一日瑞岩寺に詣。當寺三十二世のむかし、眞壁の平四郎出家して入唐歸朝の後開山す。其のちに雲居禪師の徳化に依て、七堂覺あらたまりて、金壁莊嚴光をかゞやかし。佛土成就の大伽藍とはなれりける。かの見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳へて、人跡まれに雉兎菟菟のゆきかふ道そこともわかず、終に道ふみたがへて、石の巻と云みなどにいづ。こがね花咲とよみてたてまつりたる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、かまどの煙たちつゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れるかなと、宿からんとすれ

ど、更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜を明して、明れば又しらぬ道まよひ行。袖のわたり、尾ぶちの牧、まのゝ萱原などよそめに見て、遙なる堤を行。こゝろぼそき長沼にそうて、戸伊摩と云處に一宿して平泉に至る。其間二十餘里ほどと覺ゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野に成て、金雞山のみかたちを殘す。先高館にのぼれば、北上川南部よりながるゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入。康衡等が舊跡は衣が關を隔て南部口をさしかため、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐりて此城に籠り、功名一時の草むらとなる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打數て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと
うの花に兼房見ゆる白毛かな 曾良
兼て耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散うせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽て、既

に類廢空虛の叢となるべきを、四面あらたにかこみて、蕨を覆て風雨をしのぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

さみだれの降凌してや光堂

南部道はるかに見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎みつの小島を過て、なるこの湯より尿前の關にかゝりて、出羽國にこえんとす。此路旅人まれなる處なれば、關守にあやしめられて漸として關をこす。大山をのぼりて日既に暮ければ、封人の家を見かけて舎りをもとむ。三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。

蚤しらみ馬の尿する枕もと

あるじの云、これより出羽國に、大山を隔て道さだかならざれば、道しるべの人をたのみてこゆべきよしを申。さらばと云て、人をたのみ侍れば、究竟の若もの、反脇差を横たへ、櫻の杖を携て、我々が先に立て行。けふこそ必危きめにもあふべき日なれと、からき思ひをなしてうしろに付てゆく。あるじの云にたがはず、高山森々として一鳥聲聞す。木の

下閣しげりあひてよるゆくがごとし。雲端につちふる心地して、笹の中踏分、水をわたり岩に懸て、肌につめたき汗をながして最上の庄に出。かの案内せしをのこの云やう、此道必不用の事あり。恙なう送りまゐらせて仕合したりと悦てわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞろくのみなり。

尾花澤にて清風と云ものを尋ぬ。かれは富るものなれども志いやしからず。都にも折、かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日頃とゞめて長途のいたはり、さまざまにもてなし侍る。

涼しさを我やどにしてねまるなり

はひ出よかひ屋が下のひきの聲

眉掃を佛にして紅粉の花

靈飼する人は古代のすがたかな 曾良

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊清閑の地なり。一見すべきよし人々のすむるに依て、尾花澤より取てかへし、其間七里ばかりなり。日いまだ暮す、麓の坊に宿かり置て山上の堂にのぼる。岩に巖をかさねて山とし、松柏年ふり土

其角筆に
「小黒崎の」

「に」 恐くは
「は」
「用」 恐くは
「應」
其角筆に「殊勝閣」

「岸」 恐くは
「崖」

其角筆に
「し」 込込
「同」に「もが
み川」のらん
と

石老て苔滑に、岩上の院、扉を閉て、物の音聞えず。岸をめぐり岩をはうて佛閣を拜し、佳景寂寥として心すみゆくのみおぼゆ。

しづかさや岩にしみ入蟬の聲

もがみ川をのらんと大石田と云處に日和をまつ。こゝに古き誹諧の種こぼれて、わすれぬ花のむかしをしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此道にさぐり足して、新古ふた道にふみまよふといへども、道しるべする人しなればと、わりなき一卷を残しぬ。此たびの風流こゝに至れり。

もがみ川はみちのくより出て、山形を水上とす。ごてんはやぶさなど云おそろしき難所あり。板敷山の北をながれて果は酒田の海に入。左右山覆ひ茂みの中に舟を下す。これに稻つみたるをやいなふねと云ならし。白糸の瀧の青葉のひまゝに落て、仙人堂岸に臨て立。水みなぎりて舟あやうし。

さみだれを集めてはやしもがみ川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云ものを尋て、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して

憤怒の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において誹諧興行

有がたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣。當山開關能除大師はいづれの代の人と云をしらす。延喜式に羽州里山の神社とあり。書寫黒の字を里山となせるにや。羽州黒山を中畧して羽黒山と云にや。出羽といへるも鳥の毛羽を此國の貢に獻ると風土記に待るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに圓頓融通の法の灯かゞげそひて僧坊棟をならべ、修驗行法をばげまし、靈山靈地の驗効人賞び且恐る。繁榮長にして、めでたき御山と謂つべし。

八日、月山に登る。木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭をつゝみ、強力と云ものに道びかれて雲霧山氣の中に氷雪を踏で登ると八里、更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息絶身こゝえて頂上に臻れば、日没て月あらはる。笹を敷蓐を枕として臥て明るを待。日出て雲消れば湯殿に下る。

〔一〕葉集『ひらくあり』と

〔二〕其角筆に

〔三〕莫作は『纂索』をよしとす

〔四〕其角筆に『象潟の酒』に

谷のかたはらに鍛冶小屋と云あり。此國の鍛冶鑿水をえらびてこゝに潔齋して劍を打終、月山と銘をきりて世に賞せらる。かの龍泉に劍を淬とかや。干將莫耶の昔をしたふ道に堪能の執淺からぬ事しられたり。岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる櫻のつぼみ半はひらけるあり。降積雪の下に埋て春をわすれぬ遅櫻の花のこゝろわりなし。炎天の梅花こゝに薫るが如し。行尊僧正の歌のあはれもこゝに思ひ出て猶まさりて覺ゆ。惣而此山中の微細、行者の法式として他言するを禁す。仍て筆をとめて記さす。坊に歸れば阿闍梨の需に依て、三山順禮の句々短冊に書。

涼しさやほの三日月の羽黒山
雲の峯いくつくづれて月の山
かたられぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山錢ふむ道のなみだかな

曾良

羽黒を立て、鶴が岡の城下長山氏重行と云物のふの家むかへられて誹諧一卷有。左吉も俱に送りぬ。川舟に乗て酒田のみなとに下る。淵庵不玉と云醫師

の許を宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
暑き日を海に入たりもがみ川

江山水陸の風光敷を盡して今象潟に方寸をせめ、酒田の湊より東北の方、山をこえ磯を傳ひ、いさごを踏て其際十里、日影やゝかたぶく頃汐風眞砂を吹上、雨靡靡として鳥海山かくる。闇中に莫作して雨も又奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、あまの宮屋に膝を入れて雨の晴をまつ。其朝天よくはれて朝日はなやかにさし出るほどに、象潟に舟をうかぶ。先能因島に舟をよせて三年幽居の跡を訪らひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こごと詠れし櫻の老木西行法師の記念を殘す。江上に御陵あり神功后宮の御墓と云、寺を干満珠寺と云、此處に行幸ありしといまだ聞ず、いかなる事にや。此寺の方丈に坐して簾を捲ば、風景一眼の中に盡て、南に鳥海天をさゝえ、其かげうつりて江にあり。西はむやゝの關路をかきり、東に堤を築て秋田にかよふ道遙に海北にかまへて、浪打入る處を汐ごしと云。江の縦横一里ばかり俤

松島にかよひて又ことなり。松しまは咲ふがごとく象潟はうらむがごとし。さびしさに悲しみをくはへて、地勢魂をなやますに似たり。

きさがたや雨に西施がねぶの花
汐ごしや鶴雁ぬれて海すゞし

祭禮

象潟や料理何くふ神まつり
あまの家や戸板を敷て夕すゞみ
岩上に雌鳩の巢を見る

曾良

酒田の名殘日をかさねて北陸道の雲に望。遙々の思ひ胸をいたしまして、加賀の府まで百三十里と聞。鼠の關をこゆれば、越後の地にあゆみをあらためて、越中國一ぶりの關に至る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病發りて事を記さす。

文月や六日も常の夜には似ず
あら海や佐渡に横たふ天河

けふは親しらす子しらす犬もどり駒がへしなど云
北國一の難所をこえてつかれ侍ば、枕引よせて寝た

紀行日記集

るに、一聞隔て面の方に、若き女の聲一人計と聞ゆ、年老たるをこの聲も交て物語するをきけば、越後國新潟と云所の遊女なりし。伊勢參宮するとて此關までをこの送て、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。しら波のよする汀に身をはふらかし、あまの子の世をあさましう下りて、さだめなき契、日々の業因、いかにつたなしと、ものいふを聞／＼寢入て、あした旅立に、我々にむかひて、ゆくへしらぬ旅路のうさ餘り覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣のうへの御情に、大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へと涙を落す。不便のまには侍れども、われ／＼は處々にてとゞまる方おほし。只人のゆくにまかせてゆくべし。神明の加護必つゝがなかるべしと云捨て出つゝ、哀さしばらくやまさりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書とゞめ侍る。くろべ四十八が瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきもの

をと人に尋れば、是より五里磯傳ひしてむかふの山
蔭に入り、あまの宮ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿
かすものあるまじといひをどされて加賀國に入。

わせたの香やわけ入右は有磯海

卯の花山くりからが谷をこえて、金澤は七月中の
五日也。こゝに大阪よりかよふ商人何處と云ものあ
り。それが旅宿を供にす。一笑と云ものは此道にす
ける名のほの／＼聞えて、世に知人も侍しに去年の
冬早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚も動け我泣聲はあきのかぜ

ある草庵にいざなはれて

秋すゞし手ごとむけや瓜茄子

途中喰

あか／＼と日は難面も秋の風

小松と云處にて

しほらしき名や小松吹萩芒

此處、太田の神社に詣。眞盛が甲錦の切あり。

往昔源氏に屬せし時、義朝公よりたまはらせ給ふと
かや。げにも平士のものにあらず。目底より吹かへ

しまで菊から草のほりもの、金をちりばめ龍頭に鍔
形打たり。眞盛討死の後、木曾義仲廟狀にそへて此
社にこめられ侍よし、樋口の次郎が使せし事どもま
のあたり縁記に見えたり。

むざんやなかぶとの下のきり／＼す

山中の温泉にゆくほど、しら根が嶽跡に見なして
あゆむ。左の山際に観音堂あり。花山の法皇三十三所
の順禮達させ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひ
て、那谷と名付給ふとかや。那智谷組の二字をわか
ち侍しとぞ。奇石さま／＼に、古松植ならべて、蘆ぶ
きの小堂、岩の上に造りかけて殊勝の土地也。

石山の石よりしろし秋の風

温泉に浴す。其功有明に次と云。

山中や菊は手をらぬ湯のにほひ

あるじとするものは久米之助とていまだ小童也。

かれが父誹諧を好み、洛の貞室若輩のむかしこゝに
來りし頃、風雅にはづかしめられて、洛に歸て貞徳
老人の門人と成て世にしらる。功名の後此一村判詞
の料を請すと云。今更むかしがたりとは成ぬ。

曾良は腹を病て伊勢國長島と云處にゆかりあれば
先立て行に、

ゆき／＼てたふれ伏とも秋のはら 曾良

と書置たり。行もの、悲しみ、残るもの、うらみ、
雙鳥のわかれて雲にまよふがごとし。予もまた

けふよりや書付けさん笠の露

大聖寺の城外全昌寺と云寺に泊る。猶加賀の地な
り。曾良も前の夜此寺にとまりて、

終宵秋風聞やうらの山

と残す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞つゝ衆
寮に臥ば、明ぼの、空近う讀經聲すむまゝに、鐘板鳴
て食堂に入。けふは越前の國へと、心早卒にして堂
下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとま
でおひ來る。折節庭中の柳ちれば、

庭掃て出るや寺にちる柳

取あへぬさまして草鞋ながら書拾つ。越前の境吉崎
の入江を舟に棹さして汐越の松を尋ぬ。

夜もすがら嵐に波をはこばせて

月をたれたる汐ごしの松

西行

此一首にて數景盡たり。もし一掃を加ふるものは無
用の指を立るがごとし。

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又金澤の
北枝と云もの假初に見送て此處までしたひ來る。處
々の風景過さす思ひつゞけて、折節あはれなる作意
など聞ゆ。今既にわかれに望みて、

物書て扇引さく餘波かな

五十丁山に入て永平寺を禮す。道元禪師の御寺な
り。邦機千里を避てかゝる山かけに跡を残し給ふも
貴き故有とかや。福井は三里ばかりなれば、夕飯し
たゝめて出るに、たそがれの道たど／＼し。こゝに
等我と云古き隠士あり。いづれの年にか江戸に來り
て予を尋ぬ。遙十とせあまりなり。いかに老さらば
ひてあるにや將死けるにやと、人に尋ね侍れば、い
まだ存命してそこ／＼とをしゆ。市中ひそかに引入
て、あやしの小家に夕顔糸瓜のはえかかりて、雞頭
は、きき／＼に戸ぼそを隠す。さては此うちこそと門
をたゞけば、佗しげなる女の出で、いづくよりわた
り給ふ道心の御坊にや。あるじは此あたり何がし

(一)「去來寫」に「隻」とあり、今改む
(二)「同」に「大聖持」とあり、今改む
(三)「其角筆」に、「入江を棹して」
(四)「機」恐くは、「機」
(五)「其角筆」に「余を尋は」

(一)「同」に「云ふものほの」の「は」なし
(二)「眞」は「實」をよしとす
(三)「其角筆」に「名づけ給ふと也」
(四)「一葉集」に、「有馬」とす
(五)「其角筆」に、「若かりし昔」

と云もの、方にゆきぬ。もし用あらば尋給へと云。

かれが妻なるべしとしらる。昔し物がたりにこそ斯る風情は待れと、やがて尋あひて其家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにと旅立。等裁も共に送らんと裾おかしうからげて、道の枝折とうかれ立。漸白根がたけかくれて比那が嵩あらはる。あさむづの橋を渡りて、玉江の芦は穂に出にけり。鶯の鬨を過て、湯尾峠をこゆれば、燈が城、かへる山に初鴈を聞て、十四日の夕暮つるがの津に宿をもとむ。其夜月殊はれたり。あすの夜も斯有べきにやといへば、越路のならひ猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜参す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木間に月のもり入たる、お前の白砂霜を敷るがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起のこと有て、みづから草を刈土石を荷ひ泥濘をかかせて、参詣往來の煩ひなし。古例今に絶ず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると、亭主のかたりける。

(一)「葉集」に、「湯の尾たうけ」

(二)「葉集」に、「舟をはしらす」
(三)「去來寫」に、「露通」とあり、今改む

月清し遊行のもてる砂の上

嵯峨日記 (元祿四年)

元祿四年辛未卯月十八日、嵯峨に遊びて去來が落柿舎に至る。凡兆ともに來りて暮におよびて京に歸る。予は猶しばらくとむべきよしにて、障子つゞくり、葎引かなぐり舎中の片隅一間なる所伏處とさだむ。机一、硯、文庫、白氏文集、本朝一人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置、唐の蒔繪書たる五重の器にさまゝの菓子をもり、名酒一壺盃そへたり。夜のふすま調茶の物ども、京より持來てまづしからず。我貧賤をわすれて清閑をたのしむ。

(一)「蓬萊島」及び「城田氏上梓の機刺巻物に「しばし」とむ」
(二)「同」に「白氏集」
(三)「城田本」に「置井唐の」
(四)「同」に「盃を添」

十九日、午半、臨川寺に詣づ。大井川前にながれて、嵐山右に高く、松の尾の里につゞけり。虚空藏に詣る人ゆきかひおほし。松の尾林の中に小督やしきといふあり。すべて上下の嵯峨に三所あり。いづれかたしかならん。かの仲國が駒とめたる處とて、駒どめの橋と云、此あたりに侍れば、しばらくこれに

(五)「同」に「松尾の竹の中に」
(六)「同」に「駒をとめ」
(七)「同」に「座あきた」

紀行日記集

十五日、亭主の詞にたがはず雨降。

名月や北國日和さだめなき

十六日、空はれたればますほの小貝ひろはんと、種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云も破籠小竹筒などこまやかにしたためさせ、僕あまた舟に取のせて、追風時の間に吹着ぬ。濱はわづかなるあまの小家にて、佗しき法華寺有。爰に茶を飲酒をあたくめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。

さびしさや須磨にかちたる濱の秋
波の間や小がひにまじる萩の塵

其日のあらまし等裁に筆をとらせて寺に残す。路通も此みなとまで出むかひてみの、國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬を飛せて如行が家に入集る。前川子荆口父子其外したしき人々日夜訪ひて、蘇生のものに逢がごとく、且悦び且いたはる。旅の物うさもいまだ止ざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜んと又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれゆく秋ぞ

よるべきにや。暮は三軒屋の隣藪の中にあり。しるしに櫻を植たり。かしこくも錦繡緋綾の上に起ふして、終に藪中の塵芥となれり。昭君村の柳、巫女廟の花のむかしもおもひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪のしげりや風の筋
斜日に及で落柿舎に歸る。凡兆京より來たる。去來京に歸る。宵より臥。

廿日、北嵯峨の祭見んと羽紅尼來る。去來途中の吟とて語る。

つかみあふ子供のたけや妻ばたけ
落柿舎はむかしのあるじの作れるまゝにして、處々頽破す。なかゝに作りみがゝれたる昔のさまよりも、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁畫る壁も、風に破れ雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたる、竹椽の前に袖の木一もと花かうばしければ

袖の花やむかししのばん料理の間
ほととぎす大竹藪をもる月夜

(二)城田本に、
「一紙に上下
五人ごぞり」
「いねがたう
て」
(三)同「頃よ
りおの」

(三)「事も」恐くは
「事ども」

(四)城田本に
「今宵は」
(五)俳諧玉「言集」
には「徒然に
……」の次に
「寝に住する
ものは衰を
あるじとす」と
あり

(六)城田本に
「菑友」に
(七)同「芭蕉
庵の舊き跡」
(八)同「二長
ばかり」一本
より外は

羽紅

またやこんいちご赤らめ鯉峨の山
去來兄の方より、菓子調菜のものなど贈て、今宵は羽紅夫婦をとどめて、蚊屋一紙に五人ごぞり臥たれば、夜もいねがたくて、夜半過る頃よりもおの／＼起出て、晝の菓子盆など取出て、曉ちかきまで話明す。去年の夏凡兆が宅に臥たるに、二疊の蚊屋に四國の人ふしたり。おもふと四にして、夢も又四くさと書捨たる事もなど云出して咲ひぬ。明れば羽紅凡兆京に歸る。去來猶とゞまる。

廿一日、昨夜は寝ざりければ心むづかしく、空のけしきも昨日に似ず、朝より打くもり雨折々おとづれて、終日眠り臥たり。暮に及て去來京に歸る。今夜は人もなく、晝臥たれば夜もねられぬまゝに、幻住庵にて書捨たる反故を尋出してなぐさみに清書。

廿二日朝の間雨降。今日は人もなくさびしきまゝにむだ書して遊ぶ。其詞
喪に居るものは悲しみをあるじとし
酒を飲むものはたのしみを主とし
愁に住するものは愁をあるじとし

(三)徒然に住するものはつれづれを主とす
さびしさなくばうからまじと、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし。又よめる、
山里にこはまた誰をよぶこ鳥ひとりすまんと思ひしものを
獨すむほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑をうしなふと。素堂此言葉を常にあはれむ。予も又
うき我をさびしがらせよかんこ鳥
とはある寺に獨居していひし句なり。暮方去來より消息す。乙州が武江より歸り侍るとて、朋友門人の消息どもあまたとゞく。其中曲水が狀に、予が住捨し芭蕉の舊跡を尋て宗波に逢よし。

むかし誰小鍋あらひしすみれ草
又云
我住ところ弓杖二丈ばかりにして楓一本、外は青き色を見ずと書て、
わか楓茶色になるも一さかり
嵐雪が文に

狗脊の塵にえらるゝわらび哉

出代やをさな心に物あはれ

廿三日。

手を打ば木魂に明る夏の月

夏の夜や木魂に明る下駄の音

筍やをさなき時の繪のすさみ

麥の穂や涙にそめて啼雲雀

一日／＼麥あからみてなくひばり

能なしの眠たし我をぎやう／＼し

廿四日。題落柿舎

豆植る畑も木部屋も名處かな

凡兆

暮に及で、去來京より來る。膳所昌房より消息、大津の尙白より消息あり。凡兆來る。堅田本福寺訪ふ。

春伯凡兆京に歸る。

廿五日。千那大津に歸る。史邦文章見訪。

題落柿舎

文章

深對暇案件鳥魚。就荒喜似野人居。

枝頭今欠赤虬卵。青葉々頭堪學書。

尋小督墳

紀行日記集

三九九

強攪怨情出深宮。一輪秋月野村風。

昔季僅得求琴韻。何處孤墳竹樹中。

芽出しより二葉に茂る柿の實

途中の吟

ほとゝぎすなくや榎も梅さくら

史邦

黃山谷之感句

杜門覺句陳無已。對客揮毫秦少游。

乙州來りて、武江の話并燭五分の俳諧一卷、其中に半俗の膏藥入はふところに

白井峠を馬にかしこき

其角

腰の簀に狂はする月

野分より流人にわたす小屋ひとつ

宇都の山女に夜着をかりてぬる

いつはりせめてゆらす堪忍

中の刻ばかりより、雷霆雹降雲龍空を過る時雹降大なるはから桃のごとし。ちひさきは柴栗のごとし。

廿六日。

芽出しより二葉にしげる柿の實

文章

はたけの塵にかゝるうの花

芭蕉

三九九

降ル雷ノ大ナ
ルカラモ、ノ
ゴトク小キハ
紫栗ノゴト
シ、龍空を過
る時雷降

(一)「城田本」に、「芽出し」を史邦のとす

(二)「同」に「涕泣して覺、心氣」

(三)「城田本」に、「夢みること」

(四)「同」に「其地風景聊以不叶古人とイへ共不至其地時は不叶其景」

(五)本書句の下に「名なし、今城田本により補ふ」

(六)本書「降つてくこと終日」とあれど、今城田本に從ふ

(七)本書「出んに」とあれど、今城田本に從ふ

蝸牛たのもしげなき角ふりて

人のくむうち釣瓶まつなり

有明に三度飛脚の行やらん

廿七日。人來らず。終日得閑。

廿八日。夢に杜國が事をいひ出して涕泣して覺る

心氣相まじはる時は夢をなす。陰盡て火をゆめみ、

陽おとろへて水を夢みる。飛鳥髪をふくむ時は飛鳥

をゆめみ、帯を敷寝する時は蛇を夢みるといへり。

睡枕記に槐安國莊周が蝶、夢皆其理有て妙をつくさ

ず。我夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散亂の

氣、夜陰に夢又しかり、まことに此ことを夢みるこ

そいはゆる念夢なれ。我に志深く伊陽舊里までした

ひ來りて夜々床を同じく起ふし、行脚の勞をたすけ

て百日がほど影のごとく伴ふ。片時もはなれず。或

時はたはふれ或時は悲しみ、其志わが心裏に染てわ

するゝことなければなるべし。覺てまた袂をしぼる。

廿九日。日暮て奥州高館の詩を見る。

高館聳天星似胃。衣川通海月如弓。

(四)其地の風景聊以不叶古人不至其地時以不叶其景

卅日。朝日。

江州平田明照寺李由訪る。尙白千那有消息。

竹の子やくひ殘されしのちの露 李由

此ごろの肌着身につく卯月哉 尙白

還 岐

またれつる五月もちかし掣粽

二日。

曾良來りて、芳野の花を尋ね、熊野に詣侍るよし。

武江舊友門人の話、かれこれ取まぜて談す。

熊野路やわけつゝ入は夏の海 曾良

大峰やよしのゝおくを花の果

夕陽にかゝりて、大井川に舟をうかべて、嵐山にそ

ふて戸難瀬をのぼる。雨降出て暮に及て歸る。

三日。昨夜の雨降つゞきて終日終夜止す。尙其武

江の事ども問語。既に夜明る。

四日。宵に寢ざりける草臥に終日臥。晝より雨降

止。明日は落柿舎を出んと名殘をしかりければ、奥

口の間／＼を見めぐりて、

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

文集

目次

笠張説……………(四三)	文字指石……………(四九)	送許六辭……………(同)
虚栗集跋……………(同)	銀河序……………(同)	吊初秋七日雨星文……………(四三)
瓢之銘……………(四四)	紙衾記……………(四〇)	嵐蘭詠……………(同)
白髮吟……………(同)	雲竹譜……………(同)	東順傳……………(四三)
閑居箴……………(同)	興或人文……………(同)	歌仙譜……………(同)
伊勢紀行跋……………(四五)	洒落堂記……………(四二)	所思……………(四三)
糞虫跋……………(同)	幻住庵記……………(同)	贈風弦子號……………(同)
杵折贊……………(四六)	既望賦……………(四五)	鳥賦……………(同)
歲暮……………(同)	山中の湯……………(四七)	畫譜……………(四四)
阿羅野集序……………(同)	座右銘……………(同)	
机銘……………(四七)	成秀が庭上松をほむる詞……………(同)	
伊賀新大佛之記……………(同)	卒兜婆小町贊……………(同)	
夏の須磨……………(同)	栖去之辨……………(四八)	
十八樓記……………(同)	芭蕉を移す詞……………(同)	
鶴飼……………(四八)	閑關説……………(四九)	
更科城拾月之辨……………(同)	送僧尊吟辭……………(同)	
素堂亭十日菊……………(同)	柴門辭……………(四二)	

天和二年

笠張説

草屣にひとりわびて、秋風さびしき折々、竹取の
 たくみにならひ、妙観が刀をかりて、みづから竹を
 わり竹を削て、笠つくりの翁となれる。心しづかな
 らざれば日を経るに物うく、工みつたなければ夜を
 つくしてならず。あしたに紙をかさね、夕にほして、
 又かさね、誰といふものをもて、色をさはし、
 ます／＼かたからんことを思ふ。廿日過るほどにこそ
 やゝいできにけれ。其かたちうらのかたにまき入、
 外さまに吹かへりなど、荷葉のなかばひらくるに似
 て、なか／＼をかきすがたなり。さらばすみかか
 のいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし。
 西行法師のふじみ笠か、東坡居士が雪見笠か。宮城
 野の露に供つれねば、吳天の雪に杖をやひかん。あ
 られにさそひ時雨にかたぶけ、そぞろにめで、殊に
 興す。興のうちにして俄に感ずるとあり。ふたゝび宗
 祇の時雨ならでもかりのやどりに袂をうるほしてみ

文集

づから笠のうちに書つけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉 (一葉集)

同三年

虚栗集跋

栗とよぶ一書、其味四あり。
 李杜が心酒をなめて、寒山が法粥をすゝる。これ
 によりて、其句見るにはるかにして、きくに遠し。
 侘と風雅のその生にあらぬは、西行の山家を尋て
 人のひろはぬ蝕栗也。
 戀の情つくしえたり。昔しは西施がふり袖の顔黄
 金鏡ハハ、小紫ハハ、上陽人の閨の中には、衣桁に薦のかゝる
 まで也。
 下の品には眉こもり、親ぞひの娘、娶姑あしうそのたけきあ
 らそひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨
 す。白氏が歌を假字にやつして、初心を救ふたより
 ならんとす。
 其話震動虚實をわかたず。寶の鼎に句を煉て、龍の
 泉に文字を治たふ。是必他のたからにあらず。汝が寶

四〇三

(一)この文を『蓋
 笠銘』と題し
 たる書もあり
 (二)『芭蕉文集』に
 『草の屣に』に

にして後のぬすびとを待。(同)

貞享元年

瓢之銘

一瓢重黛山 自喚稱箕山

山素堂

(一)一書に『首陽山』

莫憤首陽仰 這中飯顛山

顔公のかきほに生えるかたみにもあらず、惠子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさごあり。是をたくみにつけて、花入る器にせんとすれば、大にしてのりにあたらす。さゞえにつくりて酒をもらんとすれば、かたち見る處なし。ある人の曰、草庵のいみじき糧入つべきものなりと。まことによもぎの心あるかな。やがて用ひて隠士素翁に乞てこれが名をえさしむ。其言葉は右に記す。其句みな山をもておくらるゝが故に四山とよぶ。中にも飯顛山は老杜の住める地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁李白にかはりて我貧をきよくせんとす。かつむなしき時はちりの器となれ、得る時は一壺も千金をいできて、黛山もかろしとせんことしかり。

物ひとつ瓢はかるきわが世かな

芭蕉桃青書 (隨齋書話)

白髮吟

たよりも文月の玉まつる頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや。北堂の萱草も霜がれて、今は其おもかげだになかりしが、何ごとむむかしに立かはりて、はらからの鬢しろく眉しわみて、つれなきいのちありとのみ、いひ出る言の葉もなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髪をがめよ、浦しまがこの玉手箱、汝が眉もやゝ老たりと、年月のこたりはかたみに泣つゝ、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜 (一葉集)

貞享三年

閑居箴

あら物ぐさの翁や、日頃は人のとひ来るもうるさく、人にもまみえじ人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜雪のあしたのみ友のした

はるゝもわりなしや。物をもいはす、ひとり酒のみ

で、心にとひ、心にかたる。庵の戸おしあけて雪をながめ、又は盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物ぐるほしの翁や

酒のめばいとど寝られね夜の雪 (木朝文鑑)

貞享四年

伊勢紀行跋

ねなし草の花もなく、實もみのらず、ただいやしき口にいひのゝしれるたはぶれごとの世なるを、其角一とせ都の空にたびねせしころ、向井氏去來のぬしむつまじき契有て、酒のみ茶にかたるをりゝ、甘き辛きしぶき淡きころの水の浅きより深きをつたへて、終に一掬して百川の味ひをしれるなるべし。ことしの秋いもうとをみて伊勢に詣す。白川の秋風よりかの濱荻の聲を聞いて、とまりゝのあはれなることどもかたはし書あらはして、わが草の戸の案下におくる。一たび吟じて感をおこし、ふたゝび誦して感をおくる、三たびよみて其無事なることをおぼゆ。

此人や此道に至れり盡せり。

西ひがしあはれさひとつ秋の風 (一葉集)

養虫跋

草の戸さしこめて物わびしき折しも、たまゝみの虫の一句をいふ。我友素翁はなはだあはれがりて詩を題し文字をつらぬ。其詩やにしきをぬひものにし、其文や玉をまろばすがごとし。つらゝ見れば離騒のたくみあるに似たり。また黄奇蘇新あり。はじめに虞舜曾參の孝をいへるは、人にをしへをとれとや。其無能を感ずる事は、ふたゝび南華の心を見よとや。終に玉虫のたはぶれは色をいさめんとならし。翁にあらすば誰か此蟲の心をしらん。靜に見れば物みな自得すといへり。此人によりて此句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人、おほくは花にふけりて實をそこなひ、實をこのみて風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其實なほくらひつべし。爰に何某朝湖と云あり。此事を傳聞てこれを畫く、まことに丹青淡くして情こまやかなり。心をとどむれば

虫うごくがごとく、黄葉落るかとうたがふ。耳をたれて是をきけば、其むし聲をなして、秋の風そよ／＼と寒し。猶閑窓に閑をえて、兩士の幸にあづかること、みのむしのめいぼくあるに似たり。(一葉集)

杵 折 贊

此杵のをれと名付るものは、上つかたにてめでさせ給ひ、めで度扶桑の奇物となれり。汝いづれの山より出で、何國の里の賤が碯のかたみなるぞや。むかしは横槌たり。今は花入と呼て、貴人頭上の具に名をあらたむといへり。人また斯のごとし。高きにおておこるべからず、ひきゝに在てうらむべからず。たと世の中は横づちなるべし。

此つちのむかし椿か梅の木か (一葉集)

歲 暮

代々の賢き人々も、古里はむすれがたきものにおぼえ侍るよし。我今はじめの老も四とせを過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからの

あまた輪かたぶきて侍るも見捨がたく、初冬の空のうちしぐる／＼頃より、雪をかさね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、思ふことのみあまた有て、古さとや隣の緒に泣く年のくれ (一葉集)

元 祿 元 年

阿 羅 野 集 序

尾陽蓬左權木堂主人荷兮子、集を編て名をあらふといふ。何故に此名ある事をしらす。予はるかにおもひやるに、ひととせ此郷に旅寐せしおり／＼の言捨あつめて冬の日といふ。其日かげ相續きて、春の日また世にかゝやかす。實にや衣更着彌生のけしき柳櫻の錦を争ひ、てふ鳥のおのがさま／＼なる風情につきて、いさゝか實をそこなふものあればにや。いとふのいとかなる心のはしの有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにもつかず、雲雀の天空にはなれて、無景のきはまりなき道芝のみちしるべせんと、此野の原の野守とはなれるべし。(曠野)

(一)「一葉集」に、「雨なる時は 興を」とあり
(二)「同」に「あめつち二の卦」とあり
(三)「同」に「影にして」とあり
(四)「同」に「此の末に」とあり
(五)「同」に「此の末に」とあり
(六)「同」に「此の末に」とあり
(七)「同」に「此の末に」とあり
(八)「同」に「此の末に」とあり
(九)「同」に「此の末に」とあり

机 銘

間ある時は臂をかけて、嗒焉吹噓の氣をやしなふ。しづかなる時は書を紐といて、聖賢賢才の精神をさぐり、静なる時は筆をとりとて、義案の方寸に入。たぐみならずおしまづき、一物三用をたすく。高さ八寸面二尺、兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして潜龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせむや。(風俗文選)

伊賀新大佛之記

伊賀の國阿波の庄に新大佛といふあり。此ところははならの都東大寺のひじり俊乘上人の舊跡なり。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七宗無ひとりふたり誘ひ物して、かの地に至る。仁王門楹樓のあととは、枯れたる草のそこにかくれて、松ものいはゞ事とはむ石居ばかり草のみして、と云ひけむもかゝるけしきに似たらむ。なほ分入りて、蓮花臺獅子の座なんどは、いまだ苔のあとを殘せり。御佛はしりへなる

文 集

岩窟にたゞまれて、霜に朽ち苔に埋れて、わづかに見えさせ給ふに、御ぐしばかりはいまだつゞがもなく、上人の御影をあげ置きたる草堂のかたはらに安置したり。誠にこゝらの人の力を費し、上人の貴願いたづらになり侍る事も悲しく、涙も落ちて談もなく、むなしき石臺にぬかづきて、

夏 の 須 磨

卯月の中頃須磨の浦一見す。うしろの山は青葉にうるはしく、月いまだ朧にて春の名残も哀ながら、只此浦のまことは秋を宗とすることや。心に物のたらぬけしきあれば、

十八樓の記

夏はあれど留主のやうなり須磨の月 (眞達集)

みの、國ながら川に望みて水樓あり。あるじを賀鳥氏といふ。いなば山後にたかく、嵐山左右に重りて、ちかゝらす遠からず、たなかの寺は杉の一村に

(一)「同」に『兩湖』と誤る

(二)「同」に『いはまほしきなり』とす

(三)「同」に『日に見ゆるものは』とあり

(四)本文題無し今假に題を設く

(五)「一葉集」に『前無し』

(六)「芭蕉文集」等に『佛や』

(七)「芭蕉翁發句集」『菊を愛す』と誤る

かくれ、きしにそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。さらし布所々に引きはえて、右にわたし舟うかぶ。里人の行きかひしげく、漁村軒をならべて、網をひき釣をたるゝおのがさまゝも、たゞ此樓をもてなすに似たり。暮れがたき夏の日もわするゝばかり、入日の影も月にかはりて、波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝ近く、高欄のもとに鶺鴒するなど、誠にめざましき見ものなりけらし。かの瀟湘の八のながめ、西湖の十のさかひも、涼風一味のうちに思ひためたり。若し此樓に名をいはむとならば、十八樓ともいはまほしや。

此あたり目に見ゆるもの皆涼し (風俗文選)

鶺鴒 詞

きふの庄ながら川のうかひとて、よにことごとくしう言ひのゝしる。まことや其興人のかたり傳ふるにたがはず、浅智短才の筆にもことばにも盡べきにあらず。心しれらん人に見せばやなど言て、やみぢにかへる此身の名ごりをしさをいかにせむ。

四〇八 おもしろうてやがて悲しき鶺鴒舟哉

(芭蕉翁發句集)

更科姨捨月之辨

あるひはしらゝ吹上ときくにうちさそはれて、ことし姨捨の月見むことしきりなりければ、八月十一日美濃の國をたち、道遠く日數すくなければ、夜に出でゝ暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜更科の里にいたる。山は八幡といふ里より一里ばかり南に、西南に横をりふして、すさまじう高くもあらずかどゝしき岩なども見えす、只哀ふかき山の姿なり。なぐさめかねしと云ひけむも理り知られて、そゝろに悲しきに、何故にか老いたる人を棄てたらむと思ふに、いと涙落ちそひければ、

佛は姥ひとり泣く月の友

いざよひもまだ更科の郡かな (小文庫)

素堂亭十日菊 (の句會の序)

蓮池の主翁又菊をあはず。きのふは龍山の宴をひ

(一)「同」に『酒のあまれるをすゝめて』とす

(二)「同」に『狂吟たはふれとなす』と誤る

(三)本文題なし今假に題を設く

元祿二年

文字摺石

しのぶも摺の石はみちのく福島の驛にありて、往來の人のむき草をとりて、此石をこゝろみけるを、里人ども心うくおもひて、此谷にまろばし落しぬ。石のおもては下さまにふしたれば、いまはさるわざする事もなく、風雅のむかしにかはれるをなげきて、

さなへつかむ手もとやむかししのぶ摺 (卯辰集)

文字摺石

しのぶの郡しのぶの里とかや、文字ずりの名残とて、方二間ばかりなる石あり。此石はむかし女の思ひに石になりて、其面に文字ありとかや。山藍摺りみだらゝ故に戀によせて多くよめり。今は谷あひに埋れて、石の面は下さまになりたれば、させる風情も見えず侍れども、さすがに昔覺えてなつかしければ、

文集

銀河序

北陸道に行脚して、越後國出雲崎といふ所に泊る。彼の佐渡がしまは、海の面十八里、滄波を隔て、東西三十五里によこおりふしたり。みねの險難谷の隈々まで、さすがに手にとるばかりあざやかに見わたさる。むべ、此島はこがねおほく出でゝあまねく世の寶となれば、限りなき日出度島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ、遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞えあるも、本意なき事におもひて、窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈で、月ほのぐらく、銀河半天にかゝりて、星きら／＼と冴えたるに、沖のかたより波の音しは／＼はこびて、たましひけづるがごとく、膈ちぎれてそゝろにかなしみきたれば、草の枕も定らず、墨の袂にゆるとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川 (風俗文選)

越後の國出雲崎といふところより沖の方十八里に佐渡が

(一)三十里餘りな
るべし

鳥見ゆ。東西三十餘りに横折ふしたり。昔よりこの鳥は
黄金多く涌出で、世にめでたき鳥にて侍るを、重罪朝敵
の人々の遠流の地にて、いとおそろしき名に立てり。折
ふし初秋七日の夜、宵月入果て波の音とらうくと物凄か
りければ、

あら海へ佐渡によこたふ天の川 (柴橋)

文 集

四一〇

國大垣の府に至る。猶も心のわびをつぎて、貧者
の情をやぶることなかれと、我をしたふものに打く
れぬ。(一葉集)

元祿三年

雲竹讃

洛の桑門雲竹みづからの像にやあらん、あなたの
方にかほふりむけたる法師を讃て、これに讃せよと
申されければ、君は六十年あまり、予は既に五十に
ちかし。ともに夢中にして、夢のかたちをあらはす
是にくはふるに寢言をもつてす。

こちらむけ我もさびしき秋の暮 (一葉集)

與或人文

大和國長尾の里といふ處はさすがに都遠きにあら
ず。山里にして山ざとにあらす。あるじ心あるさま
にて、老たる母のおはしけるを、其家のかたへにしつ
らひ、庭前に本草のをかしげなるを栽置て、岩尾め
づらかにすゑなし、手づから枝をため石を撫ては、蓬

(三)此文は元祿
元年一策之小
文一紀行の時
に綴りしなら

古き枕ふるきふすまは、貴妃がかたみよりつたへ
て、戀といひ、哀傷とす。錦床の夜のしとねの上に
は鶯鶯をぬひ物にして、ふたつの翼に後の世をかこ
つ。かれは其膚に近く、其にほひ残りともまれらん
をや。戀の一物とせん、むべなりけらし。いでや此
紙のふすまは戀にもあらす、無常にもあらす、蟹の
筍屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいぶせきを思ひて
出羽國もがみといふ處にて、或人の作りえさせたる
也。越路の浦ミ、山館野亭の枕の上には、二千里の
外の月をやどし、蓬葎の敷ねの下には、霜にさむし
ろのきりくすを聞て、晝はたゝみて背中におひ、
三百餘里の險難をわたり、終に頭をしるくしてみの

葉の島ともなりぬ。いく葉とりてんよと老母につか
へ、なぐさめなどせし實ありけり。家まづしくして
孝をあらはすとこそ聞なれ。まづしからずして孝を
盡す。古人もかたきことになんいひける。

冬しらぬ宿や親する音あられ (一葉集)

洒落堂記

山は靜にして性をやしなひ、水は動て情をなぐさ
む。靜動二の間にして棲を得るものあり。濱田氏珍
夕といへり。目に佳境を豊にし口に風雅を唱へて、
濁りをすまし塵をあらふが故に洒落堂といふ。門に
戒幡をかけて、分別の門内に入ことをゆるさずと書
けり。かの宗鑑が客にをしふるざれ歌に一等くはへ
てをかし。且それ簡にして方丈なるもの二間、休紹
二子の性を次で、しかも其のりをみす。木を植、石を
ならべてかりのたはぶれとなす。抑おもの、浦は勢
田唐崎を左右の袖のごとくして、海を抱て三上山に
むかふ。海は琵琶のかたちに似たれば、松のひびき
波をしらぶ。ひえの山ひらの高ねをなぐめに見て、

音羽石山を肩のあたりになんおけり。長等の花を髪
にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃抹の日々にか
はれるがごとし。心匠の風雲も又これにならふべし。

四方より花吹入れて鳩の波 (芭蕉文集)

幻住庵記

石山のおく岩間のうしろに山あり圓分山と云。そ
のかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓にほそきなが
れをわたりて、翠微にのぼること三曲二百歩にして
八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一
の家には甚いむなる事を、兩部光をやはらげ、利益
の塵をおなじし給ふも又たふとし。日頃は人の詣
ざりければ、いとと神さび物しづかなるかたはらに
すみ拾し草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根もり
壁落て狐狸ふしどをえたり。幻住庵と云。あるじの
僧何がしは、勇士菅沼氏曲翠子の伯父になん侍りし
を、今は八とせばかりむかしに成て、まさに幻住老
人の名をのみ残せり。予また市中を去こと十とせば
かりにして、五十年やちかき身は、みの虫のみの

(一)「一葉集」に、
と「えるもの」
と誤る
(二)「同」に「佳境
を盡し」
(三)「同」に「濃抹」
(四)「同」に「なら
ふなるべし」
(五)「同」に「鳩の
波」

芭蕉文集に
「睡松が」
「同」に「睡松」
「同」に「睡松」

をうしなひ、蝸牛家をはれて、奥羽象潟の暑き日に
面を焦し、高砂子あゆみ苦しき北海のあら磯に踵を
破りて、今歳湖水の波にたゞよふ。鳩の浮巢のなが
れとゞまるべき蘆の一もとのかけたのもしく、軒端
ふきあらため、かきね結そへなどして、卯月の初い
とかり初に入し山の、やがて出じとさへおもひそみ
ぬ。さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り山
藤松にかゝりて、郭公しば／＼過る程、宿かし鳥の
たよりさへ有を、木啄のつゝくともいとはじなどそ
とろに興じて、たましひ吳楚東南にはしり、身は瀟
湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち人家よきほどに
隔り、南蕪峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日
枝の山比良の高ねより、からさきの松は霞こめて、
城有、橋あり、釣たるゝ舟有、笠取にかよふ木樵の
聲、麓の小田に早苗とる歌、ほたる飛かふ夕やみの空
に水鶏のたゞくおと、美景物として足すといふこと
なし。中にも三上山は土峰の佛にかよひて、むさし
野の古きすみかもおもひ出られ、田上山に古人をか
ぞふ。さゝほが嶽千丈が峰袴腰と云山あり。黒津の

里はいとくろう茂りて、あじろ守にぞとよみけん萬
葉集の姿なりけり。なほ眺望くまなからんと、うし
ろの峰にはひのぼり、松の棚つくり稿の圓坐を敷て
猿の腰かけと名づく。かの海棠に巢をいとなび、主
簿峰に庵をむすべる王翁徐(じゆ)が徒にはあらず。睡
山民となりて唇(くち)に足を投出し、空山に虱をひねり
て坐す。たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲て
みづから炊ぐ。とく／＼の雲をわびて、一爐のそな
へいとかろし。はた昔住けん人の殊に心高く住なし
侍てたくみ置る物すきもなし。持佛一間を隔てよる
の物をさむべき所などいさ／＼かしつらへり。さるを
筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが殿子に
て、此たび洛に上りいまそかりけるを、ある人をして
額を乞。いと安々と筆を染て、幻住庵の三字をおく
らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居と云
旅ねといひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の槍
笠越の菅養ばかり枕の上の柱にかけたり。晝はまれ
まれ訪(と)ふ人／＼に心をうごかし、或は宮守の翁、里
のをのことも入來りて、みのしゝの稻くひあらし、

芭蕉文集に
「睡松が」
「同」に「睡松」
「同」に「睡松」

兎の豆ばたけにかよふなど、我聞しらぬ農談、日既
に山のはにかゝれば、夜坐靜に月を待ては影を伴ひ、
燈を取ては罔兩に是非をこらす。かくいへばとてひ
たぶるに閑寂をこのみ、山野に跡をかくさんとは
あらず。良病身人に倦て、世をいとひし人に似たり。
つら／＼年月のうつりこし、つたなき身の科をおも
ふに、或時は仕官縣命の地をうらやみ、一たびは佛
羅祖室の扉に入んとせしも、たよりなき風雲に身を
せめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりご
と、さへなれば、終に無能無才にして此一すぢにつ
ながる。樂天は五臟の神をやぶり、老杜は瘦たり。
賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻のすみか
ならずやと、おもひ捨てゝふしぬ。

まづたのむ椎の木もあり夏木立(猿蓑)

幻住庵賦

五十年や、ちかき身は、苦(く)桃(とう)の老木となりて、蝸牛の
からをうしなひ、囊虫(なんちゆう)のみのを離れて、行方なき風雲に
さまよふ。かの宗鑑(そうかん)がはたごを朝夕にむし、能因(ねいん)が頭陀
の袋(ふくろ)をさぐりて、松島白河に面を焦し、湯殿の御山に快

をぬらす。猶善知鳥啼く外の濱邊より、えぞが千鳥を見
やらんまでとしきりに思ひ立侍るを、同行曾良何がしと
云ふもの、多病(たびやう)いぶかしなど袖をひかへるに心たわみて、
象潟といふ所より越路の方におもむく。さるは高砂子あ
ゆみくるしき北海のあら磯にきびすを破て、ことし湖水
のほとりにたゞよふ。鳩の浮巢の流れとゞまるべき菅の
一葉のやどりを求めるに、其名を幻住庵と云、其山を國分山
といへり。古きみやしろのたゞせ給へば六根おのづから
潔して塵なき心地なんせらる。かの住持(ぢゆうぢ)草戸(くさど)は勇士
菅沼氏(すげぬま)曲水(まがみづ)の伯父(おや)なる人の此世をいとひし跡とかや。
主は八とせばかりの昔になりて、棲(す)はまぼろしのちまた
に残せり。まことに知覺迷(ちかくま)倒(たふ)もみなたゞ幻の一字に歸し
て、無常(むじやう)迅速(じゆんじゆん)のことわりいさ／＼かもわするべき道にあら
ず。山はさすがに深(ふか)からず、人家(にや)よきほどにへだたり、
石山(いしやま)を前にあて、岩間(いわま)山のしりへに立り。南(みなみ)嶺(ね)たたく平
よりおろし、北風(きたかぜ)はるかに海(うみ)をひたして涼し。折しも卯
月(うづ)のはじめなれば、つゝじ咲残り山藤松(やまふじ)にかゝりて、時
鳥(ときどり)しば／＼過るほど宿(しゆく)かし鳥(とり)のたよりさへあるに、木啄(きたく)
のつゝくともいじ、かつこ鳥我(とりが)をさびしからせよなど
ひとりよるこび、そるにたのしみて、吳楚(ごそ)東南(とうなん)のながめ
に恥ぢず、五湖(ごこ)三江(さんかう)もことらうたがはしきや。ひえの山
比良(ひら)の高根(たかね)よりから崎(さき)の松(まつ)はかすみこめて、膳所(ぜんじよ)の城(しろ)
は木間(きま)にかゝり、勢田(せいでん)の橋(はし)に雨(あめ)はれて、栗津(りす)の松原(まつはら)に夕
日(ゆふひ)を残す。三上山(さんじやうさん)は不二(ふじ)の佛(ほとけ)にかよひて、むさし野(むさし)の古

きすみかも思ひ出でられ、田上山に古人をしたふ。さゝ
 ぼがたけ千丈が峯はかまごしと云ふ山あり。笠取山に笠
 はなくて、黒津の里人の色やくるかりけん。猶はた眺望
 くまなからんと、うしろの峰にはひのぼり、松の朝作り
 藁の圓坐を敷て、これを猿の腰かけと名づく。傳へき、
 ぬ、除老が海棠集の飲樂も市に在てかまびすしく、王道
 人が主簿峰の住ひも安を捨て、うらやむべからず。虚無
 にまなこをひらいて嘯き、唇頰に風をひねりて坐す。た
 ま、心すこやかなる時は、薪を拾ひ清水をむすぶに、
 尚采ひとつ葉のみどりをつたふとく、の雪をわびて
 は一燈のそなへいと輕し。前に住ける人もさすがにこゝ
 ろ高く、たくみおける物ずきもなし。持佛一間をへだて
 る、よるの物かくらふべき處などいさ、かしつらへり。
 さるを高良山の僧正洛に上りお給ひしを、ある人をして
 額をこふ。いとやすらかに筆をとりて幻住庵の三字をお
 くらる。其裏には予が名を書て、後見ん人のかたみとも
 なれとなり。山居といひ、旅ねといひ、させる器たくは
 ふべきにもあらず。木曾の柳笠、越の菅みのばかり枕の
 上の柱にかけた。ひるは宮守の翁、麓の里人など入來
 りて、猪の稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど我聞し
 らぬはなしに日を暮し、且はまれ、訪ふ人も夜坐しづ
 かにして、影を伴ひ、雨雨に對して是非をこらす。斯
 くいへばとてひたふるに閑寂をこのみ、山野に跡をかく
 さんともあらず。病身や、人にうみて、世をいとひし

人に似たり。何ぞや法をも修せず俗をもつとめず、いと
 わかき時よりよこさまにすける事侍て、しばらく生涯の
 はかりごと、さへなれば、終に此一筋につながれて、無
 能無才を取づるのみ。勞して功空しく、神つかれ眉をし
 わめて、秋も半に過ぎゆくま、風景朝暮の變化とても
 又只幻のすまひならずやと、やがて此文をといひて立さ
 りぬ。
 (一葉集)

幻住庵記

五十年や、ちかきみは、にがも、の老木となりて、か
 たつぶり家をうしなひ、みのむしの裳を離れて、かの宗
 鑑がはたごの料とほしく、能因が頭陀の袋を門へにひ
 ろけて、松島しら川につらをこがす。猶うとふ啼くそと
 の濱邊より、えぞが千しまをみやらんまでと、顔におも
 ひ立ち侍るを、同行曾良何某といふもの、多病心もとなし
 など袖をひかゆるに心よわりて、ことし湖水のほとりに
 たゞよふ。鶏のうきすのながれといまるあしのひともと
 の、かけたのむべき幻住庵といふかくれがをもとむ。山
 を岡分山といふ。古き御社のたゞせ給へば、六根きようし
 ておのづからちりなき心地せらる。さすがに山深からず、
 人家よきほどに立り、南嶺峰よりおろし北風海をひたし
 て涼し。折しも卯月のはじめ、つゝに咲残り山藤松にか
 りて、ほととぎすしはく過ぐるほど、宿かし鳥の便さ
 へ有るを、木つきのつゝとともいでじ、かつこどりわ
 れをさびしがらせよなどそとるに興じて、吳楚東南のな

へばとてひたふるに閑寂を好み、山野に跡をかくまじと
 にはあらず、たゞ病身に倦て世をいとひし人に似たり。
 などや法をも修せず俗をもつとめて、いとわかき時より
 よこさまにすけること侍りて、しばらくしやうがいは
 かりごと、さへなれば、終に此一筋につながれて無能無
 才を取づるのみ。勞して功むなく、たましひつかれまゆ
 をしかめて、初秋半に過行く風景朝暮の變化もまた幻の
 すみかなるべしとやがて立いで、きりぬ。
 (芭蕉翁真蹟拾遺)

既望賦

望月の凌興なほやまず、今宵は二三子にいさめら
 れて船を堅田の浦にはす。其日もたそがれのほどな
 らむ。なにがし成秀といふ人の家の後に漕入れて、
 醉翁狂客の月にうかれて來れるありと船の中より聲
 々によばふ。あるじは思ひかけず、おどろきよろこ
 びて簾をまきちりをはらふに、その後園に芋ありさ
 げありて鯉鮒の切目たゞさぬにしもあらず。やが
 て岸上に榻をならべ藁をのべて、おのゝいざ宵の
 宴を催す。月はまつほどもなくさし出で、湖上は
 なやかに照わたれり。兼てき、ぬ。仲秋望の日は月

(一)此文は四年な
らん

(二)本朝入鑑
【指をならん】とあるは誤

がめに取ぢず、五湖三江もうたがはしきや。ひえの山ひら
 の高根より幸崎の松は霞こめて、膳所の城木のまにか
 やき、せたの橋は聖津の松原につゞきて夕日の光をのこ
 す。三上山は土峰の傳にかよひて、むさしの古々柄も
 おもひいでられ、田上山に古人をしたふ。さ、保が嶽、千
 丈ヶ峰、袴腰といふ山あり、かまとり山に笠はなくて、
 黒津の里人の色や黒かりけんをかし。猶眺望くまな
 かんとの後の峰に道のぼり、松の朝作りわらの圓座を敷て
 猿の腰かけと名づく。傳へ聞く除老が海棠集上の飲樂は
 市にありてかまびすく、王道人が主簿峰の庵もうらやむ
 べからず。虚無に眼をひらき、唇頰に風を捫て座す。た
 ま、心すこやかなる時は、薪をひらき清水をむすぶに、
 しだ一葉のみどりをつたふとく、の雪をわびて一燈の
 そなへいとかるし。さきに住みける人もさすがに心高く
 や住みなしけむ、工みおける物ずきもなし。さるを此た
 び高良山蓮臺院の僧正洛にのぼり侍りしを、ある人をして
 額をこふ。いとやすらかに筆を取て、幻住庵の三字を起
 らる。其裏に予が名を書て後住人の記念ともなれと也。
 山居といひ、旅寂といひ、させるうつはものたくはふべく
 もあらず。木曾の柳笠越の菅みのばかり枕の上の柱に掛
 けたり。藁は宮守の翁、里の老人など入來りて、るのし、
 の稻くひあらし、兎のまめばたにかよふなど我聞しらぬ
 はなしに日を暮し、かつはまれ、とぶらふ人々も侍り
 しに、夜座靜にして影を伴ひ雨雨に是非をこらす。かくい

(一)「本朝文鑑」に「浮見堂」とあり、今「葉集」によりて改む

(二)「葉集」に、「かくいふほどに」

の浮御堂にさしむかふを鏡山といふなるよし。今宵なほそのあたり遠からじと、かの堂上の欄干によれば、三上水堂は左右にわかれて、その間に十二峰の影をひたす。とかくいふほど月も三竿にして、黒雲のうちにかくれたれば、いづれか鏡山といふ事をわかす。されどあるじの興をそへて、をりく雲のかゝること客をもてなせる心ざしいと切なり。やがてその月の雲をはなるほど、水面に玉塔の影をくだきて、あらたに千體佛の光をそふ。誠やいさよひのそらを世の中にかけて、かたぶく月のをしきのみかはとは、京極黄門の歎息の詞なるを、我はこよひしも此堂にあそびて、二たび恵心僧都の衣をうるほす。無常觀相の便ならずやといふに、あるじは、興に乗じて來れる客を、などさは興つきて歸さむやと、もとの岸上に盃をあぐれば、月は横川にかたぶきて、姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。

鎮あけて月さし入よ浮御堂

やすくと出でいさよふ月の雲 (本朝文鑑)

(四) 堅田十六夜の辨

望月の殘興なほやまず、二三子いさめて舟を堅田の浦にはす。其日申の時ばかりに、何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろに至る。醉翁狂客月にうかれて來れりと聲々に呼ばふ。主思ひかけず驚き喜びて、簾をまき塵を掃ふ。園中に芋ありさげあり、鯉鮒の切目たじまぬこそいと興なけれど、岸上に筵をのべて宴を催す。月は待つ程も無くさし出、湖上花やかに照らす。かねて聞く、仲の秋の望の日月浮御堂にさしむかふを鏡山といふとかや。今宵しも猶そのあたり遠からじと、被堂上の欄干によつて、三上水堂の岡南北に別れ、その間にして峰引きはへ小山嶺をまじゆ。とかくいふ程に月三竿にして黒雲の中にかくる。いづれか鏡山といふ事をわかす。主のいはく折々雲のかゝること、客をもてなす心いと切なり。やがて月雲外にはなれ出で、金風銀波千體佛のひかりに映す。かのかたぶく月の惜しきのみかはと京極黄門の嘆息のことばをとり、十六夜の空を世の中にかけて、無常の觀のたよとなすも、此堂に遊びて、そ再び恵心の僧都の衣もうるほすなれといへば、あるじまた云、興に乗じて來れる客を、など興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚げて、月は横川にいたらむとす。

鎮明て月さし入よ浮御堂

やすくと出でいさよふ月の雲 (小文庫)

(二)本文題なし、今假に題を設

山中の湯

北海の磯づたひして加州山中の涌湯に浴す。さと人のいはく、此處は扶桑三の名湯の其一なりと。誠に浴することしばしなれば、皮肉うるほひ筋骨に通りて神心ゆるくひとへに顔色をとどむる心地す。かの桃源も船をうしなひ、慈童の菊の枝折もしらず。やまなかや菊は手折らじ湯の匂ひ

元祿三年仲秋

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

元祿四年

座右銘

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

銘に云ク

ものいへばくちびるさむしあきのかぜ

(風俗文選)

成秀が庭上の松をほむる詞

松あり、高さ九尺ばかり、下枝さし出るもの一丈餘、枝上だんをかさね、其葉森々とこまやか也。風

文集

四一七

琴をあやどり、雨をよび、波を起す。箏に似、笛に似、鼓に似て、浪は籟をとく。當時牡丹を愛する人、奇出をあつめて他にほこり、菊を作れる人は、小輪を啖つて人にあらそふ。柿木柑類は其實を見て枝葉のかたちをいはす。唯松ひとり霜後に秀、四時常盤にして、しかも其けしきをわかす。樂天曰、松よく舊氣を吐く、故に千歳を經と。主人目をよろこばしめ、心を慰するのみにあらず。長生保養の氣、齡を知てまつに契るなるべし。(一葉集)

元祿四年仲秋日

卒兜婆小町贊

あなたたふと、蓑もたふとし、笠もたふとし。いづれの人かかたりつたへ、いかなる人か寫しとどめて、千歳のまぼろし今こゝに現す。そのかたちある時はたましひもまた爰にあらむ。蓑もたふとし、笠もたふとし。

たふとさや雪ふらぬ日もみものと笠 (本朝文鑑)

元 祿 五 年

柄 去 之 辨

(一)「小文庫」に「あるきて」
 (二)「同」に「さそりて」
 (三)「同」に「なを放下して」
 (四)「三日月日記」に「是非にありて」と誤る
 (五)「三日月日記」に「夢」に「芭蕉翁文集」に「芭蕉株を」とあり、今日「三日月日記」の「数株の莖を」とあるに従ふ
 (六)「芭蕉翁文集」に「かくるばかり」
 (七)「同」に「かへす、今」三日月日記「に」より「厚く」とす

こゝかしこうかれありきて、橋町といふところに冬ごもりして、睦月ささらきになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとちむとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや風雅の魔心なるべし。家を放下して柄を去り、腰にたゞ百錢をたくはへて、杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり風情、終に菰をかぶらむとは。(一葉集)

芭蕉を移す詞

(一)「芭蕉翁文集」に「芭蕉を移す詞」とあり、今日「三日月日記」に「厚く」とす

菊は東籬にさかえ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたゞす、水清からざれば花咲かず。いづれの年にや柄を此境に移す時、芭蕉一もとを植う。風土芭蕉の心にやかなひけむ、數株の莖を備へ、其葉茂りかさなりて庭を狭め、萱が軒端もかくるゝばかりなり。人呼て草庵の名とす。舊友門人ともに愛して、芽をか

き根をわかつて、處々に送る事年々になむなりぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破れむとすれば、籬の隣に地を替へて、あたりちかき人々に、霜の覆ひ風の圍ひなどかへすゝ頼み置て、はかなき筆のすさびにも書き残し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅宿の胸にたゞまり、人々のわかれ、芭蕉の名残、ひとかたならぬ倦しさも、終に三とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉に涙をそぐ。今年五月の半花たちばなのほひもさすがに遠からざれば、人々の契りも昔にかはらず、猶此あたり得立ちさらで、舊き庵も稍近う三間の茅屋つきしう、杉の柱いと清げに削りなし、竹の枝折戸安らかに、段垣厚くしわたして、南にむかひ池にのぞみて水樓となす。地は富士に對して、柴門景をすめてなゝめなり。浙江の潮三つまたの淀にたゞへて月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて先づ芭蕉を移す。その葉廣うして琴をおほふに足れり。或は半吹折れて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。

(一)「芭蕉翁文集」に「芭蕉を移す詞」とあり、今日「三日月日記」に「厚く」とす

たま〜花咲けどもはなやかならず。葦太けれども斧にあたらす。かの山中不材の類木にたゞへて其性よし。僧懷素はこれに筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て修學の力とせしとなり。予其一つをとらず、唯此陰にあそびて風雨に破れやすきを愛す。(芭蕉翁文集)

閉 關 説

(一)「芭蕉翁文集」に「芭蕉を移す詞」とあり、今日「三日月日記」に「厚く」とす

色は君子のくむ所にして、佛も五戒のはじめにおくといへども、さすがに捨がたき情のあやにくに、あはれなるかた〜もおほかるべし。人しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人めの關も、もる人なくばいかなるあやまちをか仕出でむ。あまの子の波の枕に袖しをれて、家をうり身をうしなふためしもおほかれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわかまへざるには、遙にまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身の盛なる事はわづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の

夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくより、あさましうくづをれて、宵寝がちに朝起したる、ね覺の分別な事にをかむさぼる。おろかなる者は思ふ事おほし。煩惱増長して一藝するものは、是非の勝るゝもの也。是をもて世のいとなみにあて、食欲の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならむこそ、老の樂とはいふべけれ。人來れば無用の辨あり。出でゝは他の家業をさまたぐるもうし。孫敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖さむには、友なきを友とし、貧を富めりとして、五十年の頭夫、白書、みづから禁戒となす。

元 祿 六 年

送 僧 專 吟 辭

杖頭に草鞋をかけて、笠のうちをあらはす。元祿六年やよひのはじめ僧專吟武江の東深川の草扉をひらいて、既に一步をはじめと書ぬ。此僧常に風

芭蕉句選拾遺
此岸上に

雅をこのみ、市を遊て年々斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣んとて、身は雲外の鶴にひとしく、ながれに背をすゞぎ、千尋の岡に翅をふるふて、野にふし雲にとまるらん胸中の塵いさぎよし。予葎の交りをなすこと久し。今此わかれに臨て、ともに岸上に立て、はこね山はるかに見やる。かのしら雲のたわめる所こそ、旅愁の嶮難さかしきちまたなるべけれ。君かならず首をめぐらして見よ。我又岸上に立んといひて袂をわかちぬ。

鶴の毛の黒き衣や花の雲 (一葉集)

柴門 辭

一葉集に、
何の爲に
一葉集に、
微に入り

許六が故郷に歸るを送る餞別の文なり(許六記) 去年の秋、かり初に面をあはせ、ことし五月のはじめ、深切に別ををしむ。其わかれにのぞみて、ひと日草扉をたゝいて終日閑談をなす。其器、繪を好み、風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。繪は何の爲好むや。風雅の爲好むといへり。風雅は何の爲愛すや。畫の爲愛すといへり。其まなぶ事二にして

用をなす事一なり。まことや、君子は多能を耻といへれば、品二にして、用一なる事感すべきにや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は精神徹に入り、筆端妙をふるふ。其幽遠なる處予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿西行のことばのみ、かり初にいひちらされし、あだなるたはぶれごとくも、あはれなる處おほし。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかもかなしびをそふると、の給ひ侍りしとかや。されば此御こと葉を力とし、其ほそき一筋をたどりうしなふ事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人のもとめたる所をもとめよと、南山大師の筆の道にも見えたり。風雅も又これに同じといひて、灯をかゝげて、柴門の外におくりてわかるゝのみ。

(風俗文選)

送許六 辭

木曾路をへて舊里に歸る人は、森川氏許六といふ。

一葉集に、
徒士をよし

古より風雅に情ある人々は、うしろに笈をかけ、草鞋にあしをいたため、破れ笠に霜露をいとひて、おのれが心をせめて、物の實を知ることよろこべり。今仕官おほやけの爲に長劍を腰にはさみ、乗かけのうしろに槍をもたせ、歩行若黨のくろき羽折のもすそは、風にひるがへしたる有さま、此人の本意にはあるべからず。

惟の花のこゝろにも似よ木曾の旅

うき人の旅にもならへ木曾の蠅

許六云兩句一句に決定すべきよし申されけれど、今讀後のかたみに二ながらならべ侍る。(讀 寒)

吊初秋七日雨星文

元祿六、文月七日の夜、風雲天にみち、白浪銀河の岸をひたして、烏鶴も橋杭をながし、一葉梶を吹折けしき、二星も屋形をうしなふべし。こよひ猶たゞに過さんも残りおほしと、一燈をかゝげそへる折から、遍昭小町が歌を吟する人有り。これによりて此二首を探りて雨星のこゝろをなぐさめんとす。

小まちがうた
高水にほしも旅ねや岩の上
遍昭がうた
七夕にかさねばうとし絹合羽 杉 風(一葉集)

風 蘭 誄

金革を褥にして、敢てたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて君子のいさをしとす。松倉風蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊をたましひにかけ、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむこと十とせあまり九とせにや。此三とせばかり官を辭して、岩洞に先賢の跡をしたふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間にをらず。日々風雲に坐して、今年仲秋中の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を曳く。其歸るさより心地なやましようして終に息たえぬ。同じき廿七日の夜のことにはや。七十年の母にさきだち、七歳の稚子におもひを残す。いまだをしむべき齡の五十年にだにたらず。公の爲に

は腹おしきりても悔まじき器の、はかなき秋風に吹しをれたる草の袂、いかに露けくも口をしくも有べき。今はの時の心さへしられて悲しきに、老母のうらみ、はらかなのなげき、したしきかぎりは聞つたへて、ひとへに親族のわかれにひとし。過ぎつるむ月ばかりに、稚子が手をとって予が草庵に來り、かれに號えさすべきよしを乞ふ。王戎五歳のまなごさしうるはしと、戎の一字をつみて風疾と名づく。其悦る色今日あたりをさらす。いける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はとしのばるゝならひ、まして父の如く子の如く手の如く足の如く、年ごろいひなれむつびたる佛の、愁の袂にむすばれて、枕もろきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはんとすれば胸ふたがりて、只おしまづきにかゝりて夕の雲にむかふのみ。

秋風ををれてかなしき桑の杖 (芭蕉文集)

東 順 傳

老人東順は榎氏にして、その祖父江州堅田の農夫

(一)「一葉集」に、「關戎」
(二)「風俗文選」に「ならし」と誤る
(三)「一葉集」に、「學びて」
(四)「同」に「何某の君より」
(五)「風俗文選」に「はなさず」
(六)「一葉集」に「こぼるが如し」
(七)之を芭蕉の作とすれば天和年中か

入月の跡は机の四隅哉 (句兄弟)

年代不明の部

歌 仙 讚

伊豫國松山の嵐、ばせをの洞の枯葉を吹て、其聲歌仙を吟す。嗚琴々々々たる風の音、玉をならし、金鐵

かどうて死するまで止事あらじ。(枇杷園隨筆)

附 風 弦 子 號

風弦は琴にあらず、瑟にあらず、彈に爪を用ひず柱を立す、天籟の禮をよく調へて、宮商角徵羽の音に落す。(一葉集)

鳥 賦

一、鳥大小ありて名を異にす。小を鳥鵲といひ、大を鶡太といふ。此鳥反哺の孝を讀して、鳥中の曾子に比す。或は人家にゆく人をつけ、銀河に翅をならべて二星の媒となれり。或は大年のやどりを知て春風をさとり、巢をあらたむといへり。雪のあけぼの、聲さぶげに、夕に寢處へゆくなど、詩歌の才士も情あるにいひなし、繪にも書れてかたちを愛す。只貪猶の中にいふ時は其徳大也。又汝が罪をかぞふる時は、其徳小にして害また大也。就中かの鶡太は性倥強惡にして、鶯の翅をあなどり、鷹の爪のときことをおそれず。肉は鴻鴈の味もなく、聲は黃鳥の

のひゞき、或はつよく或は和らかに吹て、且人をして泣しめ人に心をつく。萬籟悉號ひゞき替て、句毎の意味各々別也。只これ天籟自然の作者。芭蕉は破れて風飄々。

これは 雪しやれて翁閑けん芭蕉洞 井海
と云句にて、一卷を送りし時の嘆美なりと云々。(一葉集)

所 思

龜子が良寸是華原神童子か。且予が附句禁止之事申分尤あさきにあらず。されども生涯五十にちかく天命私にはかりて今より十年、日數三百日間の愁に一日を損し、一夜の樂は一夜のよろこび、身に行ずることはなけれども、六塵おのづからちか付く、さればおのづからけがれすくなし。只三千六百の日數をかぞへつくす、無常迅速の觀中において何をかさたせん。しらす只一念動する、風雅の情のみをしれども、いまだ宗因ごときの興作なし。宗因ごときの惡句なし。只善惡の兩意をいはむ。病魔仙狐の障をう

(一)本文題なし、今假に題を設く。枇杷園隨筆
(二)芭蕉翁遺跡、徐英にありと記せり。されどいぶかしきふしなきにあらず
(三)凡兆の文を増補して、芭蕉の作としたるものとか、元祿三年の事なり

文集

吟にも似ず。啼く時は人不正の氣を抱て、かならず
凶事をひいて愁をむかふ。里にありては栗柿の梢を
あらし、田野にありては田畑を費す。糞に辛苦の勞
をしらずや。或は雀のかひこをつかみ、池の蛙を喰
ふ。人の尸をまち牛馬の腸をむさぼりて、終にいか
の爲にいのちをあやまり、鵜の眞似をしてあやまり
を傳ふ。是みた汝むさぼること大にして、其智をせ
めざるあやまり也。汝が如き心貪欲にしてかたちを
墨に染たる、人にありて賣僧といふ。釋氏もこれを
憎み俗士も甚うとむ。嗚呼汝よくつゝしめ。罪が矢先
にかゝりて三足の金烏に罪せられんことを。(一葉集)

畫讀

かさ着て馬に乗たる坊主は、いづれの境より出て
何をむさぼりありくにや。このぬしのいへる、是は
予が旅のすがたを寫せりとかや。さればこそ三界流
浪のもゝ尻、おちてあやまちすることなかれ。

芭蕉翁

(二) 馬ほくく我をゑに見る夏野哉 (水の女)

(一) 天和三年の句
なれば、此文
も同年にや

書簡集

延寶六年

追て申入まゐらせ候其許に逗留中に清草御歸りに御約束申候短冊此度遣し申度存候へつれども二三度ばかり認め申候處さんく不出來見苦しく候故其許へ御出若御尋候はゞ此段御申達可被下候何方へもたんざく御免し被下候様申事に候我等手跡にては及びがたく候發句は書入進申候

わすれ草茶飯に摘ん年のくれ

如此に御座候能々御申可被下候又重而宜しく出來候はゞ其節進じ可申候以上

廿二日

はせを

条月丈

(一葉集)

延寶七年

嬉しからぬ月日身につもりてといふ題にしてヒナヤ立甫の句

はななりし身をば何とて捨坊主

ゞづれにもおもしろき句に候我も此心とりて

(一)天和時代に、正秀の名を見ること不審

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

いかゞあるべく候哉此句風情おもく立甫句かるく

おもしろく候とかく上手下手の違はづかしき物に候十五日

十五日

三

千

丈

はせを

(俳人芭蕉)

天和元年頃か

早春佛頂和尚へ御狀被遣候を則愚庵へ爲持御越微細熟覽仕候處、木兎の角あるけしき先感心仕候うへ病床に病と組て勝負を御あらそひ、終に大眼悟哲の勢ひ驚入奉存候。和尚の肝腸いまだしかと探られず候間重而評判可申進候。和尚にも舊臘は寒ぬる候故、御持病もころよく、愚庵まで手をひかれて一夕御、大道の咄し止て俳諧にて到半夜候

梅櫻みしも悔しや雪の花

と御申し候感心致事に候。且又正秀(一)三ツ物、さてくおどろき入、定て御ちからかり候ものと甘心仕候。褒美之旨、正秀へ申遣候間除筆候

(あて名不明)

(枇杷園隨筆)

天和二年

傘下駄御もたせ被下御世話存候。蚊帳鼠に喰れ申候、おまきに御縫せ可被下候。燒跡蚤蚊多、殊之外朝寝仕候。

七日

はせを

三碩様

(もとの水)

天和三年

飲酒一枚起請

もろこしわが朝にもろ／＼の上戸達のさたし申さるゝ酒もりにあらず。又かちんをくひ、茶をのみて、飲る酒にもあらず。只往生極樂の爲には、南無阿彌陀佛と申て、疑ひなく往生すると思ひとりて、一杯のむより外別の子細は候はず。但三献四種の肴など申事の候は酒宴も決定して、珍らしき酒肴求たると思ふうちに籠り候なり。此外におく深き大盃は、二尊の御あはれみにはづれ、本性をうしなひ候はんを愛せん人はたとへ一代の法を學すとも、一文

不知愚鈍の身になして、下戸にも常にふるまはせて、只一向に酒を飲べし。

右飲酒一枚起請は尊朝親王御作のよし承候。尤さる人の許には、御眞筆にて掛物にして床にかゝり有之候。あまり／＼面白き御作故ちよと寫し來り候。貴文常々大酒をせられ候故、此御文句を寫して大酒は無用に存候。仍一句

朝がほに我はめしくふ男かな

如何、委しき事はやがて御目にかゝり、萬々可申述候以上。

十七日

はせを

其角丈

(芙蓉文集)

天和三年か

御俳諧被遊候や。此發句など被遊候はゞ便に可被遺候。春は其角集あみ申候間入集可仕候。私は宿は橋町彦右衛門と申もの店にて桃青と御書付可被成候書音も廣クハ六ケしく御座候故、所付をも外へは不申遺候之間、左様に御意得被成可被下候

御前可然奉頼存候。恐惶頓首

霜月十八日

芭蕉桃青

中尾源左衛門様

濱市右衛門様

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

貞享元年

追而申入候、内々の事は如何被成候哉是もすてはおかれまじくやうに存候、貴丈にも萬事氣のつく人に候へば、定而ぬかりはあるまじくと存候。ひよと我等も口を添候故心もとなく存候。ひきやく便に様子等こま／＼御申越可被下候。夫に付此ほくいかに花にうき世我酒白く食黒し
此發句のころに身持可被成と存候。言水など共御出合之節はよく／＼御頼可然候。頓而之内に上京候て可申承候

廿二日

はせを

任口丈

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

御文被下殊に何寄の一種送り被下御厚志之所察入

貞享二年

實やくれなむは園生にうゑてもかくれなし名のらぬ先により政とも見ゆるほどの徳あり句を味ふ時はいづれの句にてもその相應にとりなして其徳をあらはし政公にもおとるまじやとひとり自慢たら／＼申もいとばかしく候
雪の朝ひとり干鱈をかみ得たり
海くれて鴨の聲ほのかに白し
此二句申入候追々せいぼの句も貴様方に出来可申爲御聞可被成候何事も跡よりに候以上

十二日

桃青

落水丈

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

(二)久居の殿様か
伏見の上人か
何れにしても
此書簡不審

三志丈

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

草枕月をかさねて露命恙もなく今ほど歸庵におもむき尾陽熱田に足を休る間ある人我に告て圓覺寺大巖和尚今年む月のはじめ月まだほのぐらきほど梅の匂ひに和して遷化し給ふよしこまやかに聞え侍る旅と云無常と云悲しさいふかぎりなく折節の便りにまかせ先一輪投机右而已

貴墨添拜見御無事之由珍重奉存候其許滯留之内得閑談候而珍希申候

一愚其元にての句

から崎の松は花より臙にて 御覺可被下候

山路来て何やらゆかしすみれ草

其外五三句も候へども重而可申候

一此秋此秋のあらそひ右此道是非をあらそふも道の

一にて御坐候へどもあながちに句論の事愚意好し

からず候間兼而能ほどに御あらそひ御尤に候

一其角へ御状重而返状可仕候嵐雪他國へ罷候間不及

貴報候何やらかやらいまだ取込舊友久々嘶ども指

つもり手透無御坐候貴報頼存候

一澁谷與茂作殿堅固に相見え御手跡見覺候以上

五月十二日 芭蕉桃青

千那貴僧

(一葉集)

右の句致候猶頓而可申承候以上

廿二日

はせを

追て申入候此中はふじに長々逗留其上何角御世話

鶴の巢も見らるゝ花の葉越哉

昨日は御出の處坂本へ參候不得御意残念に候貴丈にも近々長崎へ御下りの由御太儀存候隨分御支度可成候又々大分御金まうけて追付御歸り待入候然ば此書狀萩へ御寄候はゞ文字方へ御とゞけ可給候御逢候はゞ口上にも菓物の儀御咄可被下候出來次第下し可申候又々貴丈へ引當て

に成候不明別而御内方様御世話に候いそがはしき中にうか／＼いたし居候而きのどくに候長雨にふりこめられ候事とかうに及がたく候

行駒の姿に慰むやどり哉

不明いづれへもよろしく御まうし可被給候くはしきは

十三日

桃 青

空 水 丈

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

笹岡五郎右どの御上京に付ちよと申入候愈御家内御替りも有まじくと押はかり申候だん／＼暑に罷成候而愚老などしのぎかね申候貴様には精分つよくさほどにもあるまじくとうらやましく存候何ぞ宜句出候哉うけ給り度候然ば盤齋背向像に一句

團もてあふが人のうしろつき

此句致し遣候寺町の秋田屋方へ表具を頼みに人遣申くれ候貴様にも秋田屋事御近付に候間今日の内に御出候而御尋可被下候とかく様子はやく見申度候さて又貴様方いつぞやの十二枚まくりの繪にて其まゝ

十三日

桃 青

和休丈

(一葉集)

坂本にて一宿、早苗に鹿を追ふ聲なつかしく覺え申候。坂本の鹿いづれの秋にかと存る斗に御坐候。罷歸候得ば又いつ上り可申様にも無御坐一しほ御ゆかしさのみに候

下向の頃桑名本當寺御會に

芒をきつて筈に茨けり

琵琶負て鹿間にいる篠の隈

坂本を心の底に置候か

熱田會に

ひとり書を見る艸庵の内

二町ほど西に碓の聞ゆなり

重て委細に書付可進候

七月十八日

(千那、尙白、青鳥あてのもの)

(枇杷園隨筆)

貞享三年

口上

此頃の俳諧殊の外不出来に候得共任御望寫進上いたし候。尤其角が無分別なる所中々及ぶべからずとみなし驚き申事に候

廿二

はせを

仁兵衛様

(もとの水)

一石清水瀧本坊法印の許へある在家よりなた豆一籠贈りければ其返事に

辨慶が七つ道具のなたまめは

日本一のかうのものかな

さて／＼おもしろき狂哥中々及びがたき事に思ひ侍るしかし我も一句をせんとて狂哥の心をもちて

辨慶は夏もかみこの羽折哉

これら精一ばいにて候むかしの名ある人の口心には叶ひがたく候かしこ

はせを

(一葉集)

名月前態々御隙に被成御待可被成義御用候はゞ御

勝手に可被成候拙者下り候事いつも難定候間名月過にも成事可有御座候越人も如此發句いたし候

稗の穂の馬迅したる氣色哉

愚句又

猪もともに吹るゝ野分かな

如何に候半や能と申にては無御座候先懸御目候さ

て加生越人へ挨拶

男ぶり水のむ顔や秋の月

八月四日

はせを

千那様

(落葉考)

一近日芳野行脚存立候間金子二分御かし可給候押付

もらひため返済可申候。されど吾等事に候へばえ

なすまじく候以上

はせを

(一葉集)

去來様

宛名は「一葉集」によりては元禄元年をよしとす

前の「昨日は御出」の書簡と關係あるに似たり

追而申入候、日外其許にて御めにかゝり申候長州の西光寺御坊より書狀參候尤六條より相届申候是は御便之由申來候右返事其許より長州へ御下し可給候往來のかゝりものは此方へ御申こし可給候さて相移のほ句は如此に候

鶴の巢も見らるゝ花の葉越哉

以上

十七日

はせを

三志丈

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

夏花集脈筆書拔は御仰候へ共名前次第之跡書直し可申と存候へ共其儘と有之いづれにも近日書添へ可仕候まゝまづ／＼御まち可被下候

一泰堂主に別書申上候まゝ是もきぬせつ下され書寫

之事被仰越候へばちかき内

坐候

朝顔は酒盛知らぬさかり哉

はせを

羅月様

(五十嵐竹浪氏壽眞蹟)

元禄元年

其元御無事と見え候而歳旦伊勢にて一覽珍重に存候拙者無事に越年いたし今程山田に居申候二月四日參宮いたし當月十八日親年忌御座候付伊賀へかへり候て暖氣に成次第吉野へ花を見に出立んと心がけ支度いたし候尾張の杜國もよし野へ行脚せんと伊勢迄來候而只今一所に居候卯月末五月初に歸庵可致候木曾路と心がけ候深川大屋吉御逢候はゞ可然奉願候よく御傳被成可被下候いまだ爰元にても發句も不致候

參宮

何の木の花とはしらす匂ひ哉

追啓二見淺熊へ參候爰元方々へ馳走残り所もなく候間萬御氣遣ひ被成まじく候

一濁子丈御子達御奥方御堅固に被成御座候拙者

無事之旨御告可被下候其元別條無御座候はゞ御狀不

及候若急に御しらせ事御座候はゞ關の地蔵にて笠屋

彌兵衛と申者迄飛脚便御狀可被遣候二月十八日より

三月十四日までは伊賀に居申候以上

杉風様

はせを
(芭蕉翁眞蹟拾遺)

今日長次郎殿京へ被參候に付ちよとばかり申入候
其後は御遠々數存候彌無故障御入候哉と押計存候愚
身も無事に暮申候さては内々御頼置候物どももはや
此節出来可申哉と存候急々に御下したのみ入存候先
方にも見たがり被申候何分はやく被遣可被下候祭も
だん／＼近より候故せくも尤に候在邊之事故度々言
傳に申參候かしこ又此間

網代民部の子息に逢て

梅の木に猶やどり木の梅の花

此句挨拶にいたし候故貴様まで申入候さて客來多
取込早々以上

廿一日

左柳文

桃青
(眞蹟集)

其角様

(一葉集)

痛入たる御音信奉存候一兩日御物遠罷過候昨日
より嵐朝へ參一宿仕候先以先夜民部殿へ被召寄候而

三月十九日伊賀上野を出て三十四日、道の程百三
十里、此内船十三里、駕籠四十里、歩行路七十七里、
雨に逢ふ事十四日

(一)同に『清盛
石塔、忠度塚』
『通盛塚、松風
村雨塚』

瀧の數 七ツ 龍門 西河 蜻蛉 蟬 布留

布引 箕面

古塚 十三 兼好塚 歌塚 乙女塚 忠度塚

清盛石塔 敦盛塚 人丸塚 松風村雨塚 通盛

塚 越中前司盛俊塚 河原太郎兄弟塚 良將楠

塚 能因法師塚

峠 六ツ 琴引 躰峠 野路小佛峠 櫻尾峠

クラガリ峠 當麻岨屋

阪 七ツ 粧坂 西河上ちいか坂 うはかり

坂 宇野坂 かふり坂 不動坂 生田小野坂

山峯 六ツ 國見山 安禪嶽 高野山 てつか

いか峠 勝尾寺の山 金龍の山

此外橋の數川の數名もしらぬ山は書付にもらし申候

卯月廿五日

惣七様
(枇杷園隨筆)

書簡集

其後はひさしく御目にかゝらず御遠々しく罷過候

廿日

はせを

(二)同に『躰峠』
の次『くちか
り峠、當麻岩
や峠、小佛峠、
櫻尾峠』
(三)同に『西河上
ちいか坂』
はか坂、かふ
ろ坂、生田小
野坂』
(四)同に『勝尾寺
山、金龍寺山』
(五)同に『山々は
書もらし候』
(六)『芭蕉翁眞蹟
拾遺』にこの
書簡『桃青』の
二字のみ白筆
にて他は萬菊
の筆なる由記
せり

萬菊
桃青
(枇杷園隨筆)

自尾州二十二日に御歸りの由被仰越候先御そく才
にてめで度候道の記御認御遣し一覽候いづれも出来
申條信濃路にて二三句は別而よろしく候
雪ちるや穗屋のすゝきの刈殘し
此句類なく候べし愚老句より貴様の句上になり候
委は面談とあなかしこ

人の氣や花に乘行さくら川
漸々此句にて芳野をすまし申候少御下り可被成候
寄合一會申度候爲指事も無之候得共あまり／＼無音
故如此候以上
廿一日
石せ三之承様
(芭蕉翁眞蹟拾遺)

はせを

信分丈

(一葉集)

信濃路は雪深き所にて野山も白たへとうつりかはり候へども着物にはいまだつもり不申候

雪ちるやほ屋の薄のかりのこし (落葉考)

元祿二年

追而申入候此度三度飛脚に申遣候事は京の勝手よく存候故指圖せられ候からす丸通りにていづれにても御誂御下し可給候文庫並革にて覆ともに頼入候料は書付御下し可被成候又々飛脚に上可申候さて俳諧もはやり申候何を申てもけはしき處故しみくとは出来不申此ほど愛宕の下へ參申候二三會も興行有之江戸衆も參り上手になられ悦び申候

蛤にけふは賣かつわか菜哉

右の句を元にして百韻いたし其節其角なども參りおもしろく慰み申候貴丈事噂申出候猶追々可申入候

廿三日

秋風丈

(一葉集)

はせを

寶壽院と申僧今日上京候付申上候愈御別條無之候哉承度候さては先頃御頼申上候額字出来候はゞ此僧に御渡し被下度候委細は御晰可被申上候借々御世話に奉存候さて又内々御たのみ申上候千字文來月中に御出来被下候様内々御心がけ奉頼候先様より便の度毎にせがみ遣候此中口ずさび申一句

ほととぎす啼音や古き硯箱

いかゞ思召候哉をかしく被存候近々參候て可得御意候以上

十一日

北向雲竹様

(眞蹟集)

はせを

追而申入候貴丈御國本へ御下りの時分ちよと爲御知可被下候書狀一通頼申度候はやく認候而は日取の間違いかゞに候夫故認置不申候二三日の間違などはくるしからずと頼入候さて發句は

さみだれにふり残してやひかり堂

鰯口の銘には和泉の三郎忠衛と彫付鯉也

いかゞ候哉隨分御仕合よく御歸京待入候以上

「に」とあるは「の」の誤字なるべし

「字都宮市入野氏共此津市横入氏共此津市横入」の書簡を蔵せりと云

此句は不卜一周忌の句にて元祿五年也

十三日

落水丈

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

はせを

附合十七體別紙に記進候初心には見せ被申まじく候術の叶ぬうちに此味を付んといたし却て一句も調子附意もしれぬ事に成るものに候又むづかしものなり斯る味はとて叶まじと退く人も有ものにて候術叶ひ候後に扱ひ候へば一卷のはこび甚むづかしき處にて人の付なづみたるを或は響あるひは情などにて發して付て變化おもしろく成申候さもなき人は打越三句をおそれつまる處はいつも逃句のみ致し候は初心に見え功者おこして二三句も附たる上に無理に付るも姿天に砂道をたどることくなるものに候能々御考御扱被成候はゞ鬼に鐵棒にて可有之門人の中にも五七人ならで沙汰致し不申候名高くて付合の術さほどになき人却て迷ひ可申と存候故に候かくし申にては無御座候十七體を得たる上が千變萬化の術をえる事に候只付と付ぬといふ事ばかり知て付合は千變萬化と口にて云人御座候をかしく候十七體の

元祿二年六月二十七日は越後族中なるべし

法もしらずして何とて千變萬化の働が出来可申哉百韻千句に及ても附心一二體を出不申候知たるものは咬ひ候小器はやくみつる輩おほく後には人々あげて通じ相手にならず只四五人同心の連中にて互に他をそしり高慢に成かけ候て俳諧は氣違など名を付られ候もあさましく候御連中萬御しめし可被成候

六月二十七日

結ぶよりまづ齒にひやく清水哉

北枝様

(一葉集)

先日は立寄さまゞ御馳走殊にわらじまでもらひ忝存候翌日俱利伽羅を越、金澤へ着申候、因縁も候はゞ再御目にかゝり可申候以上

七月二十三日

宮永治兵衛様

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

はせを

以手紙申入候久々御物遠に打過候へ共いよ御さゝはりもなくめでたく存候さて又ながのの旅路色々さまゞ御咄申度事ども山々御さ候爰元に着い

たし候ては何の別條もなく不相替そく才に居申候二見の句御目かけ申候

給のふたみに別れ行秋ぞ

尚々委細は先達曾良に御聞と存候近々得御意可申

承候以上

十三日

はせを

清右衛門様

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

保生佐太夫三吟に

老の名の有ともしらで四十雀

少將尼の歌の餘情に候

素堂が菊園に遊びて

菊の香や庭にきれたる沓の底

野坡と云もの四吟に

金屏の松の古さよ冬ごもり

猶廣く他見被成間敷候追付俳諧杯可懸御目候去ながら當冬は相手になるべき者無御座候へば俳諧も成申間敷候廣き江戸に相手のなきも氣の毒に存候當方無恙五句付點取に脾の臟を捫む體に候此脾の臟もみ

破りたらん後初て俳諧はやり出可申候何方へも久々絶書音膳所へ連狀一通此狀のみにて大垣大坂へもいまだ初夏より返簡不致候落字文章の前後はゆづり候て御披見可被下候當年めきとくたびれ増り候上方邊繪色紙いまだ調ひ不申由重て可申遺候將亦此度石摺大色紙四枚被懸御意忝折節屏風入用にて別て喜び申候五老井の小豆も日やけにあひ可申煎煎茶可被下よし遅てもくるしからず候能便宜に少々可被懸御意候頃日あへ茶にも給あき申候以上

十月九日

はせを

許六雅丈

(一葉集)

一松岡茶店にての句物書て扇引さくわかれかなと直し申候脇手には留にて候手には留は脇にては草にて神祇追善祝儀本式俳諧貴人の挨拶すべて我より上たる人の發句にはせぬ事に候我も只今にては其許の師に候間挨拶の脇に手には留はよろしからず候外より彼是申もの御座候而は兩人ともに不東に見え申候山中間答にも三ツ物の事御尋なく我も心

(二)此書簡は元祿六年なるべし

付不申候此度委しく三ツ物傳別紙にて申入候是にて第三文字留草の事も能わかり申候山中間答へ御書加へ可被成候去來文章凡兆正秀なども問答見たがり申候脇付替り候は第三四句め付て可進候御望みの兩吟はじめ可申候春は西國望み御座候間冬中調へ申度候されども伊賀へ用事も御座候間伊賀を先に可致も難計候ちと親類内用にて捨がたき事に御座候伊賀便り次第に心得可申候西國へは何卒同行に致度候間其御心得頼入候左様に候へば兩吟いそぎ申事もなく候二十六年以前太宰府へ參詣いたし候外連二人我と三人にて歩行候へども知音もなく候て見物所ばかり尋歸候宗房時分の事に候へば處々發句留候へどもをかしからずとのはぬ事のみにて一句も嘶事なく候間此度は吟じ直し度存念に候其許同行においては十人にもまさり力をえ候事に候間決定の御返事まち入候又々問答可致候萬子牧童秋の坊句空小春などの英雄へも能々御達したのみ存候不具

十月十三日

はせを

書簡集

北枝様

(一葉集)

元祿三年

いかにしてか便も無御座候若は渡海の船や打われけむ、病變やふりわきけんなど方寸を碎而已候、されども名古屋の文に御無事之旨推量に見え申候、拙者も霜月末南都祭禮見物して膳所へ出越年

歳旦京ちかき心

菰をきて誰人います花の春

冬

初時雨猿も小囊をほしげ也

山中の子供と遊ぶ

初雪に兎の皮の髭つくれ

南都

雪悲しいつ大佛の瓦ぶき

京にて鉢たゝき聞て

長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき

歳暮

何に此師走の市にゆく鴉

急使早々に候正二月之間伊賀へ御越待存候宗七も御申斗に候

正月十七日

萬菊丸様

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

はせを

何人かともいかゞ御評まち入申候
菰を着て誰人いますとも (一葉集)

越人よりも状こし候よし、一段の御事に御座候。

此方へもとゞき候發句有之候。

此君舎より白米五斗發句一句
一に依ふまへて越よとしの坂

かくめぐみ給ふに只四壁なるかりのすまひ

には過たる年だまながら寢覺こゝろよくて

元日や疊の上に米だはら

北 枝

さてく感心不斜神代のこともおもはるゝと云ける句の下にたゞん事かたく候神代の句は守武神身分相應に情の奇なる處御座候依は其元相應に妻の妙なる處有之候別而歳旦歳暮不相應なるは名句にても感慨なきものに候今天下第一の歳旦なるべしと京大津の作者も致稱美候不備

正月二十四日

北 枝 様

誰人が菰着ています花の春

芭 蕉

一愚句被成御覽候由させる事も無御座候へども出申し候は無事の有處をせん爲に板木に顯し候又一は京の門人去來など云ふものにそゝななされ可申

二月二十二日

珍 夕 様

(枇杷園隨筆)

出候五百年來のむかし西行の撰集抄におほくの乞食をあげられ候に愚眼故よき人見付ざる悲しさに二度西上人と思ひかへしたるまでに御座候京のものどもは菰かぶりを引付の巻頭に何事にやと申由あさましく候

卯月十日
此 筋 丈
千 川 丈

は せ を

たれ人かこも着ています花の春 (一葉集)

今日宇治へ參候貴丈にも御出被成まじく候哉此元仙水にも被參候管約束申候大坂よりうちへ直に杉風なども被參候様に申來候貴丈御出候へば件の方勝手よく御存故一入に存候愚老は此中上林三人老所にて一句申候

螢見や船頭酔て覺東な

右の句にて御座候野坡丈へは貴丈より御申越可被下候此中は手しびれ候故筆跡も龜末にしたゞめ候段御免候以上

卯月二十一日
去 來 丈
は せ を (一葉集)

以手紙申入候其後は久々不申通候所却而御狀被下候御あとに成迷惑に候彌御無爲目出度候事に候此方御同前に居申候然ほ句

夕べにも朝にもつかず瓜の花
花と實と一度に瓜のさかり哉
右兩句申入候猶追々可申入候以上

二十三
不明
子 丈
は せ を (芭蕉翁眞蹟拾遺)

池魚の災承り我も甲斐の山里に引うつりさまく苦勞いたし候へば御難儀のほど察し申候されども焼にけりの御秀作斯る時に望み大丈夫感心去來文章も御作驚き申ばかりに候名歌を命にかへたる古人も候へばかゝる名句に御替被成候へばさのみをしかるまじくと存候知音たれく此度の難にまぬかれずや連中たしかなること不承候間短紙も不遺候能御傳達可

被下候以上

四月廿四日

はせを

北枝様

(一葉集)

重て得御意候事も可有御座候随分御無事に御勤可被成候諸善諸悪皆生涯の事のみ何事も御たのしひ可被成候少にてもむづかしく候て早々及貴報候

七月十七日

はせを

牧童様

(一葉集)

元祿四年か

乙州上津の節御細翰辱存候其許大雪の由一尺ばかりは此方へ申請度候愈御無事に被成御勤候哉拙者持病ノとのみ顔しかめたるばかりに御座候歳且等いかなる風流にて御座候や此方年々の事故當春は非番にいたしたれせつく者も無御座候是まで色々の骨折さへくやしき事に覺候貴様集の事不埒なる様に御思ひ候半と氣の毒に奉存候御結句空僧まで申達候間御内談可被成候何卒暮春の初は上京と存候頃日寒氣故持病散々神以氣分重く御座候て早々如此御座候牧童へ可然御心得被成可被下候以上

正月三日

芭蕉

退而書

(一)芭蕉翁真蹟

拾遺に御用

珍しく

出座いたし

消息集には

「妙」とす。何

れにても文

意不通。或は

「例」か

(四)同一に「其元

にて書候物は

御鏡不被成候

よし米櫃はや

け可申と存候

此度一二枚書

進候急々書候

て例の通見候

るしく御座

候と退書あ

りこれは一葉

集には乙州

上津の状に

つげたり、今

あはせ出だす

(五)この退書「隠

士秋の坊」の

書あり、今あ

はせ出だす

其許にて書中候ものは御鏡不被成候由米櫃はやけ可申と存候此度一二枚は書進申候急に書候て例之通見ぐるしく候以上 (一葉集)

元祿四年

三日口を閉て題正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛

金平が分別のごとくことしは休みにいたし候て歳

旦おもひもよらず候へども如此御座候以上

はせを

曲水様

(一葉集)

同年か

嵐蘭雅丈

芭蕉

(一葉集)

(一)「芙蓉文集」に
此書簡を元祿
五年と推定せ
る東花坊の奥
書なるものを
附載しあり

幸便啓上如何被成候哉と御懷敷而已に候御老母様御内御子達御息才に御入被成候哉承度奉存候拙者舊冬甚寒ことの外痛候へども頃日は又々常の通に居申候間定て當年中には懸御目而可有御座候何とぞ御堅固成様に被成今一度再會御待可被下候拙者も随分保養いたし候て懸御目度存候加右衛門殿無恙御勤渡成候哉北覬子御兄弟無事に候哉承度奉存候定て世

書簡集

此處よりも愚墨進覽候處に先よりも預音問御對顔の心地にて拜見仕愈々御堅固被成御座候旨千萬目出度存候竹助殿御沙汰いづれの御状にも不被仰下候御成人わるさ日々につのり可申と存候歳且三物の事先書に具に申上候愚句年々口にまかせ心にうかぶばかりに申捨候へども是を歳且の名残にもやと存候へば精を出し候處御耳にとままり候へばかひある心地せ

られ悦びに不堪候

一幻住庵上葺被仰付候由珍重存候うき世のさた少々
遠きは此山の事と折々のねさめ難忘候露命にかゝ
り候はゞふたゞび薄雲の曙をと被存候

一風雅の道筋大方世上三等に相見候點取に晝夜を盡
し勝負を争ひ道を見ずしてはしり廻る者ありかれ
等は風雅のうろたへものに似候へども點者の妻子
をはごくみ店主の腹をふくらし候へば僻事せんに
はまさりたるべし又其身富貴にして目に立慰は世
上をはゞかり人事いはんよりはと日夜に二巻三巻
點取勝たるものもほこらず負たるものもしひて怒
らずいさ又一巻などゝ取かゝり線香五分の間に工
夫をめぐらし終に即點などゝ興する事ども偏に少
年のよみがるたにひとしされども料理をとゝのへ
酒を飽までにして貧なるものをたすけ點者を肥し
むることはまた道の建立の一筋なるべきか又志を
勉め情を慰めあながちに他の是非をとらずこれよ
り誠の道にも入ぬべき器なりなどはるかに定家の
骨を探り西行のすぢをたどり樂天が腸を洗ひ杜子

が方寸に入べき族都鄙をかぞへて十の指をふさず
君も則此十の指たるべし能々御慎御修行專一に存
候

一路通事は大阪にて還俗いたしたるとの事推量いた
し候其志三年以前より見え來たる事に候へば驚に
たらず候とても西行能因の眞似はなるまじく候へ
ば平生の人にて候常の人が常の事をなすに何の不
審か可有御座哉拙者においては不通仕まじく候俗
になり候へてなりとも風雅のたすけになり候半は
むかしの乞食よりまさり可申候

二月十八日

はせを

曲水様

(一葉集)

同年

芳翰辱餘々拜見いたし候御老母様御内室むすめ子
御無事之由めでたく存候拙者持病も暖氣にしたがひ
少し宛快氣に候間可安御心候
一乙州江戸へ立候付跡の事御精に可被入と乙州方よ
りも申越鐵のたてをつき並て拙者も安堵悦び難盡

候

一歌仙さてゞ感心仕申候かほどまで獨はたらき大
切の風雅驚入申候則付置いたし候乍去こゝもとに
ても人々取付候て此返事の内も同名が茅屋ほこり
の中へ大勢入込候而御報も批判もしみゝならず
候疎なる處は御免被成可被下候

一同名方へ被掛御意候而清茶一袋さかな一種被遣さ
てゞ忝御厚志難盡候茶は拙者賞翫いたし候
一粟津草庵の事先は御深切之至忝存候兎角拙者浮雲
無住之境界大望故如此漂泊いたし候間其心に叶ひ
候様に御取持奉頼候必これにつながれ心をうつし
過ぎる様の事ならば如何様とも御指圖可忝候しは
らく足のとゞまる所は蜘蛛のあみの風の間に間に
と存候へば足駄の藏も藏ならず候さすがの御人々
申もくどく候へば打まかせ候。(一葉集)

御手紙被下候昨日は知人にさそはれて四條の芝居
見物にまゐり一日遊び申候又々氣も晴候而おもしろ
く御座候俳諧などはちがひ是にてははいかいもや

めにして遊興斗がよく候

口切に境の庭ぞなつかしき

茶のほ句は是より外に覺不申候 如此に候以上

十二

はせを

木子丈

(加藤霞村氏藏眞蹟)

處々御一覽御歸宿被成候哉もはや頃日はと推察申
候かみ様よりも念頃忝存候

道中之風流風の侘さてゞ御物語承度候宗五も折
節上京留主にて手筈ちがひ候半と存候先々大義御願
珍重御手柄に御座候拙者相替候事無御座頃日は
嵯峨去來下やしきに居申候養閑竹の子を給申候大井
川の舟遊び俗客にはあゆを振舞嵐山朝暮の詠めにて
御座候富士いかゞ以上

五月十日

桃 青

意專様

(一葉集)

先月十一日之御狀廿日過に相達拜見いたし候其許
御替りも無之候由めで度存候愚老もぶじに不替くら

此「芙蓉文集」に
此文あり、如
「風雅此頃盛
に思召候よし
尤さこそと被
存候凡俗の人
さへもてあそ
び候ものを隨
分御成候及肩
老被下候御傳
可被成候何角
仕度候先々取
重申候候以上
二月十七日
芭蕉

昌房探子兩丈
正秀雅士
下へ御心得可
候去々年中御
心に被懸御厚
情々世上がま
申し候へば不
申候心以上

し申候ひさく、無音心外に存候併幾年無音致候も御
互に心にかゝる事はいさゝか無之候貴様俳諧あがり
申候由影にて承申候此方指而めづらしき句も出不申
候此申去方にて

袖の花にむかしを忍ぶ料理の間

取あへず相抄迄に申捨候いかゞに候や又々重便之
刻よろしきも出候はゞ可申入候此中御状之御報なが
ら如此に候以上

廿五日

はせを

松風丈

(故藤井培屋氏藏)

何處持參之芳翰落手御無事之旨珍重に存候類火難
御のがれ候よし是又御仕合難申盡候残生いまだ漂泊
止す湖水の邊りに夏をいとひ候猶うら風に身をまか
すべきやと秋立頃をまちかけ候且兩御句珍重中にも
せり賣の十錢生涯かるきほど我世間に似たれば感慨
不少候口質他にこえ候ていよ／＼風情可被懸御心候
愚句

京にても京なつかしやほととぎす

暑氣にいたみ候而及早筆候

季夏廿日

はせを

小春雅丈

十通をえて存候の御りけり 小春 (一葉集)

度々預貴墨候へ共持病あまり氣むつかしく不能御
報候昨夜よりも出候名月散々草臥發句もしか／＼案
じ不申候湖へもえ出不申候木曾塚にてふせりながら
人々に對面いたし候各發句有之候

月見する坐に美しき顔もなし

なき同前の仕合にて候當河原涼の句其元にて出か
り候を終に物にならず打捨候を又取出し候御覽可
被成候

川風やうす柿着たる夕すゞみ

職人のでしこ感心仕候落書もことの外御出かし被
成候少し氣むづかしく候故早々申上候

十八日

はせを

加生様

消息集「こち風」に

(一)此書簡何れか
一方は傳寫の
錯誤ならん

去來子より御左右無御座候御病兒いかゞやと無心
許被存候 (一葉集)

其角も一兩日中には東武へ歸申候左候はば今夕催
一會たく丈御御同伴御入來待存候御知せのため如此
御座候以上

八月廿八日

尙々今朝御目かけ申候

白露もこぼさぬ萩のうねり哉

はせを

古庭や寝もせず起す萩の花

其角

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

前日は寛々閑對不淺存候然ば其角も一兩日中には
東武歸國申候左候はゞ今夕饒別一會いたし遣し度候
條文章等被仰合暮前より御來駕まち入候以上

長月十一日

落柿舎主人

尙々今朝の吟御目かけ申候

しら露もこぼさぬ萩のうねり哉

其角

古庵や寝せず起さす萩の花

其角

書簡集

(一葉集)

御手翰辱拜見夜前は得閑談珍重不少候明日御立可
被成の旨後刻貴面に御相談可仕候追付御入來これに
て御寝ころび可被成候像贊之儀發句珍らしからず難
儀仕候々様の事にて書付可申や

秋のいろぬかみそ壺もなかりけり

しづかさやえかゝる壁のきり／＼す

御用捨なく可被仰下候おなじくは御免外に白紙に
おもふこと書進上申度候以上

即時

はせを

句空社兄參る

(一葉集)

申進たき事は山々に候得共此間者風氣に候故ふせ
り罷在候ほ句の事もそ／＼にして置候近所の衆も
寄集何角咄等も被致夫にて風の神も慰み居申候ほ句
むかし閑秩父殿さへ角力取

是も風氣故この風 句御笑ひ草迄以上

十九 意水丈

はせを (芭蕉翁眞蹟拾遺)

四四七

此中は御待被下候處近在へ參候而御めに懸らず殘念不少候さては貴様にも近々田舎へ御下向之由だん／＼寒氣におもむき候而御苦身千萬に存候隨分御達者に頼而は御上京まぢまゐらせ候然ば發句の事御申置候彼方へ御見やげに成候様のよろしき句も無之候へども御申置故此句申進候

馬かたはしらじ時雨の大井川

如此御坐候いかゞ候哉猶あとより追々可承候

十月廿二日

はせを

洞水丈

(一葉集)

尙々今日は御入來可被成と相待候處近頃／＼御殘多奉存候かへす／＼此度萬事御懇意忝難盡候爲御見舞三郎左衛門殿被遣誠辱奉存候今日はもし御出可被成かと御亭主ともに相待居候處御殘多儀に御坐候先此度は緩々滯留さま／＼御懇情御馳走御禮難申盡候はいかゝ急に風俗改候様にと心せかれ御耳にさはるべき事のみ御免被成可被下候されども風俗そろ／＼改り候はゞ猶露命しばらくの形見とも思召

(一)元祿元年なるべく兩吟とは別葉と賦せる『雪の花』の巻ならん

可被下候なごやよりも日々便り被致候間明日荷兮まで參可申候はんと存候持病心氣さし候處又咳氣いたし藥給申候なごやにても養生可成事に御坐候間明日頃なごやへと存候
一先日笠寺まで御連中御送被成御厚志之こと可然御禮御意得奉頼候如意寺様猶又よろしくたのみ奉存候追付發足山中より以書狀具可申上候
二三日此かた兩吟いたし大かた出かし候出來候はば被懸御目候様に早々以上
霜月廿四日

寂照居士

芭

(一葉集)

一林雨子兩吟さて／＼甘心仕候世上の俗諧みなみなふるび果候處かゝる新智珍らしく段々とりわき評に不及一卷一體病盲愚案の情見たがふ事無御座候愈御はげみ被遊膳所を花の湖水と可被成候珍夕方まけじと情を出し候
百とせの氣色を庭の落葉哉
はせを
(芭蕉翁眞蹟拾遺)

(一)「一葉集」にこの前語なし

(二)同書に『一年夢の』

尾之露川方より宮重もらひ申候今夕御出候而御料理なされべく候此旨文章へも御つたへ可被下候

六日

はせを

三十里尾張大根のはなしかな

又

落葉してぬかみそ桶もなかりけり

味噌は御持參可被成候以上

(一葉集)

元祿五年

昨日は御はや／＼と御慶に御出被下候俄につれ御座候てせた馬風方へ同道にて參り候故不懸御目殘念に存候さては歳旦之句御たづね置候御書中拜見申候如此に候

年々や猿に着せたる猿の面

をかしき句にて御座候又々永日懸御目萬々可承候

以上

五日

はせを

松風丈

(加藤霞村氏眞蹟)

何某新八去年の春みまかりけるをちゞ梅丸子もとへ申
梅が香に昔の一字あはれなり 武陵芭蕉
一歳の夢のごとくにして獨佛立さらぬ歎のほどおもひやる斗に候
二月十三日
梅丸老人
(笈日記)

然ば御約束之水雞笛贈給忝珍重存候此さとの人々聞馴ず女子共も集り我を藝者の様に申をかしく候行脚先國所により一向音をしらぬ人御坐候間吹て聞せ可申と悦び申候鹿笛も木曾より貰ひ申候時鳥笛も御坐候はゞほしき物に候水雞笛作る人は作るべくと存候御面倒ながら是も御聞可被下候出來候はゞ御頼可被下頼入申候何にても相應望の物細工人へ謝禮致すべく候殺生の道具ながら水雞笛鹿笛も只吹はおかし候初鴈の聲水雞たゞくなど歌にも發句にも作る人のさし竿にてとり網にかけなどいたし候は口と心と相違にて名句吐候ともうそつきと云ものに候へばま

この風人から見ればあはれなることにてたとへ殺さずとも雲に飛地にはしり候鳥をちひさき籠に入たのしひとなすは牢審も同じ事にて候を心付ず籠をならべこれは二兩の駒鳥なりこれは五兩の黄鳥なりと云て摺餅に小袖の肌おしぬぎ高祿の人にもあさましきさまする人武林連中には有ものに候かの開籠放白鬮の詩意など教訓可被成候伊賀の家中の人々にも御座候間土芳にも此事度々申遣候

うぐひすや餅に糞する縁の先

二月十六日

芭蕉庵

一笑様

又武士は殺生するものなりと云人御座候へ共魚鳥を捕へ候が腕がためにも成申まじく候只心のいやしき故に候それくの獵師御座候間これよりかひもとめ料理候事は罪にあるまじく候 (一葉集)

杉風様

はせを

二月七日

昨日は御見舞候而御痛之事ども直々に御物語承先

安堵いたし候

一此書狀加州金澤へ不叶用事申遣候何卒被入御念上包貴様御名を御書被成候而御懇意の方へ御頼被遣返事參候様に奉頼候御家中之風俗届状不届候由兼而承候間貴様上包に被成候而成程儘に奉頼候少々急候間能様に被仰遣可被下候發句も延引可致と存候へ共與風所望に逢候而如此申候

うぐひすや餅に糞する縁の先

日比工夫の處にて御座候

(眞蹟集)

同年頃か

尚々御老母様可爲御堅固奉存候とやかく申内曲水丈春を打越嘸御悅可被成候幻住庵再興之時節も過候間誠まぼろしの日數頼而入庵之節に成可申候貴翰忝拜見並半紙一束被懸賢慮毎々御厚情不淺難筆端盡奉存候御目まひ度々に及申候由氣之毒奉存候陽性上る時候故と存候間養生主要用に存候御公用被仰付候山珍重ながら御持病の御爲如何と無心元存候

卯月廿二日

風流文

はせを

(一葉集)

包丁が牛御手に可被入候南經齊物過半に至候由連衆より申來大儀の處はかを御やり被成候而御手柄奉存候随分清眼微細に御開可被成候且つ拙者持病も折々氣指候へ共大痛も不仕舊友風情之輩せつき申候而よほどやかましく御座候間來月出京可致と心掛申候へどもいろ／＼のがれぬ事ども仕出かし夏秋までも可留たくみいたし候随分抜出京邊貴境にて卯月末頃までは足を可留存候後之事を思案致すまじきよし洒落が棒を送候へば吹風に可任候返翰數多及早筆候頓首

二月廿二日

芭蕉

奴誰雅伯

(一葉集)

同年頃か

追而申進候日外御尋被成候松しま行脚の春發句之事失念風斗存出し候故乍延引申進候草の家も住替る世はひなの家ゆく春や鳥啼魚の目は涙此兩句にて御座候俗々延引之段如在之儀に存候御免可被下候猶委は頓而々々參候而萬々可申入候以上

(一)一本「でかし
たる様」とあ
り。可なるに
似たり

一七月ごろいづ方やらの便りに御狀到來愈御無事に御入被成候哉卓袋が赤味噌のとろゝ汁もなつかしく罷成候京屋如き味噌はるゝ時節に罷成候御客人御息災に御座候哉御噂たのみ候一車坂屋山の方に草菴御結被成候に付號可申よし則存寄候間書付申候

東麓庵

西麓庵

新菴定而西の方に付可申ト是

そくたる様に覺申候土芳に物ずき御究させ可被下候御氣に入候はゞ又改可申候併諧いかゞ被成候哉

土芳無油斷被勤と殊に御尊可承候

聲かれて猿の齒白し峰の月

キ角

只今愚庵に承り候

鷄や椿焚く夜の火のあかり

珍碩

鹽圃の齒々きも寒し魚の棚

愚句

取紛候間早筆卓袋參り候はゞ御かたり可被下候さ

ても人にまぎらされころ際無御座候 以上

極月三日

はせを

意 専 様

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

元 祿 六 年

時鳥聲横ふや水の上 聲や横ふか

一聲の江に横ふやほととぎす

水光接天白露横江の字猶句眼なるべしやふたつの
作いづれにやと推敲難定所水沼氏沾徳と云ふもの訪
來れるにかれ物定のはかせとなれと兩句評を乞 沾

(一)「葉集」に「聲や横ふか」を脱す
(二)「同」に「横江」字句眼なるべし二の作
(三)「同」に「處に水沼氏」
(四)「同」に「なれは」と誤る
(五)「同」に「又に對して」
(六)「同」に「すきもの共來りて」
(七)「同」に「白露横江といふ」

曰横江の句文に對して考之時は句量尤いみじかるべければ江の字拔之水の上とくつろげたる句のほひよろしき方に思ひつくべきの條申出候。とかくする内に山口素堂原安適など詩歌のすきもの共入來りて水上の聲よろしきに定りて事やみぬ。させる事なき句ながら白露横といふ奇文を味合て御覽可被下候

荆 口 丈

はせを (笈日記)

如行老御歸に付乍便申まゐらせ候未餘寒強御座候得共彌御無爲御暮の由珍重御事に候さては先頃留守間に御手紙歸庵にて拜披申候處内々拔書の五冊相認候而此度進申候御心靜に御寫候而いつにても御かへし可成候さて又木曾路にて落馬之時發句申候事
馬士に落さるゝ身は木の子哉
たわみては雪まつ竹の氣色哉

右の兩句御所望故書入懸御目候尙又委細の儀は如行老御物語可成候不能多筆候かしこ

廿四日

一 水 丈

はせを (芭蕉翁眞蹟拾遺)

北向雲竹老へ内々御たのみ申候屏風のおし繪何とぞ今月中頃迄に出來候様責様より御たのみ可被下候彼方法事も三月の末にはつとめ申さるゝやうに申來候左候へば夫迄に屏風共に出來上り不申候ては問合不申自是も度々申越候へ共とかく紺屋の挨拶にてとむと埒明不申さては若州客來御たのみに付たんざくの儀御申被下候とかく短冊は御免可被下候其代りに

句書付遣申候

金屏に松のふるびや冬ごもり

とかく何方へも御理り申入候間先様へ宜敷様に御傳置可被下候取込早々以上

二十八日

葛崎屋十右衛門様

(同)

此中は御文被下ながめまゐらせ候彌御無爲御入よ

しめで度候此許にても不替くらし居候併過し頃より兩足いたみ遠方へは出不申候唯近き在廻りばかりに暮居候次第へは寒はつよく成候故わらぶきの軒にて丸雪の音を聞て

雑水に琵琶きく軒のあられ哉

此一句申進候其表の御連中へ其元より御傳可給候さて手もふるひ見ぐるしき書面御免以上

霜月廿二日

祐子丈

(同)

はせを

元 祿 七 年

口 上

尙々狀數取重候間追而腹一ぱいに書つくし可申遣候

百とせの半に一步を踏出して、淺漬の齒にしみわたり、雑煮の餅のおもみを覺候こと年の名残も近付候にやとこそおもひしられ侍れ。去年の春まだ片なりのときこえし梅のほひも、今とは漸々色香しほらしく存候。御慈愛のほど推察致候。久々便不仕無昔去年中は何角心うき事共多く取重候段同名方迄具に申遣し候間御間可被成候。早々東麓庵の櫻の比はと漸々旅心もうかれ初候。されどもいまだしかと心もさだまらず候へ共都の空も何となくなつかしく候間しばしのほど成とも參候而可懸御目と存候。定而歳旦承度候。愚句京板に出候。尙門人の引付ごとに書とられ候間、いづれにて成共御覽可被成候。不明便り一字慈鎮和尙より取傳へ候

正月廿日

意専老人

(伊賀上野今中仁兵衛氏眞蹟)

はせを

今日作二郎どの御上京之由にて此方へ爲御知に付一筆申入候。彌御無事に被入候由珍重に候此方替儀無之候然ば内々御頼置候からかさもはや出来可申候と存候。御下し可給候近々に信州へ罷越候。途中にては入不申候得共先行にて不自由成所多こまり申候同じくは此作二郎どの便にほしく候さて一句

顔に似ぬほ句も出よ初さくら
此句去方之庭前にていたし候句なり。數々云ク有之候へ共、筆紙にはつくしがたくキ面く以上

廿三日

はせを

意水丈

(大河良二氏報書簡)

膳所の便致啓上候、其元相替無御座候哉承度存候拙者道中島田あたりまではつかへなども折々音づれ候得共次第に達者に成候て道々二三里日により五里ばかりも養生の爲歩行、足場能所は馬にも乗勞致候て無恙上着致候。雨天大かた小雨にあひ候てさのみあつき程の事は無御座候、十五日島田へ着候て一夜留候處其夜大雨風水出候て三日渡り留候て十九日立

申候。いまだ高水にて馬のしりがひやう／＼かくれぬほどの事に候得共、島田の宿は懸意の者共故馬川越隨分念入一手ぎは高水をこさするを馳走に致候島田より一通書狀頼置候相届候哉、二十五日の狀曾良猪兵衛より參候早々伊賀にて相達候。名古屋へかけより候て三宿二日逗留佐屋へ廻り候處に荷分例の連衆道にてぬけがけ待受候て又佐屋半日一宿逗留伊勢長島にとまり候而明る日久居まで參候て二十八日伊賀へ上着申候。同姓よろこび舊友ども日々かけ合候て今月十六日迄伊賀に逗留致候て大和加茂猪兵衛在所一宿十七日大津へ參十八日より膳所に罷在候伊賀同名方あつく蚊も多候へば夏中は膳所折々京へ出候て去來とかたり若は嵯峨去來屋敷に休足致事も可有御座候。いまだ草臥もしかとやます候故持病も指出不申候。次第／＼暑にむかひ候得ばいかゞと存候へ共前々より藥給候醫師なども不替居申候間此方の事御氣遣被成まじく候

先月十八日深川へ子珊御同道の由申來候、定而俳諧の御心指とは存候へどもはかく／＼敷事も成申まじ

く候十七日清圃會致候とて懷紙指越桃隣發句にて御座候成程何レ出来候間いかあたり先江戸いきと寫し

置申候名古屋いかせ候俳諧猶いまだ能所に尻をかけ居申候其元の風情存知もよらず候間深節に御はげませ可被成候。名古屋は深川集を手本にわかき者共修業の由申候。惣て俳諧評判の事など有之候得共他にあたり候事も有之候得ばいかゞ故書しるし不申候間ほのかに筆のはしを御さとり候て最其元御はげみ可被成候

一同名此度は殊之外力を得よろこび候て拙者も別て大悦仕候委細書付がたく候間不具候

一猪兵衛病氣桃隣無御油斷被仰付可被下候折々深川へ御なぐさみに御出あれかしと存候、され共壽貞病人の事に候へばしか／＼茶をまゐるほどの事も得致まじくと存候、これらが事共などは必御事しげき中萬御苦勞に被成被下まじく候猪兵衛桃隣指圖にてともかくも留守相守り火の用心能仕候様に被仰付可被下候此度所々狀敷有之候間重て具に可申進候以上

五月十一日

はせを

杉風様

荷分方にて

世を旅に代かく小田の行もどり

野水隱居所支度の折ふし

涼しさを飛驒の工がさしづかな

すゞしさの指圖にみゆる住居哉

句作二色の内越人相談候て住居の方をとり申候、

飛驒のたくみまさり可申候其外發句も不致候伊賀にて歌仙一卷言拾申候 (芭蕉翁眞蹟拾遺)

御文被下忝存候、又當年も時鳥ばかりの集の事被

仰下萬事御心添之程察入候、尙席日出名の儀被仰越

いかゞにても可然候間御取斗被下度大體に罷出候ま

ゝ其御舎にて頼入存候御咄にてはかく斗

木がくれて茶摘も聞や時鳥

何も其内拜顔に可申候右御報斗申入候早々以上

麥秋三日

はせを

山月庵御坊

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

一當月十六日加茂へ參平兵衛に一宿御袋様源兵衛殿
あねごなどへ逢申候御袋御無事に御入候されども
四年以前よりはよほどとしも御寄耳も遠く御成候
あねごとふたり貴様事のみくどくかへすく逢申
度よし被申難儀いたし候則平兵衛源兵衛殿書狀相
届候委く跡より可申進候

十六日好齋老とならちやにて御出會之由御なつか
しく候好齋老へも此度狀數多く候間延引重而可申
達候御心得被成可被下候深川の様子具に重而御申
越可被下候

一二郎兵衛道中達者にて拙者苦勞にもなり不申能つ
とめ申候以上

「壬」は「同」

五月二十一日

はせを
(一葉集)

猪兵衛様

されど興風此間存知出し候

この書簡、支考あてなり

二種被懸芳情旅店之一徳珍重不淺賞翫申候今日去
去歲武府脚半わすれ候

來きせるの掃除去來一世之初めたる故きせるの掃

脚半之事にて季を

除閏五月と季を定候折節に貴僧初音信亦閏五月の
定可申候也

季を定候間向後左様に御覺可被成候晩方御入來所
仰候

二十三日

支考 丈

はせを
(笈日記)

壽貞無仕合ものまさおふう同じく不仕合とかく難
申盡候好齋老へ別紙可申上候へ共急便に候間此書狀
一所に御覽被下候様に頼存候萬事御肝煎御精御出し
の段々先書にも申來扱々辱誠のふしぎの縁に候此御
人頼置候もケ様に可有端と被存候何事もく夢まぼ
ろしの世界一言理屈は無之候ともかくも能様に御は
からひ可被成候理兵衛もうろたへ可申候間とくと氣
をしづめさせ取亂し不申様に御しめし可被成候以上

六月八日

猪兵衛様

(一葉集)

桃 青

升かふて分別替る月見かな

尙々四五日中に又々委可申進候先大阪へ出
候を御しらせの爲早々申殘候

右之句申入候處々に參候へどもさして是と申ほど
の句も出來不申候またも此句かと存候故申まゐらせ
候これより直にはりま路に參候而來月末に歸り申候
其許連中へもよろしき様に御心得可給候旅宿故あら
く申入候かしく

十八日

桃 青

如行 丈

(一葉集)

追而申入候其許より出來參候はん袋あまりそこね
申候今一つあたらしくいたし度候大サ下地の通りに
たのみ入候則古袋飛脚へ登せ申候いづれにもよろし
く頼入候御内様御せはにて候へどもたのみ入候依而
一句

物ほしや袋のうちの月と花

いかゞ思し候哉當座間に合候間此句雜にて御座候く
はしき事追々可申入候以上

二十三日

杉風 丈

はせを
(一葉集)

重而可懸御目候

菊の香やならには古き佛達

きくのかやならはいく代の男ぶり

びいと啼尻聲悲しよるの鹿

いまだ句體難定候他見被成まじく候追付爰元逗留

の句共可懸御目候早々御狀御こし可被成候其元兩替丁かするが丁酒店にて稻寺や十兵衛と申もの爰元伊丹屋長兵衛店にて候間早々御左右承度候子珊秋の集被催候哉左候はゞ爰元の俳諧一卷下し可申候上方筋別座鋪炭依にて色めきわたり候兩集共手柄を見せ候少は桃隣にも師恩貴キすべをわきまへ候へと御申成候べく候桃隣俳諧俄に替上申候と専沙汰にて候急便早々

九月十日

杉風様

はせを判

(一葉集)

尚々は様およし御心得奉願候

彼は仕未以書狀不申上候愈御堅固被成御座候哉承度奉存候頃日意専より便御座候而其元相替も無御座旨は被相傳候私南部に一宿九日に大阪へ參着道中に又右衛門かけにてさのみ苦勞も不仕なぐさみがてらに參つき申候大阪へ參候而十日の曉よりふるひ付申毎曉七つ時分夜五つまでさむけ熱頭痛參候而もしはおこりに成可申かと藥給候へば廿日頃よりすきとや

み申候就者心むづかしく早々御案内も不申上漸かめや、はかたやへ今廿二日見舞折節京屋被下候間啓上仕いまだ逗留もしれ不申候へ共長逗留は無益之様に奉存候間二三日中にはせ名張越にて參宮可申と奉存候相替事無御座候得共爲御案内如此御座候又右衛門方へ別紙に不及候間乍慮外御心被遊可被下候以上

九月廿三日

松尾半左衛門様

桃 青□

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

一、兩吟感心、拙者逗留の内は此筋見えかね、無心元存候處、さてく驚入候。五十三次前句とも秀逸かといづれも感心申候。其外珍重あまた。物體かるみあらはれ大悦不少候。委細に御報申度候得ども、まだ氣分も不勝、何角取紛候間、伊勢より便次第に以細翰可申上候。右之氣分故發句もしかく得不仕候。

九日南都をたちける心を

菊に出て奈良と難波は宵月夜

秋夜

三南都の誤

「念便」の下
「葉集」文字
判明せず
今「眞迹集」に
よりて改む

十論爲辨抄

一、伊兵衛に
申候當夏は
壽貞義に付
様々骨折之
段面上に御
禮も不申無
是非仕合候
順好齋老榮
いづれも可
願尼禪可坊
暇乞申入候
病氣御坊は
可被成候生
候不慮なる
所にて相果
不可能に相
杉風子珊八
桑など瑞候
るづ御投か
しと可被存
元祿七年
一、支考此度
前働驚入候
親切被盡實
々草事細入
候草庵之出
山佛は形見
ニ可被遺候
はせを判

秋の夜を打崩したる咄かな

秋暮

この道を行人なしに秋の暮

廿三日

意專様

土芳様

はせを

(批把岡臨筆)

一、杉風へ申入候永々御厚志死後迄も難忘存候不慮なる所にて相果御暇乞も不申無是非事に候彌風雅御勉老後御樂に可被成候

一、濁子へ申入候永々御厚情生前死後難忘存候御内室様貴様ニ不相替御念頃之段忝存候不慮なる所にて相果御暇乞も不申無是非事に候彌風雅御すゝみ老後はやく御樂に可被成候

一、嵐雪を始として門人方不殘御暇乞申候俳諧者老後のたのしみと申事彌御忘有間敷候其角は此方に參居申され候
元祿七年十月 日
はせを

(十論爲辨抄)

書簡集

四五九

一、伊兵衛に申候當年は壽貞事に付色く御骨折、

面談に御禮と存候處無是非事に候残り候二人のものども十方をうしなひうろたへ可申候好齋老など御相談被成可然了簡可有候
一、好齋老萬御懇切生前死後難忘候
一、榮順尼禪可坊情ふかき御人なり面上に御禮不申殘念の事に存候

一、貴様病起御養生隨分御勉可有候
一、桃隣へ申候再會不叶可被力落候彌杉風子珊八草子よろづ御投かけ現も角も一日暮しと可存候
元祿七年十月
支考此度前働驚深切實を被盡候此段頼存候庵の佛は則出家の事に候間遺し候

はせを

(眞迹集)

遺物覺

一、三日日記

一、發句書本

一、埋木

伊賀に有

同所

半殘方に有

四五九

一新式書入

には「杉風へ申入候」と遺物の書と「遺物」を並べ、これ等去來の代筆に筆名のみ記したり

是は杉風へ可被遺候落字等有之本寫にて可被考候支考も可被寫候
一文章反故等

松尾半左衛門様
新藏は殊に骨被折忝候
年代不明の部

(一葉集)

(二)高山氏は上野國の人鑿埒と

右は杉風方に有之候文章之草稿は支考可被爲點檢候

五月十五日
高山傳右衛門様

松尾桃青
書判

一羽州岸本氏之發句炭俵集に紛入候公羽と翁との違にて可有之候杉風より御斷頼入候

一猿蓑の内座頭句引直し

一古今の序傳百人一首秘聞抄

是は支考へ可被遺候

元祿七年十月 日

はせを判
(十論爲辨抄)

御先に立候段殘念に可被思召候如何様とも又右衛門便に被成御年被寄御心靜に御臨終可被成候こゝに至申上事無御座候市兵衛次右衛門殿意専老をはじめ不殘御心得奉頼候中にも十左衛門殿半左殿右之通に候は、様およし力落し可申候以上

十月十日

桃 青

貴墨忝致拜見先以御無爲被成御座候珍重奉存候。私無異儀罷在候。仍而御卷致拜吟候。尤感心不少候共古風之いきやう多く御座候而一句の風流おくれ候様に覺申候段近頃御尤。先は久々爰元俳諧をも御聞不申哉、其上京大阪江戸共に俳諧殊之外古く成候而皆同じ事のみに成候。折ふし所々思入替候を、宗匠と申す者もいまだ三四年已前の俳諧になづみ、大かたは古めきたるやうに御座候。一日學者猶俳諧にまよひ、爰元にても多くは風情あしき作者共みえ申候然る處に遠方御へだてにて、此段御のみこみ無御座御尤至極に奉存候。玉句之内三四句も加筆仕候。句作のいきやうあらまし如此に御座候
一一句前句に全體はまる事古風中興共可申哉

一俗語の遣ひやう風流なくて、又古風にまぎれ候事

一一句細工に仕立候事不用之事

一古人の名を取出て何々の白雲など、云捨たる事第一

一古風にて候事

一文字あまり三四字五七字餘りにても句のひゞき能候へば一字にても口にたまり候を御吟味可有候事

子供等も自然の哀催すに

つばなと暮て覆盆子対原

賤女とかゝる蓬生の戀

よこし摘あかさか園に垣間みて

今や都は腹を喰ふらむ

夕端月蕪は葉ごしに成にけり

といはれし所杉郭公

心野を心にわける幾ちまた

山里いやよのがるゝとても

鯛賣聲に酒の詩を賦す

葛西の院の住捨しあと

すむきの戸落壺の間は霜をのみ

○

本式俳諧之次第

一初折の面十句

但し面十句之内名所一つ必出すなり

一名残のうら六句なり

一花は先四本五六七八も有之面に花をひとつづゝしてもくるしからず

一月は五句去にいくらもあるべし

一雪月花郭公寢覺是五色の内いづれも二句去なり

一猿と繪原山類に用ふ。往古の式には初折の面十句之内何れも賦物をとる。一順のはじめに賦物を書つくすなり。其後はむづかしき故に發句斗りにふしものをとれるなり。

一降ものとふりものとの間二句

一五句のもの三句々々の物は二句去

一七句去のものは十句去なり

右あらまし如此

一みゆ ウクスツヌフムルシ

むかふの山に雲のたつみゆ

あれなる海に舟をこぐみゆ

花の垣根に胡蝶とぶみゆ

一下の句つゝ留り

大やうものを二つ言ならべてとまるべし

譬ば

右も左も袖はぬれつゝ

また

二艘のふねを漕流しつゝ

又ものゝかぎりなき心にもあり

譬ば

たえず深谷の水流れつゝ

一上の句つゝ留

是難儀大切なる手爾波なりとて先達も多くはせざるなり

譬ば

散花は筏に波にながしつゝ

此上の句の留も下の句のつゝどまりとしたての心相似たり。物を二つにいふと、又かぎりなき思入などにてとまるべし

一下の句て留

前句の上の句の五文字に、さればこそ心こそなどある時下の句にてと留るなり。また前句にもか

まはずしてとどめあり

譬ば

ラ、ル、ル、ル

此五文字での字の上におくなり

花のほひは袖にとまりて

ものおもふとは色にしられて

一下の句に留

譬ば

前句上の句五文字にかさなりてつらなりてなど有る時にと留るなり。また前句にもかゝはらずにと留るあり

留るあり

譬ば

涙は袖に露はたもとに

花は園生に露はまかきに

右二つ手本なり。是山を見る玉を見るといふ手爾波なり。一大事の秘傳あなかしこく。

右山玉の字を坐の句のかしらにおくなり。

一大まはし發句

一大まはし發句

譬ば

稻菟敷島の道草の種

或は三段切、かさね切、らん留、をまはし、五文字切、但し坐の五文字なり

一臨てには留

腰に韻字をすえてあるなり

一第三韻字留

前句の五文字にかゝらず長高くして一句儘にとまる。同第三のてにて留申内、あるひはらんらんは

常の事のやうに候へども口傳あり。又もなし留に

留前の句のあひしらひによりあるべし口傳あり

一二字のらん留

にほひのみ花は霞に咲ぬらん

雪いと高しふみ迷ふらん

右口傳

一過現未三つし文字

現在のし

山遠し

水高し

過去

過し 見えし 教へし

去りぬべし 來たるべし

一こそかゝへ手爾波

一下の句こそどめ

一下の句上の句の字の留

野も山も、山も麓も、雪もあられも、等とも文字を二つ對していへば留るなり

一花に櫻付やう

是別て秘する事に侍る。前句の花、花がつを、花の袖などいふたらば、櫻を付けて苦しからず。

前の花別のものなるゆゑに又たとへ本花に仕立てる句なりとも、名字の付たる櫻を付候はゞくるし

からず。乍去此分にて不功者の人ならば付はだへ相違あらんかと覺束なし。功者ならではいかゞ

一上の句やと下にてと留る事とかく口あひのや

ならばとまるべし。譬ばその原や近江路やなど、

名所にかゝるや文字にてと留る事は大かたの人

存じたる手爾波なり。又はの字に通ふやあり是に

四六三

書簡集

四六三

てと留るなり。或はや文字ならずともか文字などにてうたがひの字にてもおさへ字にならひあり留る事なり

右萬々先聖の秘しおかれたまへる事どもなり。とくと心にをさめ手に握ることくにも、大事の手爾遠波などをばせぬが連俳のいのちなるべし

(眞澄の鏡)

犬夢に残る鬢の覺束な

月に狸の良をかけおく

句作のあらび又感心中候

霧くろく包める瀧の落る音

守なき堂に紅葉まゐらせ

かゝるけしき此春多く見申候あはれ催し候

(枇杷園隨筆)

一御俳諧よくぞやおもひ切て長々しき物を點被仰越

候去ながら餘り感心見るもおもしろく判詞不覺手

の舞足の蹈ことをしらす候かほど上達存もよらず

凡天下の俳諧にて御度候間隨分御敬み候て御はげ

桐葉子雅文

(一葉集)

東藤子雅文

芭蕉庵桃青

三月十四日

三月十四日

寔よく天の遊ぶものにして貴賤貧福は人の苦しぶなり

一逍遙遊先書は反故に可被成候書直し進候我もこれ

に遊ぶものに候へば深く苦しみも候はず候故おも

しろき事なく候御約束の茶はいかに候哉まち申

候以上

三月廿日

はせを

惟然丈

(一葉集)

當地ある人附句あり此句江戸中聞人無御座候予に
聽評望み來候へども予も此付味難辨依之御内意たの
み進候貴丈御開定の旨趣ひそかに御しらせ可被下候
東武にひろめて愚の手柄に仕度候

其附句

蒜のまがきに鶯をながめて

といへる前句に

鶯のゐる花の賤屋とよみにけり

二月上弦

はせを

木因様

(一葉集)

逍遙遊

道に逍遙の二字あることは心に天遊有て世をおも
しろがらんといふことなり天はこれをえて月清く地
は是をえて花咲り鶯と魚とはひらめきて遊ぶもの也
野馬は風にうかれて遊ぶものを草くふ牛の飽てしづ
かなる蛇は其の尾に遊んとすればうしのぬしとはま
らせてうたん事を思ふはたとうたれて悲しからんは
遊ぶ時の心にかへよ其ぬしの牛にはちかれて二なき
鼻のかけたるためしもあるんにすべて遊ぶことは先
にして苦しむことは後なり誰か遊んでくるしまざら
ん苦しまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや世に實
あり虚あり實に遊ぶ人は虚にくるしぶ誰か實なく虚
にすゝむ人はある時のあるにぞいと苦しむべき虚
に實あり實に虚あらば虚實は虚にして自在なるべし
むかし莊周が夢に胡蝶と遊びしも観音の花によめ入
せられしも素より虚をもて虚を説ねばまして實をも
て實をとかずかゝる聖人の虚をさして今の人もいふ
て遊ばざらんや此故に春に成ては川狩に遊ぶ茸狩の時
は浪人をあそびしめ鷹狩の時には大名を遊ばしむ

其返書

華牒拜見或人の付句貴丈御開定無之依之愚評之儀被仰越候予猶考に落不申残念ながら及返進候隨而下官去頃在京之節古筆一枚相求此切京中定る人無御座候依之貴丈御内意頼進候何之御字之御撰集筆者等貴丈御見定之旨趣ひそかに御しらせ可被下候花洛にひろめて愚の手柄に仕度候

其古筆 菜園集卷七

春詠諸歌

蒜のまがきに菖のゐるをながめ侍りて
菖のゐる花の賤屋の朝もよひ
木をわるおのゝおとぞ聞ふる
二月下弦
はせを様

稱美の詞

杭瀬川の翁こそ予がおもふ處にたがはず菖の句の評感會寄に候江戸衆聞人なきと申は聊いつはりかの

翁が心をはからん爲に候爰元にも珍しとのみ云人三分同物に同物付たる古今類なきと云捨たる人二分道でないがしろにしていひたきこといはるゝなど嘲る野輩もたまゝ有之予が志を了察の士も一兩人は有之候を千里を隔て自慢云ちらしたるを却て愚首の至に御座候へども日來彼翁此道知たる人と定置候へば聊料簡ひき見ん爲書付遣し候愚案一毫の遠無御座候寔不淺候

自讀の詞

古往遠人花に櫻を付るに同意去を本意といへりまして菖に菖を付て一物別意を附わけ當時未來の作者に此句を似せさせず古往今來未來一句の格いづれの時か秋風來て芭蕉の露もろく破れんまでの一句一生これのみに存ばかりに候と書うち鼻高くおごめき肩のあたり羽だゝきするやうにおぼえ候 (一葉集)

酒堂より書狀こし此度返翰ともに遣申候いまだ御見舞にも不參候由沙汰のかぎりと申遣候

一正秀が子規の句驚入申候夏中物むつかしさに何方

【一葉集】に
【贈社國】以下
なし

【一葉集】に
【超州】に

この手紙に、
「又越む小
松魚」と云ふ
句を置きたれ
ど、一もとの
水一け芭蕉發
句集にて所々
に手紙を挿み
たる書にてみ
たるにこの手
紙の次に句と
あるを見たり
誤りしなりと
同書の體を見
るに然りとす
松魚の句の初
きたる手紙を
置きたるまで

へも文通不仕候處此をのこ何事をさしはさみ候哉
書狀もくれ不申候此方いたはりて書狀不越候哉其
器量に應じておもひはかり申候
一竹介殿御成人おそめ女御無事承度候
霜月一日
はせを

曲水様

(一葉集)

一もち米 一升
一黑豆 一升
一あられ見合

右今夕會之夜食に成申候間、御いらせ、傳吉にも
たせ御こし可被下候。茶は一森三井寺より澤山もら
ひ申候。貴様にも早々御出まぢ入候

十八日

はせを

喜八様

贈社國

笠の緒に柳縮る旅出かな

臨御付可被成候

(もとの水)

昨日は渡紙澤山御惠辱存候然處昨夜惟然一宿例之む

山頭月挂雲門餅
屋後松煎超洲茶
佛法は障子のひきてみねの松
火打ぶくろに鶯のこゑ

此心をもて俳諧の變化をしるべしと許六が去る人に
示候由。また惟然が、たば粉存ぬ傾城と菓子くはぬ
俳諧師はすくなきものとはし書して
ちり塚や鶯あさる聲のひま 房
あまりをかしく書とめ懸御目申候
十六日
浪化様
桃 青
(一葉集)

初松魚御振舞被下候由斯る隠居の似合しからず候
得どもお元どの御こゝろさし、追付參上

太右衛門殿

桃 青
(同)

だ書^{あまつづ}刺筆の先棒^{さきぼう}になし困入申候今四五枚申請度候
此人に御こし可被下候

七日

はせを

杉風丈

(同)

二白俳諧御執心之由先は珍重、物しりにならむよ
りは心の俳諧肝要に御座候。句者は澤山御座候得共、
心法を守る人はまれ／＼なるものにて候。

一季よせの御不審御尤に候。愚老は此事にうとく候
儘考へ跡より可申入候。増山井御用可然候

十七日

はせを

晩山様

(同)

新麥^三一斗筭三本油のやうな酒五升といふは富貴の
沙汰なり。蕎麥粉一重小遺錢二百文忝ぞんじ候

水油なくて寝る夜や窓の月 (もとの水)

口上

此間御咄申置候通勸學院古瓦硯之銘足下其角愚老

枕屏風むだ書いたし則御使へ相渡申候。福半せん
だく糊少々と御申付可被下候

杉風様

*はせを

御ふくろ様

口上に書おとしけり土大根

(もとの水)

只今田舎より僧達二三人參候俄に出し可申貯無之
候さぶく候故にうめんいたし可申候そうめんは澤山
有之候酒二升御こし頼入候さかなはつぶ納豆茶碗に
入貴様御出候て世話頼入申候其次手に引合せ可申は
や／＼御出まち入候以上

二日

はせを

かふじや茂作様

(一葉集)

候以上

六月三日

桃

青

猪兵衛様

(眞珠集)

別紙

一桃隣いかゞ相被勤候哉暑氣の節短夜と云會も心の
まゝには成申まじく候杉風子珊心にたがはざる様
に實を御つとめ候へと御申可被成候京都俳諧師五
句付之事に付閉門俳諧さたひつしりと姪に鹽かけ
たる様に候様子段々拙者口から申上せしも氣のと
く故不具候ケ様の慮唯實を不動故と合點を致むざ
としたる出合會等心持可有旨桃隣へ御物語可被成
候

一神矢の根蟻糞は少分ながら御用に立満足、
右は感心關の足輕能頃合と奇作に候過れば手帳の
部へ落候世になるものゝ失也惣而地句等皆々手帳
の外は三歳兒童の作意是のみ打寄候而は御噂申計
に御座候以上

二月二十五日

はせを

許六雅丈

(一葉集)

「同」は「堂」か

一市之進殿御無事に候哉可然御意得頼存候
一此方京大阪貧乏弟子共かけあつまり日々宿を喰つ
ぶし大笑ひ致くらし申候
一理兵衛細工無之時分せて煩不申様に御氣を可被
付候右之通壽貞にも御申さかせ可被下候おふう夏
かけて無事に候哉様子具に御申越可被下候
一宗波老庄兵衛殿へも御心得可被成候定て好齋老た
えず御見舞可被下と存事に候追て以書狀可得御意

御速翰殊麥一器割口老御手作誠御厚志賞瓶可仕候
春に成候而御禮可申進候昨日風故參様遅引得御意候
間もすくなく御殘多乍去御馳走被下辱奉存候酒同他
出申候間歸候はゞ御手紙相わたし可申候義大夫殿御
發句判料被遺候に付御手紙被下候桃隣へ相渡し可申
候昨日の御報にて御座候間再報に不及候間可然奉頼

候春可被召寄之由忝奉存候通御傳大舟丈御手前夜前
の二器爲持被下候是も前宵御禮申上候貴報右同前左
柳丈御傳言御心得可被下候折節風故持病心に御座候
故早々及貴報候以上

(芭蕉翁眞蹟
拾遺)に「委
と」

二十三日

はせを

此筋様
千川様

(芭蕉翁眞蹟拾遺)

御手紙着致拜見候先々無御別儀御入之由よろこび
申候此方何事なくくらし居申候、さては内々御たの
み置候塵土佐御こし被下候受取申候御世話の儀忝存
候先様にも婚禮もちかく成候故せがまれやかましく
きのどくに候處早々遣し可申候一枚見申候が又名物
の紙故見事に存候はり立出来候はゞ猶見事に可有之
もはや安堵可被致我も紙に付風興一匂

塵土佐の腰ばりへけて秋の暮

右句口すさび申候其許には此句にワキ御付可被遣
候是に題して歌仙一卷につゞり申たく折ふし取紛筆
留候以上

二十一日

和休丈

桃 青
(芭蕉翁眞蹟拾遺)

曲水子の書狀御もたせ被下辱候。是は去來が指圖
と相聞え申候間、只そのまゝにて可置候。尤考が申
す處一理御座候條、愚老も同心仕候、委は後刻

(もとの水)

追而申上候り。内々御約束のほ句さて々々毎事
忘申候。今日はゆびをくゞり居候處、先書にはつた
り忘申候。追書に成候。最上にては

行くすゑは誰肌ふれむ紅のはな

右之句にて可有之候。外には是はと申程の句も無
之候。依而不申入候。おもひ出候はゞあとより急便
に可申述候。加水丈よろしく句も可給候。何角役に
たゝぬ事に隙無之さて申兼候へ共、早つきの姿一袋
急に御のぼし可給候。四五日中に客僧一兩輩來いた
し候へば間に合せたく、申上候以上

九日

はせを

吟水丈

(池田稻東猛氏藏眞蹟)

御芳翰辱致拜見候。如來命久々にて得芳慮珍重奉

存候。羽二重大根往々珍敷賞瓶可仕候。毎日御懇情
不淺義存候。いまだ草臥申候而遠方不罷出候間御非
番の節御入來仰所にて俳談可仕候。昨日も半殘子被
見舞さまゞ風情語合申たる事に御座候以上

壬五月五日

(伊賀上野田中善助氏藏眞蹟)

炭取被應芳情并挽炭雪の名殘三枝風情見物ありて
一入辱感入仕候。藁の爐邊無念たるべく候。前宵緩
々與御語被成大悦不淺奉存候。風麥子へ被遣被下候
よし、是又忝、案のごとく客僧今日被歸茅屋に滯留
に候。猶客僧送り立候而可得御意候。ほこりの中も
珍敷思召候はゞ隨分御出御かたり可被成候以上

十九日

(同)

(三)この書簡裏に
【芭蕉】の二字
見ゆ
紙に記した
る紙には手本
見習ひたる
丹の淡墨繪あ
り、それを横
きにして裏に書
きてあり

今朝自且那樣御看頂戴仕難有奉存候。私宅にては
女兄弟共打寄頂戴仕又權右衛門方にて念頃之もの共
寄合戴申候とて、今日は權右衛門方にて寄合罷有候。
後程御禮に參上可仕候以上

(同)

われらが事までは物着などとんちやくいたすはず

にても無御座候へ共、一はあねの御恩難有、二は大
慈大悲の御心わすれがたく、色々心を碎候へども身
不相應の事難調候。其身四十年餘寝てくらしたる段、
各々様能御存じにて御座候へば、兎も角も片付様々
相談ならでは調不申、さてゞ慮外計申上候。御免
可被成候

八日

桃 青
(同)

半左衛門様

八月十五夜

酒

一芋煮入
のつべへせうが
一煮物 ふんにやく
こほり 木くらげ
吸物 つかみたらふ
しめし めうが

里いも
中ちよく
もみふりくるみ
かうの物

看

にんじん
焼初茸

しぼり汁

す
しやうゆ

ナリ山いも

くわし かき

吸物 松茸

冷めし

とりさかな

この献立に次の如き書付添へてあり。是ハ赤坂庵ノワ
タマシ折節名月カケテ門人ツマネキモテナサレシ亡師
自筆ノ馳走ノ破古也。この書付は土芳筆と云傳ふ。
(伊賀上野菅野八郎兵衛氏藏)

はせを

おとめ殿

参る

じていどの無事に御そだて方さるべく候よしにも
はるか申上候
此ほどは加生老去御みまひ御たいぎながらゆる
くと名残ををしみよろこびかぎりなくぞんじり
ふゆのうち山ふかき方へかくれまゐらせ候春にな
り候てまたく御めにかゝり申べく候ながくの御
なさけどもわすれがたきのみ申しつくしがたく候き
るものどもよろしく御こしらへさむくも御さあるま
じく候御きづかひ被成まじく御ぶじに春を御まちな
さるべく候
よひくはかまたぎるらんね所のみつの枕もこ
ひしかりけり
(落葉考)

一僧鳥之文御見せ感吟いたし候。乍去文章くだく
しき所御座候て、しまりかね候様に相見え候間、
先々他見被成まじく候。ことのほかよろしき趣向
にて御座候間、拙者に可被掛御意候。御文章に増
補いたし拙者文に可致候。もし又是非と思召候は
ゞ、拙者文御覽被成候間、其上にて又御改可被成

候。文の落付所、何を底意に書たると申事無御さ
候ては、おどろくどき、早物語のたぐひに御さ
候。古人の文章に御心可被付候。此文にては鳥の
傳記に成申候間、御工夫御尤に存候。以上
九月十三日
はせを

加生様

(蕉門昔話)

庄屋殿へ出候而承候。今席は貴様方にふぐ汁之會
有之よし、めづらしき風雅にて御座候。我等見物に
可参候。依之

鯉汁やあはうになりとならばなれ

をかしやくとかく出はうだい火中

十一日

はせを

太郞兵衛殿

(華鳥文庫)

遺
語
集

目次

頭翁口訣……………	(四八三)	細工……………	(四九一)	むづかしき附句……………	(四九八)
旅の榮華……………	(四八四)	鉢たゞきの句……………	(四九二)	上萬の旅……………	(四九八)
稻妻の句……………	(四八四)	其角を評す……………	(四九二)	夜すがら叱り給ふ……………	(四九八)
はくらの妙薬……………	(四八四)	一兩年早き句……………	(四九三)	輕み……………	(四九八)
うき世の果は……………	(四八五)	病雁と小えびとの論……………	(四九三)	たけ高し……………	(四九九)
掟……………	(四八五)	自稱の句とせよ……………	(四九三)	算用合せたる句……………	(四九九)
行脚之掟……………	(四八六)	夜伽の句……………	(四九三)	汝と越人のみ……………	(四九九)
蓬萊の句……………	(四八七)	下京や……………	(四九三)	惟然を尋く……………	(四九九)
唐崎の句……………	(四八七)	手柄なき句……………	(四九三)	切字……………	(五〇〇)
行春の句……………	(四八八)	云盡すものにあらず……………	(四九四)	櫻……………	(五〇一)
出板に及ぶとも改むべし……………	(四八八)	云ひおほせて何かある……………	(四九四)	戀句……………	(五〇一)
本性をあらはす……………	(四八八)	句至らず……………	(四九四)	宵闇……………	(五〇一)
木枯の句……………	(四八八)	筆の罪のみにあらず……………	(四九五)	盆は釋教か……………	(五〇二)
あだなる處……………	(四八八)	これこそ發句なれ……………	(四九五)	西鶴が淺ましく下れる姿あり……………	(五〇二)
又……………	(四八九)	初心の覺悟……………	(四九五)	贊名所の句……………	(五〇二)
清瀧の句……………	(四八九)	是にてもなし……………	(四九五)	俳名……………	(五〇二)
如來遷座の頌……………	(四九〇)	ふれるふれぬ……………	(四九六)	外題の寸法……………	(五〇三)
除かれたる句……………	(四九〇)	沖の時雨……………	(四九六)	竹植る日……………	(五〇三)
落著……………	(四九〇)	云課せず……………	(四九六)	集の模様……………	(五〇三)
信徳が人の世や……………	(四九〇)	三十棒……………	(四九六)	俳書の名……………	(五〇三)
轉々……………	(四九一)	誤て歳旦の腦……………	(四九七)	宗因に感謝……………	(五〇三)
信徳が知る處にあらず……………	(四九一)	手帳……………	(四九七)	氣先……………	(五〇四)
		こえを水に……………	(四九七)	人を見て法を説く……………	(五〇四)
		斯る前句を……………	(四九七)	黄金をうちのべたる……………	(五〇四)

取合せもの	(五〇四)	七ヶ條	(五二)	更科の吟	(五八)
勢	(五〇四)	連俳の別	(五二)	伊勢の蟹	(五八)
委といふもの	(五〇四)	御膳がよいと	(五三)	一筋にいふこと	(五九)
移暮にほひ位	(五〇五)	集作る事	(五七)	平話の新しみ	(五九)
佛	(五〇六)	一家を立てよ	(五九)	讀	(五九)
氣色	(五〇六)	萬葉觀	(五九)	長雪隱	(五九)
附物	(五〇六)	金城の三俳人	(五九)	牛房くさき	(五九)
一卷一體ならざれ	(五〇七)	かやつり草	(五九)	果報いみじき工藤	(五九)
さび	(五〇七)	形身乞はれて	(五〇)	作者名人	(五九)
位ある句	(五〇七)	句空	(五〇)	よき挨拶	(五九)
しをり、細み	(五〇七)	梅員	(五〇)	發句と平句	(五九)
豫言	(五〇七)	沙さしかる	(五二)	歳旦	(五九)
長歌短歌	(五〇八)	大根引	(五二)	又	(五九)
定家家隆を信ずるが故	(五〇八)	點取	(五二)	自慢	(五九)
貫之の好み	(五〇八)	雙書	(五三)	鯉舟と下京と	(五九)
西行と賞朝と	(五〇九)	丈草を評す	(五三)	首さし入れざれ	(五九)
流布の古今集	(五〇九)	句案の法	(五三)	俳諧も面倒	(五九)
六義	(五〇九)	許六の談	(五三)	來者を恐る	(五九)
亂きはまりて治に入る	(五〇九)	郭公と覺と	(五三)	誠	(五九)
連歌と俳諧	(五〇九)	一夏一句	(五三)	俳諧の手法	(五九)
袴にも心を付けよ	(五〇九)	未來記	(五三)	連歌と俳諧と	(五九)
集の爲に卷をせず	(五〇九)	二十五條	(五三)	俳諧に至らずといふ所なし	(五九)
俳諧文	(五一)	路通	(五七)	式	(五九)
芭蕉は沙塵	(五一)	其角の夢	(五八)	戀のこと	(五九)

旅の句	(五五)	前書の詞	(五四六)	『七夕や』の句	(五〇)
旅行の必要	(五五)	一聯二句	(五四六)	『丈六』の句	(五〇)
本歌取り	(五五)	字あまりの句	(五四七)	『あけぼのや』の句	(五〇)
等類	(五五)	初雪の興	(五四七)	『年年や』の句	(五〇)
初心のまどひとならむ	(五五)	風雅も師走	(五四七)	この註	(五〇)
文章論	(五五)	大國の句	(五四七)	『秋風』の句	(五〇)
懐紙	(五五)	ふといひし句	(五四七)	打捨てし句	(五〇)
表のうち	(五五)	『二日にも』の句	(五四八)	『雲に鳥』	(五〇)
嫁ふ事	(五五)	おもひやりたる句	(五四八)	湖水の名月	(五〇)
人名	(五五)	『御子良子』の句	(五四八)	蝶の翅	(五〇)
戀なくでは詮なし	(五五)	あやしき處	(五四八)	『月のなり』	(五〇)
先へ行く心	(五五)	『旅人と』の句	(五四八)	『初』の字の位	(五〇)
發句より揚句まで	(五五)	いきこみ	(五四九)	『瓜の泥』	(五〇)
眞、草、行	(五五)	『變調』の句	(五四九)	『此道』の句	(五〇)
残れる俳諧	(五五)	『新年ふるさ』の句	(五四九)	歩みはじめたる	(五〇)
賞めし狂歌	(五五)	『風色』の句	(五四九)	名所の句	(五〇)
不易流行	(五五)	よく目に立つ	(五四九)	味ふべし	(五〇)
風雅の道	(五五)	『六月や』の句	(五五〇)	思ひかへし	(五〇)
功者に病あり	(五五)	『川風や』の句	(五五〇)	聞のこと	(五〇)
嚴しき示し	(五五)	『雲雀啼く』の句	(五五〇)	理窟	(五〇)
新しみ	(五五)	心の味	(五五〇)	『柘を』	(五〇)
動くもの	(五五)	『蛇くふと』の句	(五五〇)	子が手筋	(五〇)
本據ある句	(五五)	『木のもと』の句	(五五〇)	見様體	(五〇)
物語の姿	(五五)	『誰塔ぞ』の句	(五五〇)	付の事	(五〇)

體……………	(五五)	これ一體……………	(五五九)
付といふ筋……………	(五五五)	琴三味線の句……………	(五五九)
傑句「門しめて」……………	(五五五)	思ふところにあらず……………	(五六〇)
この第三……………	(五六六)	人の爲ならば……………	(五六〇)
むづかしき脇……………	(五六六)	初心の道をそこなふ所……………	(五六〇)
行て歸る心の味……………	(五六六)	一座の興に入らず……………	(五六〇)
位を見知れ……………	(五六六)	二三日跡へ……………	(五六〇)
孕句……………	(五六七)	句變……………	(五六二)
年の何……………	(五六七)	聞えぬ句……………	(五六二)
古みをとらんとせし……………	(五六七)	私意……………	(五六二)
てにけ留の發句……………	(五六七)	誠の俳諧……………	(五六二)
骨折るべき處……………	(五六七)	人にも聞かせ見む……………	(五六二)
持て來たる詞……………	(五六七)	慣むべき事……………	(五六二)
素秋……………	(五六八)	俳諧きらふ人……………	(五六二)
花に芳野……………	(五六八)	神樂堂……………	(五六二)
通るといふ事……………	(五六八)	季と戀と……………	(五六二)
詞の作……………	(五六八)	絶景にむかふ時……………	(五六二)
はなるゝ事……………	(五六八)	俗語を正す……………	(五六二)
老吟の骨……………	(五六八)	當座の題……………	(五六二)
好く好かざるによりて……………	(五六八)	書きやう……………	(五六二)
『笈の小文』といふ號……………	(五六九)	能書……………	(五六三)
牡丹に芍薬……………	(五六九)	俳諧の障……………	(五六三)
似たる句……………	(五六九)	駕籠を下る……………	(五六三)
試験……………	(五六九)	目に見えて……………	(五六三)
		死後に見よ……………	(五六三)
		鶴繩……………	(五六四)
		句作はなくてもあるべし……………	(五六四)
		是非の地……………	(五六四)
		聖徳太子の冠……………	(五六四)
		詩は隠者の詩……………	(五六四)
		秘……………	(五六四)
		伊勢が歌……………	(五六五)
		義理をつめたるは卑し……………	(五六五)
		『人は云ふなり』……………	(五六五)
		呼子鳥……………	(五六五)
		峰入……………	(五六五)
		親と鳥……………	(五六六)
		つぼすみれ……………	(五六六)
		『大方の驚』……………	(五六六)
		是非に交りながら……………	(五六六)
		唇さぶし……………	(五六六)
		一句の作あらずとも……………	(五六七)
		風雅の魂……………	(五六七)
		山更岡……………	(五六七)
		まことの妹背……………	(五六七)
		直江津の芭蕉……………	(五六八)
		恨をわすれて……………	(五六九)
		一物の句……………	(五六九)

子供を観察せよ……………	(五八九)	淺きに戻るべし……………	(五六六)
きのふの我……………	(五九〇)	はやく上手に……………	(五六六)
翁の號牌あり……………	(五九〇)	一風に止まるまじ……………	(五六六)
傳授……………	(五九〇)	食事の煩ひ……………	(五七七)
撰者の句……………	(五九一)	捨人の身……………	(五七八)
大廻し……………	(五九一)	禮節を忘れず……………	(五七八)
四句目、六句目……………	(五九一)	萬物に應ず……………	(五七九)
外の藝の達人……………	(五九一)	生けるかひあれ……………	(五七九)
末のおくるゝ事……………	(五九一)	不吟味といへ……………	(五七九)
平話の道具……………	(五九二)	治定の句……………	(五八〇)
『古池や』の句……………	(五九二)	心の作……………	(五八〇)
茶をのむ人……………	(五九三)	五六分……………	(五八〇)
砂川の水……………	(五九三)	數寄屋……………	(五八〇)
其角の『訪はれ親』……………	(五九三)	正風體……………	(五八〇)
正秀が性……………	(五九三)	今はあやし……………	(五八一)
『月くらき』……………	(五九四)	さびしをりを説くな……………	(五八一)
此句の入處……………	(五九四)	百尺竿頭中がへり……………	(五八一)
馬上に蝶……………	(五九四)	角の行末……………	(五八一)
『蜜柑の色の』……………	(五九四)	此道の仙……………	(五八二)
『菱の花』……………	(五九五)	季節……………	(五八三)
律儀に習へ……………	(五九五)	理を云はず……………	(五八三)
舌頭に千轉……………	(五九五)	古人なし……………	(五八三)
俳諧を忘れよ……………	(五九五)	品高く……………	(五八四)
さし合上手より俳諧上手……………	(五七六)	遺言とおもへ……………	(五八四)
		葉と幹……………	(五八四)
		京の土地に合はず……………	(五八四)
		俳諧書きむ……………	(五八五)
		獅子のさゝら……………	(五八五)
		老鶯病歎……………	(五八六)
		梅椿……………	(五八六)
		竹縁……………	(五八六)
		高き人の臥き處を……………	(五八六)
		黒木賣を妻に……………	(五八七)
		おや……………	(五八七)
		最後の病床……………	(五八七)
		遺物の品々……………	(五八九)

は乙山のすまき
浪の門人眠郎
の編者
浪の意と
正風を今愛し
ふらはすとい
ふ断り書を附
して「雪のす
まき」に編入
せるものなり
「葉集」所載
のものとも小
あれども今一
ザ一之を註記せ

祖翁口訣 (雪の薄)

- 一格に入て格を出ざる時はせばく、格に入ざる時は邪路にはしる、格に入、格を出て、初て自在を得べし。
- 一詩歌文章を味て、心を向上の一路に遊び、作を四海にめぐらすべし。
- 一千歳不易。一時流行。
- 一他門の句は彩色のごとし。我門の句は墨繪のごとくにすべし。折にふれては彩色なきにしもあらず心他門にかわりて、さびしをりを第一とす。
- 一名人は地をよく調しうへに、折にふれては危き處に妙有。上手はつよき所におもしろみあり。
- 一 等類作例第一に吟味すべし。
- 一古書撰集に眼をさらすべし。
- 一我門の風流を學輩は先鶴の歩行の百韻・冬の日・春の日・瓢集・炭依・猿蓑・あら野を熟覽すべし。發句は時代々々をわかすべし。
- 一初心のうちは句數を好べし。それより委情をわか

「一葉集」に
「右の條々祖
翁口訣と云」とあり

ち、大山を越て向の麓へ下りたる所を案すべし。六尺を越んとほつするものは、まさに七尺を望べし。されど心高き時は邪路に入やすく、心ひくき時は古人の胸中を知る事あたはず。

一俳諧は中より以下のものとあやまれるは、俗談平話とのみ覺へたるゆへなり。俗談平話をたゞさんがためなり。つたなき事ばかりいふが俳諧と覺得るは淺ましき也。俳諧は萬葉の意なり。されば上天子より下土民までも味ふ道なり。唐明すべて中華の豪傑にも恥る事なし。唯心のいやしきをはじとす。

一手爾於葉專要たり。我國は手爾於葉の第一の國なれば、先哲の作を味ひ、一字も龜末なる事なかれ。一句の姿は青柳の小雨にたれたることくに於て、折々微風にあやなすもあしからず。情は心裏の花をもたづね、眞如の月を觀すべし。附心は薄月夜に梅の馨へるがごとくありたし。
末略す。

旅の榮華 (蕉門頭陀物語)

或人翁に物語せるは、貴坊は宗祇の跡をおひ、雲にわかれ水に伴ひ、いづちを宿とさだめ給はず、行脚はいづれの日かおかしかりし。翁ほゝゑみ給ひて旅せぬ人はさこそ思はめ。行脚は苦業を翼とす。けふははれて笠かろく、けふは時雨で袖おもき、緞子の夜着、草の枕、引かはりうつろいもしてこそをかしけれ。おくのほそ道降つゞきて、泥に取つく杖を力に、曾良はつかれてゆくべくもあらず、我は笠島を見んと云ふ。同行も又腹あしきことあり。況や煤掃に居處をおはれ、或は鼎をかきならし情なき日もあるぞとよ。旅は彌生の末つかた、卯月半こそけしき立て覺ゆれ。一とせ大和路にわけ入て、おへる物に道をつられ、ながき日かけをたどりくらし、何がしのやどをからんとするに、むら鴉森にいそぎ、野山はいたうかすみたる、繪によくも似たるかなと、ゆきあひたゝすむ。かなたの垣に藪藤のおぼつかなく咲かゝりたるを見て、

草臥て宿かるころや藤の花
斯云句のうかびたる、我ながら二なくおぼゆ。これらのけしき旅の榮花ともいはん。

稻妻の句 (同)

秋のはじめ暑さ彌まさりて降かぬる雲の、晝はむらがり、夜はかたまりておそろしげなるに、稻妻のくだけちる夕暮方に、溶してゆかたながら物打敷き縁の柱にもたれよりて、むつまじきとち古きを語る。『稻妻やくだけでもとの入處』よく人の知たれば、其頃の名句ともいはん。されど發句のけしきをしらす、我今此ながめに、

いなづまや闇の方ゆく五位の聲

はくらんの妙薬 (同)

山里は萬歳おそし梅の花
翁去來へ此句をおくられし其返事に、此句の意二義に解くべく候。山里は風寒く、梅の盛に萬歳のきたらん、どちらも遅しとやうけたまはらん。又山里

しと、顔うるはしかりしとなり。

掟

今年貞享の古式をあらため、嵯峨の時雨に硯をならすことは、あるじ落柿舎の物すぎにて、文章千那凡兆等をそゝのかし、文臺月花の坐を定るもの也。

掟五ヶ條

- 一 月花 一句
 - 一 出合 遠近
 - 一 短冊 持參
 - 一 當番 添副
 - 一 諸禮 停止
- 芭蕉庵桃青判

- 一 諸禮停止
 - 一 出合遠近但聲先
 - 一 一句一直 雪月花一句
- 右三ヶ條舊式也
芭蕉庵桃青書之

(一)『一葉集』に『京なつかしき詠や侍らん』
(二)『頭陀物語』に『翁』の字なし
(三)『同』に『見立て杖』とあれど今『一葉集』に『杖』に『翁』に『杖』に『翁』の字なし
(四)『同』に『俳中の數』とあれど今『一葉集』に『杖』に『翁』に『杖』に『翁』の字なし
(五)この掟五ヶ條の出自未考『十論の辨抄』には左の如くあり
五條式 諸禮停止 小語低聲 出合遠近 一句一直 雪月花一句 右は舊式を増減して、貞享式の條目也
(六)この掟は『芭蕉庵桃青書』にあり

の梅さへ過たるに、萬歳殿の來ぬ事よといふ、なつかしき詠や侍らん。翁此返事に其事はなくて、去年の水無月五條あたりを通りさぶらふに、あやしの軒に看板を懸てはくらんの妙薬ありと記す。伴ふどちおかしがりて、くわくらんの藥なるべしとあざ笑しまゝ、われらこたへ候は、はくらん病が買候半と申き。

うき世の果は (同)

翁尙白にものがたりありしが『うき世の果はみな小町なり』と云ふ付句久しきより其趣向ありて、空しく思ひ入前句もなかりし、いつぞや正秀庵の席にて『坂ひとつ見あげて杖にものおもひ』と云ふ前句あり。是にこそ思ひかへせば、まさしく小町の姿あれど、句中の實を顯すことかたし。其後選集の思ひ立に、『さまざまに品かはりたる戀をして』と聞えたれば、うれしとばかりに此句を付る。これぞ浮世のあだなるより百とせの姥に色をさましたる、我家の寂と云ひ、俳中の教とも云ひ、わかき二三子よく聞べ

行脚之掟 (雪の薄)

(一) 行脚の掟 (雪の薄)
 (二) 行脚の掟 (雪の薄)
 (三) 行脚の掟 (雪の薄)
 (四) 行脚の掟 (雪の薄)
 (五) 行脚の掟 (雪の薄)
 (六) 行脚の掟 (雪の薄)
 (七) 行脚の掟 (雪の薄)
 (八) 行脚の掟 (雪の薄)
 (九) 行脚の掟 (雪の薄)
 (十) 行脚の掟 (雪の薄)

一 宿なすとも、ゆへなき所に再宿すべからず。樹下石上に臥とも、あたゝめたる藁とおもふべし。
 一 腰に寸鐵たりとも帯すべからず。惣てももの命を取事なかれ。君父の仇ある所には、門外にも遊べからず。いたゞき、ふまぬ、忍びざる情あればなり。
 一 衣類器財相應にすべし。過たるもよからず。足ざるもしからず。程あるべし。
 一 魚鳥獸の肉を好で喰べからず。美食珍味にふける人は他事にふれ安きなり。茶根を咬で百事をなすべき語を思ふべし。
 一 人の求なきに己が句を出すべからず。望を背くもしからず。
 一 たとへ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず。おこらば中途より歸るべし。
 一 妙へなきに馬駕籠に乘事なかれ。一枝を己が痔脚とおもふべし。

一 好んで酒を呑むべからず。饗應により固辭しがたくば、微醺にして止むべし。亂に及ぼすのいましめあり。祭にもろみを用るも、酔るを憎で也。酒に遠ざかるの訓あり。慎や。
 一 船錢茶代を忘るべからず。
 一 俳諧の外雑話すべからず。雑話出なば居眠して勞を養ふべし。
 一 他の短を擧て己が長を顯す事なかれ。人を誘て己にほこるは甚いやしきなり。
 一 女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり。此道に親炙せば、人を以て傳ふべし。惣じて男女の道は刷を立るのみなり。流蕩すれば心懸一ならず。此道は主一無適にして成就す。己を省るべし。
 一 主あるものは一枝一草たりとも取べからず。山川江河にも主あり。動よや。山川舊跡みだりに名をあらたに付る事なかれ。
 一 一字の師恩たりとも忘るゝことなかれ。一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ。人におしゆ

清淨のうるはしきを蓬萊に對して結びたるなりと。

唐崎の句 (同)

(一) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (二) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (三) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (四) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (五) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (六) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (七) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (八) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (九) 蓬萊の句 (去來抄先師評)
 (十) 蓬萊の句 (去來抄先師評)

るは己をなして後の事なり。
 一 一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず。さりとして又媚語ふ事なかれ。如此の人は世の奴なり。此道の人は此道に遊人と交るべし。
 一 夕べをおもひ且を思ふべし。且暮の行脚といふ事好ざる事なり。人に勞をかくる事なかれ。しばしばすれば疎んぜらるゝの言をおもふべし。將進食たりともこのむべからず。
 右の條々我門の行脚は可愼者也 桃 青

からさきの松は花より臙にて 芭 蕉
 或人「にて」留りの難あらんやと云。其角答曰。「にて」は「哉」にかよふ故、「哉」留の發句に「にて」留の第三を嫌ふ。「哉」といへば句切迫れば「にて」とは侍るとなり。呂丸曰。「にて」留の事は其角が解あり。又是は第三の句なり。いかに發句とはなし給ふや。去來曰。是は即興感偶にて發句たること疑ひなし。第三は句案に渡る。もし句案に渡らば第三等に下らん。先師重て曰。其角去來が辨みな理窟なり。我は只花より松の臙にて、おもしろかりしのみなりと。或書にからさきの松は花より臙にて、翁曰。但し予が方寸の上に分別なし。いはゞ「さ」なみやまのゝ入江に駒とめてひらの高ねの花を見る哉。只眼前なるは、と申されけり。
 或人師のから崎の句に切字なきことを其角に難す其角句意と切字のことを説て、後に師に句意を尋ぬ

項の末段「此申論を再び翁に申すは問答に於ては然るべし但し」とあるは此項「俳諧芭蕉談」にあり

るに師の曰。我は切字の有無と意の深淺を案じて作したる句にあらず。只眼前の實景畫きなせども及ばず。毛髮これが爲にうごき、覺えず此句をなす。工みたることなき故、句意と切字とは我これをしらすと。

行春の句 (同)

行春をあふみの人としみける 芭蕉

先師曰。尙白が難に近江は丹波にも、行春は行年にもなるべしといへり、汝いかゞ聞侍るや。去來曰。尙白が難あたらす。湖水朦朧として春ををしむに便有べし。殊に今日の上に侍ると申き。先師曰。しかり。古人も此國に春を愛することをさゞ都におとらず。去來此一言心に徹す。行年を近江に居給はゞいかでか此感のましまさん。行春丹波にゐまざば素より此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむること眞なる哉と申。先師曰。汝はともに風雅を語るべきものとなりと悦び給へりしか。

出板に及ぶとも改むべし (同)

此木戸や鎖のさゝれて冬の月 其角
歳暮撰の時、此句を書おくり、冬の月霜の月置煩ひ侍るよし聞ゆ。衆議冬の月による。先師曰。其角が冬霜に煩ふべき句にもあらずとて、冬の月に定め入集せられける。はじめは文字つまりて柴戸と讀たり。然るに出板の後大津より先師の文に、柴の戸にあらす、此木戸なり。斯る秀逸は一句も大切なり。たとへ出板に及ぶともいそぎあらたむべしとなり。凡兆曰。此木戸柴の戸させる勝劣なし。去來曰。此月を柴の戸によせて見れば、尋常の氣色なり。是を城門にうつして見れば、其風情あはれに物凄き事いふばかりなし。實にも角が冬霜に煩へるも理りなり。

本性をあらはす (同)

うらやましおもひきる時猫の戀 越人

先師伊賀より此句を書贈て曰。心に俗情あるもの一たび口に不出と云ふことなし。かれが風雅こゝに至りて本性をあらはせりとなり。是より先に越人が名四方に高く、人のもてはやす發句おほし。然れども

(一)「あだ」は「あど」なり。「稚心」なり

(二)「葉集」前項の末にこの三句のみを附記す。今「去來抄」によりて別項とす

(三)寫本に「なかれけり」

(四)「葉集」に此項なし。今「去來抄」によりて補ふ

爰に至りて初て本性をあらはすとなり。

木枯の句 (同)

木がらしに二日の月の吹ちるか 荷兮
木がらしの地にも落さぬ時雨哉 去來

去來曰。二日の月と云、吹ちるとはたらきたるあたり、予が句にはるか勝れたりと覺ゆ。先師曰。荷兮が句は二日の月といふものにて作せり。其名目を除けばさせることなし。汝が句は何をもて作したりとも見えず、全體の好句なり。只地までと限たるまでの字いやしとて直し給ひぬ。

あだなる處 (同)

春風にこかすな雛の駕籠の衆 获子

先師此句を評して曰。伊賀の作者あだなる處を作して尤なつかしとなり。丈草曰。伊賀のあだなるを師はしらすがほなれど、其あだなるは師のあだならずや。

又 (同、同門評)

起さまにまそつと長し鹿の足 杜若
乾鮭と鳴く行や油つゝ 雪也

去來曰。伊賀の連業にあだなる風あり。是則先師の一鉢也。遷化の後ますます多し。斯の如くの類なり。其愚なるには及がたし。支考曰。伊賀の句はさせることなきもあれど、いやみなし。伊賀の連業は上手也。

清瀧の句 (同、先師評)

先師難波の病床に予をめして曰。此頃園女が方に「しら菊の目に立て見る塵もなし」と作す。過しころの句に似たれば清瀧の句を案じかへたり。初の草稿野明が方に有べし、取て破るべしとなり。然どもはや集にもれ出侍れば捨るに及ばず。名人の句に心を用ゐたまふ事しらすべし。

如來邊座の頌 (同)

涼しさの野山にみつる念佛哉 去 來
 これは善光寺如來の洛陽眞如堂に遷座有し時の吟
 なり。初の冠は「ひゝやりと」と置たり。先師曰。
 斯る句は全體おとなしく仕立るものなり。五文字か
 へてよしとて、「風薫る」とあらため給ふ。後猿蓑の
 撰場には、ふたゝびあらためて、今の冠にぞせさせけ
 る。

除かれたる句 (同)

おも栞や明石のとまり郭公 荷 兮
 猿みの撰の時、去來曰。此句は師の野を横に馬ひ
 きむけよと同前なり、入集すべからず。先師曰。明
 石の時鳥といへるもよし。去來曰。あかしのほとゝ
 きすはしらす、只馬と船とかへ待るのみ。句主の手
 柄なし。先師曰。句のはたらきにおいては一歩も動
 ず、明石を取得にいれば入なんと。終にいらす。

君が春蚊屋は萌黄に極りぬ 越 人
 先師曰。發句は落つかざれば眞の發句にあらず。
 越人が發句既に落著たりと見ゆれば、又おもみ出來
 れり。此句蚊帳は萌黄に極りたるにてたれり。月影
 朝朗など置てかやの發句となすべし。其上かはらぬ
 色を君が代にかけて、歳旦となし待る故、心重く句
 奇麗ならず。

信徳が人の世や (同)

振舞や下坐に直る去年の雛 去 來
 此句は予思ふ處ありて作す。五文字「古鳥帽子」
 「紙衣」等は云過たり。景物は下心徹せず。「あさまし
 や」「口をしや」の類ははかなしと、今の冠を置て伺
 ひければ、先師曰。五文字に心を込めておかば、信徳
 が「人の世や」なるべし。十分ならずとも振舞にて
 堪忍有べしとなり。

轉々 (同)

田のへりの豆つたひゆく螢かな 万 乎
 元は先師の斧正有し凡兆が句なり。猿みの撰の時
 凡兆曰。此句見る所なし除べし。去來曰。へり豆を
 傳ひゆく螢の光、闇の夜の氣色風姿ありといふ。凡
 兆ゆるさず。先師曰。兆もし捨ば我ひろはん。幸伊
 賀の連中の句に是に似たるあり。それを直して此句
 となさんとて、終に万乎が句となりけり。

信徳が知る處にあらず (同)

大年をおもへば年のかたきかな 凡 兆
 元の五文字「戀すてふ」と置て予が句なり。信徳
 曰。「戀櫻」と置べし。花は騷人の思ふこと切なり。
 去來曰。物には相應あり、古人花を愛して明るをま
 ち、暮を惜み、人をうらみ、山野に行まよへども、
 いまだ身命のさたに及ず。櫻と置ば却て年の敵哉と
 云る處淺間になりなん。信徳猶こゝろえず。重て先
 師に語る。先師曰。そこらは信徳が知處にあらずと

なり。其後凡兆「大年を」と置す。先師曰。誠此一
 日、千年の敵なり。少しも置たるもの哉と、大笑
 ひし給けり。

細工 (同)

賽段も用意なり花の森 去 來
 先師曰。花の森とは聞なれず、名所なるにや。古
 人も森の花とこそ申侍れ。ことばを細工して斯る拙
 きこと云べからずとなり。

鉢た、きの句 (同)

月雪や鉢た、き名は甚之丞 越 人
 去來曰。此頃伊丹の句に「彌兵衛とはしれどあは
 れや鉢た、き」と云あり。越人が句入集如何侍らん。
 先師曰。月雪といへるあたり、一句はたらき見えて
 しかも風姿あり、只しれどあはれやと云ひ下せると
 は格別なり。されども鉢叩の俗體をもて趣向を立、
 俗名を以て句をかざり侍れば、尤邊慮あるべし。又
 かさねて折もあらんとなり。

(一)「寫本去來抄」
 に「おもひ置よ」
 とありて、作
 者を野水とす
 (二)「寫本去來抄」
 に「奇麗なら
 ず」の下に「汝
 が句も已に落
 付所におひて
 は氣遣ず。そ
 こに尻を居べ
 からずと也。」

(一)「予」とは去來
 なり

(二)「板本去來抄」
 に「俗名をか
 ざり侍れば」
 とあれど今
 「寫本」に従ふ

其角を評す (同)

きられたる夢はまことか蚤の跡 其 角

去來曰。其角は實に作者にて侍る、わづかに蚤の喰付たること誰か斯くは云ひ盡さん。先師曰。しかり。かれは定家の卿なり。さしてもなき事をことごとしく云つらね侍る。と聞えし評詳なるに似たり。

一兩年早き句 (同)

をとつひはあの山こえつ花ざかり 去 來

これは猿みの二三年前の吟なり。先師曰。此句今聞人有まじ、一兩年まつべしとなり。其後杜園が徒と芳野行脚し給ひける道よりの文に、或はよし野を花の山と云、或はこれはく〜とばかりと聞えしに魂をうばはれ、又は其角がさくらさだめぬと云しに氣色をとられて、芳野に發句もなかりき。只をとつひはあの山こえつと日々吟じ侍るとなり。其後此句を語り、人もうけとりけり。今一兩年早かるべしとはいかでか知給ひけん。予は却て夢にもしらする事

どもなり。

病雁と小えびとの論 (同)

病雁の夜寒に落て旅寝かな

海士が家は小えびにまじるといふ哉

猿みの撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆曰。病雁はさることなれど、小蝦にまじるといふは句のかけり、事新らしくまことに秀逸なりといふ。去來曰。小えびの句は珍らしといへど、其物を案じたる時は予が口にも出ん。病雁は格高くおもむきかすかにして、いかでか爰を案じ付んと論じ。終に兩句ともにこひて入集す。其後先師曰。病雁を小えびなどと同じごとくに論じけるや。と笑ひ給ひけり。

自稱の句とせよ (同)

岩ばなやこゝにもひとり月の客 去 來

去來曰。酒堂は此句を月の猿とすべしと申侍れど予は客の方まさりなんと申。先師曰。猿とは何事ぞ。汝此句をいかに思ひて作せるや。去來曰。明月に山

らんや。と此時にておもひ知侍る。

下京や (同)

下京や雪つむ上の夜の雨 凡 兆

此句初に冠なく、先師をはじめいろ〜と置侍て此冠に極め給ふ。凡兆あと答ていまだ落着す。先師曰。兆汝手柄に此冠を置べし。もしまさるものあらば我二度俳諧を云べからずとなり。去來曰。此五文字のよきことは誰々も知侍れど、此外に有まじとはいかで知侍らん。此事他門の人聞侍らば片腹いたくいくつも冠置べし。其よしと置るゝものは又こなたにはをかしかりなんと思ひ侍るなり。

手柄なき句 (同)

みのしゝの寝にゆく方や明の月 去 來

此句を伺ふ時、先師しばらく吟じてとかくを宣はず。予思ひ誤るは先師といへども歸り侍つ夜興引の意を知り給はずやと、しか〜のよしを申。先師曰。其おもしろき處は古人もよくしればこそ『明ぬとて

(一)「寫本去來抄」に句の下に「はせを」と註記せり。

(二)「同」に「案じ得る時は」とあり、從ふべきに似たり。

(三)「予」とは去來なり。

(一)「寫本去來抄」に「予が趣向は一等くだり侍りけり」とあれど今「寫本」に從ふ。

(二)「寫本」に「狂者の感も有にや」の次に「退て考るに」の一段あれど文意重複なれば削れり。

(三)「寫本去來抄」に「歸り侍る」と「又」知り給はざるや。

野を吟歩し侍るに、岩頭又一人の騒客を見付たると申。先師曰。「こゝにもひとり月の客」とおのれと名のり出たらんこそいくばくの風流ならめ。只自稱の句となすべし。此句は我も珍重して笈の小文に書入けるとなん。予が趣向は猶二三等も下り侍りなん。

先師の意をもて見れば少し狂者の感も有にや。笈の小文は師の自撰の集なり。名を聞いていまだ書を見ず。草稿半にて遷化ましましける。昔時申けるは、予が發句幾句か入集なし給へるやと伺ふ。先師曰。我門人笈の小文に入句三句持たるものはまれならん。汝過分のことをいへりとなり。

夜伽の句 (同)

うづくまる薬の下の寒さかな 丈 草

先師難波の病床に、人々に夜伽の句をすゝめて曰。今日より我死後の句なり。一字の相談を加ふべからずとなり。さま〜の吟どもおほく侍りけれど、只此句のみ『丈草出来たり』と宣ふ。斯る時はかゝる情こそ動き侍らめ。興を發し景を探るに豈いとまあ

野べより山に入る鹿の跡吹おくる萩の上風」とはよ
 めりける。和歌優美の上にさへ斯までかけり作した
 るを、俳諧自由の上に、只尋常の氣色を作せんは更に
 手柄なかるべし。一句おもしろげなれば、しばらく
 案じぬれど、とかくに詮なかるべしとなり。其後お
 もふに、此句は郭公なきつるかたをといへる後徳大
 寺の歌の同案にて、いよ／＼手柄なきことをしれり。

云盡すものにあらず (同)

萬の葉の………何々とやらん跡は忘れたり
 尾張の人の句なり

此句は萬の葉の谷風に一筋峯までうら吹かへさる
 と云句なるよし。予先師に此句を語るに、師曰。
 發句は斯のごとくくま／＼まで云盡すものにあらず
 となり。支考側に聞て大に感驚し、初めて發句と云
 ふものを知侍るとて、此頃ものがたり有けり。予其
 時も等閑に聞なしけるにや、此事跡方もなく打わす
 れ侍ることいと本意なけれ。

云ひおほせて何かある (同)

下臥につかみわけばや糸さくら
 先師路上にて語給ふ。此頃其角が集に此句あり。
 いかん思てか入集しけん。去來曰。糸櫻の十分に
 咲たる形容よく云課せたるに侍らずや。先師曰。い
 ひ課せて何かある。予こゝにおいて肝に銘ずること
 あり。始て發句になるべきことゝなるまじきことを
 しれり。

句到らず (同)

手をはなつ中に落けりおぼろ月 去 來
 魯町に別るゝ時の句なり。先師曰。此句悪しとい
 ふにはあらず。功者にて只いひまぎらかしたるなり。
 去來曰。いかさまにさしてなきことを句の上にてあ
 やつりたる所有り。然れどもいまだ十分に解せず。
 予が心中に一物侍れども句上に顯れずとみゆ。いは
 ゆる是は意到句不到也。

「寫本去來抄」
 あり「感動し」と
 あり「同」に「本意
 なけれ」の次
 には「都て句は
 いひ過るは又
 病なり」といづ
 れも句として
 見る所なし
 或時
 此の頃や小
 春を室に歸
 花を初上五文
 此句初上五文
 字を「山陰」と置
 「南邊や」と置
 わづらふよし
 尤小春の理に
 落つていひ過
 七五の句意下
 悉濟侍れば、
 たゞこゝろな
 べき五文字を置
 べき也」と今
 冠に定侍
 る

筆の罪のみにあらず (同)

泥鰌や苗代水の畦うつり 史 邦
 猿蓑の撰に、予誤て「畦づたひ」と書入たり。先
 師曰。「うつり」と「つたひ」と形容風流格別なり。
 殊に「畦うつりして畦啼くなり」ともよめり。肝要
 のけしきをあやまること、筆の罪のみにあらず。句
 を聞くことのおろそかなる故なりとて機嫌あしかり
 けり。

これこそ發句なれ (同)

じだらくに寝れば涼しき夕かな 宗 次
 猿みの撰の時、宗次今一句の入集を願ひて數句吟
 じ侍れど取べき句なし。一夕先師の側に侍りけるに、
 いさくつろぎ給へ、我も臥しなんとおほせられけれ
 ば、御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍ると
 申ければ、先師曰。これこそ發句なれとて、今の句
 に作て入集せさせ給けり。

初心の覺悟 (同)

靈棚の奥なつかしや親のかほ 去 來
 はじめは「佛のおぼろにゆかし魂祭」と云ふ句な
 り。此時添書に祭る時は神いますがごとくとやら
 ん、玉棚のおくなつかしく覺侍るよしを申おくる。
 先師返事に、玉祭尤の意味ながら此分にては古びに
 落申べく候。註に「玉棚のおくなつかしや」と侍る
 を、何とて句になさざるやと驚し給ひけり。五文字
 和らかなれば下をけやけく「親の顔」と置かば句に
 なるべしとなり。其思ふ處直に句となる事をしらす。
 深く思ひ沈み、却て心重く詞しぶり、或は心たしか
 ならず。是等は初心の覺悟有べき事なり。けや
 けく置て然るべく侍らん、これ則佛のまとひしなる
 べきや。

是にてもなし (同)

夕すゞみ痛氣おこして歸りけり 去 來
 予が初學の時、發句の仕様伺けるに、先師曰。發

「五文字」以下
 「板本」になし

〔二〕板本去來抄に「作意」とあり、今寫本に從ふ

句は句つよく俳意たしかに作すべしとなり。試に此句を賦してうかゞひければ、又是にてもなし。と大に嘆ひし給ひけり。

ふれるふれぬ (同)

つかみあふ子供のたけやまばたけ 游 刀
凡兆曰。此まばたけは麻呂ともふれんか。去來曰。まば、麻に成てもよもぎになりても苦しからずと論ず。先師曰。又ふれるふれぬの論かしがまし。無用なり。と制し給ひけり。見る人察せよ。

沖の時雨 (同)

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆 去 來
去來曰。猿みのは新風のはじめなり。時雨は此集の美目なるに、此句しぞこなひ侍る。只「有明や片帆にうけて一時雨」とせば、いそがしやよりも句のはりよく、心のねばり少からん、眞帆もそのうちにこもりてん。先師曰。沖の時雨といふも又一ふしにてよし。されども句ははるかに劣侍るとなり。

云課せず (同)

兄弟の顔見合すやほととぎす 去 來
去來曰。此句は五月二十八日曾我兄弟の互に顔見合せける頃時鳥なども啼申けんかし。昔し光源氏のむら雨の軒端にたゞすみ給ひしを、紫式部が思ひやりたるおもむきをかりて作す。先師曰。曾我殿原とは聞ながら一句いまだ云課せず。其角が評も同前なり。と深川より評し給ふ。許六曰。此句は心あまりて詞たらず。去來曰。心あまりて詞たらずといはんは憚りあり。たゞいひ課せぬとも評すべし。文章曰。今の作者はさかしくかけ廻りぬれば、是等は合點の中なるべしと俱に咲ひけり。

三十棒 (同)

につと朝日にむかふ横雲 去 來
青みたる松より花の咲こぼれ
先には「すつべりと花見の客を仕舞けり」と付侍るが、先師の顔つきをかしからざれば又前を乞て此

句を付直す。先師曰。いかに思ふて附直し侍るや。予曰。朝雲の長閑に機嫌よかりしを見て初に付侍れど、よく見るに此朝雲の奇麗なるけしき云ふばかりなし。是をのがしては詮なかるべしと思ひ付直し侍るといへり。先師曰。初の句ならば三十棒なるべし猶かけ高きを直すべしとて、今の五文字にはなりけり。

誤て歳旦の脇 (同)

梅にすゞめの枝の百なり 去 來
これは歳旦の脇なり。翁深川にて聞て曰。此梅は二月の氣色なり。去來いかに思ひ誤て歳旦の脇に用ひけるとなん。

手帳 (同)

舟に煩ふ西國の馬 彦根の句なり
許六試に點を乞ける時、此句に長をかけたなり。先師曰。今はかゝる手帳らしき句はきらひ侍る。是等は手帳なり、長有べからず。かさねて上京の時、此

句何故に手帳に侍るや。先師曰。舟の中にて馬の煩事は云べし。西國の馬とまでは能こしらへたるものなりとなん。
弓張の角さし出す月の雲 去 來
去來問曰。此句も手帳なるべきや。先師曰。手帳ならず、雲も角も弓張もいはねば一句聞えず。

こえを水に (同)

でつちが荷ふ水こぼしたり 凡 兆
はじめは糞なり。凡兆云。屎糞の事も申べきか。先師曰。きらふべからず。されど百韻といふとも二句に過べからず、一句なくてもよからん。凡兆水にあらたむ。

斯る前句を (同)

ぼんとぬけたる池の蓮の實 芭 蕉
咲花にかき出す縁のかたぶきて
此前句出ける時、去來曰。斯る前句をのがすべからずとて、數刻案じたれど、皆くなし。先師に付

〔一〕此句は馬佛、許六、米佛、木尊四吟歌仙、市中の巻六の句目にて木尊の句なり

句を所望しければかくこそ付給へれ。

むづかしき附句 (同)

くろみて高き樫の木の森

咲花にちひさき門を出つ入つ

芭 蕉

此前句出ける時、去來曰。前句全體樫木の森のこ
とをいへり。其氣色をうしなはず、花を付る事むづ
かしかるべしと、先師の付句を乞ければ斯付て見せ
給ひぬ。

上藤の旅 (同)

綾のねまきにうつる日の影

泣くもちひさきわらちもとめかね 去 來

先師曰。よき上藤の旅なるべしとぞ。予これを聞
て頓に此句を附侍りける。好春云。上藤の旅と聞て
言下に句出たり。蕉門の徒の修練格別なりと感す。

夜すがら叱り給ふ (同)

ふたつにわれし雲の秋風

正 秀

中れんじ中きりあくる月影に 去 來
正秀亭の第三なり。はじめに「竹格子影もまばら
に月澄て」と付侍りけるを先師斯は斧正し給ひけり。
其夜俱に曲翠亭に宿す。先師曰。今夜はじめて正秀
亭に會す。珍客なれば發句は我なるべしと、兼て覺
悟すべき事なり。其上發句と乞ば好悪をえらばず早
く出すべきことなり。一夜のほどいくばくかある。
汝が發句に時をうつさば今宵の會空しからん。あま
り不興の至なれば我發句を出せり。正秀忽脇を賦す
「二ツにわるゝ」とはげしき雲の氣色なるを、斯のび
やかなる第三付る事、前句のけしきを探らず、未練
の事なりと夜すがらいかり給ひける。去來曰。其時
に「月影に手のひら立る山見えて」と申一句侍りけ
るを、只月のさやけき處をいはんとのみなづみて、
位をわすれ侍ると申き。先師曰。其句を出さばいく
ばくの増ならん。此度の膳所の恥を、一たび雪んこ
とを思ふべしとなり。

輕 み (同)

分別なしに戀をしかりる 去 來
淺茅生におもしろげつく伏見臨 芭 蕉
先師都より野坡が方への文に此句を書出し、此邊
の作者いまだ此甘味をはなれず。そこもと随分輕み
を取うしなふべからずとなり。

たけ高し (同)

赤人の名はつかれたりはつがすみ 史 邦

先師曰。中の七文字能置れたり。發句のたけ高く
意味少からず。

算用合せたる句 (同)

駒曳の木曾や出らん三日の月 去 來

「今やひくらん望月の駒」といへるをふり替て「木
曾や出らん三日の月」といへり。先師曰。此句は算
用を合せたる句なりと嘲り給へり。

汝と越人のみ (去來抄同門評)

雪の日に兎の皮の髭つくれ

芭 蕉

遺 語 集

魯町曰。此句意如何。去來曰。前書に「子供と遊
びて」とあれば子供の業とおもはるべし。しひて理
會すべからず。機關を踏破て知べし。先師此句を語
り給ふに、予甚感動す。先師曰。これを悦んもの越
人と汝のみならんと思ひしに、果して然りとて、殊
更の機嫌なりし。

惟 然 を導く (同)

梅の花赤いはくあかいかな 惟 然

去來曰。惟然坊が今の風大かた是等の類なり。發
句にはあらず。先師遷化の年の夏惟然坊が俳諧を導
き給ふに其得たる口質の處よりすゝめて「磯際にざ
ぶりく」と浪打て」或は「杉の木にすうくと風の
吹わたり」など云を賞し給ふ。又俳諧は氣先にて
無分別に作すべしと宣ひ、又此後いよく風體輕か
らむなどのたまひたる事を聞まよひ、我得手に引か
けて、自の集の歌仙に侍る「妻よぶ雉子」あくるが
ことの雪の句などに、先師評し給つる句勢句姿な
どいふことの物がたりどもは、みなく忘却せら

「初蓆桑」の卷
には「月花に」

「板本寫本共」
に「我が發句
を出すべしと
て其夜は先師
の發句なり」と
あれど今
「葉集」に従

(一)元祿七年閏五
月下旬落柿合
即興の歌仙五
月雨の卷ニオ
十日十一句
日にして「淺
茅生」を「淺
生」に作る
(二)板本に「機嫌
を踏破して」
とあれど今寫
本に従ふ
(三)寫本「機嫌な
りし」の次に
「去來曰此説
の古事神代卷
に出たり或曰
兎の皮の髭つ
くるは雪中寒
き故なりなど
いるく理窟
を付けて見る
こそ片腹いた
るに去來接し
とくに解せざ
るに解せざら
ば若しはやし
けりとの類な
るべし」とあ
り

るゝと見えたり。

切 字 (去來抄故實篇)

卯七曰。發句に切字を入れることは如何。去來曰。故あり。先師曰。汝切字を知らず。去來曰。いまだ傳授なし、自分に覺悟し侍る。先師曰。いかに。去來曰。たとへば發句は一本木のごとしといへども、梢根有り。附句は枝のごとし、大なりといへども全からず。梢根ある句は切字の有無によらず發句の體なり。先師曰。然り。しかれども夫は佛を知たるなり。是を傳授すべし。切字の事は連俳ともに深く秘す。みだりに語るべからず。總て先師に承ること多しといへども秘すべしと有しは是のみなれば、其事はしばらく遠慮し侍る。第一切字を入れるは句をきる爲なり。切れたる句は字を以きるに及ず。いまだ句のきれるきれざるをしらざる作者のため、先達切字の數を定られたり。此字を入れる時は十に七八は句切るなり。殘二三句は入て切ざる句あり、又入らずしてきれる句有り。此故に或は此「や」は「口合のや」、此

『し』は「過去のし」にてきれず。或は是は三段切、これは何切などゝ名目して傳授事にせり。又文章に向て先師曰。歌は三十一字にてきれ、發句は十七字にてきる。文章抄入有。又或人曰。先師曰。切字に用る時は四十八字みな切字なり。用ひざる時は一字も切字なしとなり。是等はみなこゝをしれと、障子一重を教給ふなり。去來曰。此事を記す、同門にもみだりなりと思ふ人あらん。愚意は格別也。此事あながち先師の秘し給ふべき事にもあらず。たと先師の傳授のとき、かくありし故なるべし。予も秘せよとありけるは書せず。唯此あたりを記して、人も推せよとおもひ侍るなり。

櫻 (同)

卯七曰。猿みのに花を櫻に替らるゝはいかに。去來曰。此時予花を櫻に換んと云ふ。師曰。故いかに。去來曰。およそ花は櫻にあらずといへる、一通りはさることにして、花聲、茶の出花などもはなやかなるによる。花やかなりといふもより所有。畢竟花は

さくらをのがるまじと思ひ侍るなり。先師曰。さればよ古は四本のうち一本は櫻なり。汝が云處も故なきにあらず、ともかくも作すべし。されど尋常の櫻にては替たる詮なからんとなり。予「糸ざくら腹一ばいに咲にけり」と吟じければ、句我まゝなりと咲ひ給ひけり。

戀 句 (同)

卯七野明曰。蕉門に戀を一句にても捨るはいかに。去來曰。予此事をうかゞふ。先師曰。古は戀の句數さだまらず。勅以後二句以上五句となる。是禮式の法なり。一句にて捨ざるは、大切の戀句に挨拶なからんは如何となり。一説に、戀は陰陽和合の句なれば、一句にて捨べからずともいへり。みな大切におもふ故也。予が一句にても捨よといふもいよいよ大切に思ふ故なり。汝等は知まじ。昔は戀一句出れば、相手の作者は戀をしかけられたりと挨拶せり。又五十韻百韻といへども、戀句なければ一卷とはいはず、はした物とす。かくばかり大切なる故、みな

戀句になづみ、わづか二句一所に出れば幸とし、却て卷中戀句まれなり。又多くは戀句より句しぶり、吟おもく、一卷不出來になれり。此故に戀句出で付よからん時は、二句が五句もすべし。付がたからん時はしひて付すとも、一句にても捨よといへり。斯いふも何とぞ卷面のよく、戀句も度々出よかしとおもふ故なり。勅の上を斯いふはおそれあるに似たれども、夫は連歌のことにて、俳諧の上にあらねば、奉背にもあらず。しかれどもわれ古人の罪人たることをまぬがれず。只後學の作しよからんことを思ひ侍るのみなり。

宵 闇 (同)

卯七曰。蕉門に宵闇を月に用ひ侍るや。去來曰。此事あり。酒堂曰。深川の會に宵闇の句出たり。先師曰。宵闇は句中に月あれば、外に月の句せんは拙かるべし。と直に月に用ひ、さて句面に月を見せざらんもいかゞと、月次の月の字を入らるゝといへり。さもあるべきこととおもへり。其後風園が會に、宵

間の句いづる。予曰。先師已に此式を立らるゝ上は
いざ其法にあらはんと是を月に用ひ侍りぬ。この頃
許六の書を見るに先師の宵問を月にし給ふは故有と
の事也。然るを何の故もなく月に用るは浅ましとな
り。此ことばを聞て恥るにたへず。許六は其時深川
の會徒なり。いかさま仔細あるべし。

盆は釋教か (同)

野坡曰。東武の會に盆を釋教とせず。嵐雪是を難
ず。先師曰。盆を釋教といはゞ正月は神祇なるかと
なり。予とかくをいはず。退て思ふに、此事はいかさ
ま故あらん。一句に釋教なくとも既に盆と呼ば釋教
ならんか。中元と云たぐひにはあらず。いと不審也。

西鶴が淺ましく下れる姿あり (同)

先師曰。世上の俳諧の文章を見るに、或は漢文を
假名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入、こと業
あらく賤しくいひなし、或は人情をいふとても、今
日のさわがしきくまを探りもとめ、西鶴が淺ま

しく下れる姿あり。我徒の文章はたしかに作意を立
て、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかにい
ひつゞけ、事は鄙俗の上におよぶとも、なつかしく
云とるべしとなり。

贊名所の句 (同)

先師曰。贊名所の發句は其贊其處の句と見ゆる様
に作るべし。西行の贊を定家の繪にも書き、明石の
發句を松島にも用ひ侍らんは、拙きことなるべしと
也。

俳 名 (同)

先師曰。俳名はあながち熟字によらず。只唱へ清
く調ひ、字形の風流なるを用ふべし。短冊など書て
猶見る所あり。片名書侍にことくしき字形は苦し
かるべし。はせをは假名に書ての自慢なりとなり。
又野明が名をはじめ風奴と云けるを、劍奴のある字
は名に用ふべからずとて、先師の野明とは改め給ひ
けり。

外題の寸法 (同)

去來曰。外題の寸法あり。豎は表紙の三分二をと
り、横は五分の一をとり侍るとやらん。猿みの、時
先師の宣ひけり。慥には覺えず。

竹植る日 (同)

魯町曰。竹植る日は古來より季にや。去來曰。覺
悟せず。先師の句にて初めて見侍る。古來の季なら
ずとも、季に然るべき物あらばえらび用べし。先師
曰。季節の一も探し出したらんは、後世によき賜な
りとなり。鹽かきの夜も古來の季節かしらすといへ
ども、五月晦日なれば夏季に定て可南が句に沙汰し
侍る。

集の模様 (同)

去來曰。俳諧集の模様はやはり俳諧集のうちにて
作すべし。後あら野集の獻立を見て、師も我を折り
給ひき、かのづれく草は集め書の部になりて、歌

書の中に入すとかや。思ふべし。

俳書の名 (同)

先師曰。俳諧の書の名は和歌、詩文、史録、物語
等とたがひ、俳言有べしとなり。されば先師の名付
給ふを見るに、みなし栗、三日月日記、冬の日、ひさ
ご、猿みの、葛の松原、笈の小文みなそのおもむき
也。浪化集の時有機海となみ山と號す。先師曰。み
な和歌の名所なればまぎらはし、浪化集と呼べしと
也。魯町曰。浪化集と俳書の名、詩歌史文をわかつ
べからず。去來曰。されば浪化詩人ならば詩集なる
べし。俳諧者たれば見るより俳諧書といふ事あきら
けし。

宗因に感謝 (同)

先師常に曰。上に宗因なくんば、我々が俳諧今以
貞徳の涎をねぶるべし。宗因は此道の中興開山なり
と。

(四) 此項は「去來抄」の「修行歌」中の「魯町曰」の項の末段なり
(五) 板本に「上」の二字なし

也。

細き目に花見る人の頬はれて
なたね色なる袖の輪ちがひ
前句古代の人のありさまなり。

白粉をぬれども下地くろい顔
役者もやうの袖のたきもの
前句のさま今やうの女と見ゆ。

尼になるべき背のきぬく
月影に鑑とやらを見すかして
前句いかにも可然ものゝふの妻と見ゆ。

ふすまつかんで洗ふあぶら手
懸乞に戀のころを持せばや
前句町家のこしもとなどいふべきか。是をもて他は
なすらへてしらるべし。

儼 (同)

杜年曰。面影にて附ると云はいかゞ。去來曰。う
つりひゞき匂ひは附様の鹽梅也。おもかげは附やう
の事也。むかしはおほくは其事を直に附たり。それ

を面影にて附るといふは、

草庵にしばらく居ては打やぶり
いのちうれしき撰集の沙汰
初は和歌の奥儀はしらす候と附たり。

先師曰。前を西行能因などの境界と見たるがよし。
されど直に西行と附んは手づつならむ。たゞ面影に
て附べしとてかく直し給ひぬ。いかさま西行能因の
面影ならんとなり。又人を定ていふのみにあらず。
たとへば、

發心のはじめにこゆるすゞか山

内藏の頭かと呼ぶ人は誰ぞ

先師曰。いかさま誰ぞがおもかげならんとなり。

氣色 (同)

先師曰。氣色はいかほどつゞけてもよし。天象地
形人事草木魚虫鳥獸のあそべる其形容みなく氣色
也。

附物 (同)

これも又一句をあぐ。

うの花の絶間たゞかんやみの門 去 來

先師曰。句の位尋常ならずと也。去來曰。畢竟句
位は格の高きにあり。句中に理屈をいひ、或は物を
たくらべ、或はあたり合たる發句は位くだるもの也。

しをり、細み (同)

野明曰。句のしをり細みとはいかなるものにや。

去來曰。しをりは哀なる句にあらず。細みはたより
なき句にあらず。しをりは句の姿にあり。細みは句
のころにあり。是も證句をあげていはゞ、

十圍子も小粒になりぬ秋の風 許 六

先師曰。此句しをりあり。

鳥どもも寐入てゐるか余吾の海 路 通

先師曰。此句細みありと評し給ひしと也。

豫言 (同)

先師遷化の年、深川を出給ふ時、野坡問曰。俳諧
やはり今のごとく作し侍らんや。先師曰。しばらく

(一)「葉集」にこ
の「前段」を缺け
り。今「去來」
補抄」によりて
補ふ。

(二)寫本及び「猿
蓑」に「呼ぶ聲
はたれ」

(一)「葉集」にこ
の「前段」を缺け
り。今「去來」
補抄」によりて
補ふ。

(二)「葉集」にこ
の「前段」を缺け
り。今「去來」
補抄」によりて
補ふ。

先師曰。附物にて附る事當時好ずといへども、附
物にて附がたからんを、さつぱりと附物にて附たら
んは又手柄なるべし。

一卷一體ならざれ (同)

先師曰。一卷表より名殘迄一體ならんは見ぐるし
かるべし。

さび (同)

野明曰。句のさびはいかなる物にや。去來曰。さ
びは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。たとへ
ば老人の甲冑を帶し、戰場に働き、錦繡をかざり、
御宴に侍りても老の姿あるが如し。賑なる句にも靜
なる句にも有ものなり。たとへば、

花守や白きかしらをつきあはせ 去 來

先師曰。さび色能くあらはれたり。

位ある句 (同)

野明曰。句の位とはいかなるものにや。去來曰。

今の風なるべし。五七年も過はべらば又一變あらんと也。

長歌短歌

俳諧芭蕉談

丈草問。長歌短歌のこと深きわけ有ことにや。翁の曰。歌のことは我もとより是をしらず。わかき時に季吟に其事を尋しことあり。長歌短歌の事は深き訣も有まじ。然るを古今集に短歌の部と書て、後には歌奉りし時の目録の長歌、古歌にそへて奉れる長歌など、書しより、後人疑て不決。予は後來書寫の謬にて短歌と書たらんとおもふ。短歌は萬葉集に出たり。みな三十一字也。長歌といふは見ず。予思ふに上古の歌は皆今いふ長歌の體裁也。まれに三十一字の體あり。是れを短歌、或は反歌と書て、尋常の歌にわかつてり。しかれば長きは只作歌一首、或は二首と書て長歌といはずといへども、既に三十一字の短歌といへば、紛もなき長歌也。たとひ長歌の名目ありとも、歌毎に長歌々々とは書べからず。まして長歌と云は萬葉以後の名目とおもはる。三代集

以後代々の撰集にも、三十一字のを短歌と不書と同じかるべし。古の歌はみな長歌也。後の歌は短歌也。唐に古詩今體といふがごとし。貫之は此道の先達也。いかんぞ短歌の部と書て、詞書には長歌と云ふることを書んや。疑ひなき魯魚也。其誤りをそでてんとするにより、種々紛はしき説を付たり。清輔朝臣はひとり長きを短歌、三十一字を長歌と定めたり。其論穿鑿用ふべからず。

定家家隆を信ずるが故

(同)

正秀問。今の歌人専ら古今三代集を祖述する事をしる。然れども其詠する歌の、三代集を學ぶものに似ぬはいかなる事にや。翁云。我も其事はしらず。しかれども今の人の氣前をおもふに、定家家隆を信ずること、貫之躬恒にもまされる故ならんか。

貫之の好み

(同)

正秀問。古今集に、「空にしらね雪ぞ降ける」。「人にしらね花や咲らん」。「春にしらね花ぞ咲

なる」。一集に此三首を撰す。一集一作者にかやうの事例あるにや。翁云。貫之が好めることばと見えたり。かやうの事は今の人はきらふべきを、昔はきはすと見えたり。もろこしの詩にも左様の例あるにや。いつぞや丈草の物語に、杜子美に専ら其事あり。近き詩人の干鱗とやらの詩におほく有事とて、其詩も聞つれどわすれたり。

西行と實朝と

(同)

木節問。中頃の歌人は誰なるや。翁の云。西行と鎌倉の右大臣ならん。

流布の古今集

(同)

木節問。古今集は今流布する書正本なるや。翁云。定家卿以前の本が正本なりとみゆ。今の本は定家卿の添削多からんか。

六 義 (同)

或人間。古今集の序に六義を説。季吟俳諧に六義

をわかつ。其義あたれる事にや。翁云。およそ六義は詩のことなるを、和歌の義にしたるは詩歌一體の道理なれば尤なれども、いまだ六義経緯の説にあたらす。我季吟に此事を問しに、季吟云。道を述る爲の儲也と。去々年の頃、素堂に季吟の答を語りしに、素堂云。儲なりとは感すべき事也。凡六義をみな格別なりとおもへり。風雅頌の内に賦比興はある也。譬みな格別にて是を六くさに分つとも、引歌みな義にたがへりとみゆ。素より貫之以前にはこれを論ぜぬ事也。六義の細註も貫之の書たりといへり。此細註には本文を義にたがへるに似たりと云定たる説なきことを知べし。本和歌ならぬにより引あてたること甚かたし。わきて風雅の二は歌にては得分けがたかるべし。

亂きはまりて治に入る

(同)

素堂云。今の人歌をよむに、萬葉體とて信屈なることをよむ人あり。萬葉は詩の三百篇のごとし。後世の體裁おのづから別也。詩に古今の體あり。詩經

(一)「俳諧芭蕉談」には「或人間」の三字なし。今「葉集」に「葉集」に

の體又作る事も有べし。豈常に是を用ひて今體を廢せんや。これに依て見れば、専ら萬葉體をよめるは、時世の風俗をしらずとやいはん。古今集は今體に比すれば盛唐の風ありと云り。此體をぞ本とすべき。萬葉は其材を取る處也。其體裁のごときはことごとく習ふべきにあらずといはん。芭蕉曰。亂きはまりて治に入の謔ならんと。予此一言を感心す。

連歌と俳諧 (同)

素堂云。我翁にはじめて對面せし時、俳諧と連歌と心得いかゞすべきと問しに、翁云。連歌はやさしく歌の上下を分てり。一句／＼にこととゝのひたるをもつて、百韻千句も心をつらぬる也。故に聯の字義なり。俳諧は俚言にたはむれて、たゞに今日世俗の上なり。此一言にて我翁の俳諧を思ふに、翁の俳諧は心を用ゆる所さらにひとしからず。是を以て一家の一體とす。格はともひとし。連歌をひろめて、去嫌をやすくす。其心連歌は前句を放たすその理にこたへ、そのものにこたへて、さらに離れず。はせ

をの俳諧は前句の心を知て、ねばりを放つ、一句の物に感合す。ものゝ情をさぐり知て附れば、これを魂ともいはんか。

稽にも心を付けよ (同)

卯七一とせ上洛の頃

黃鳥も海むいてなけ須磨の浦

と翁の天津におはせし時に見せ申さんと、はじめ野坡に見せ侍りしに、野坡曰。「鶯も」とは重し。「よ」とあらばやすらかなるべしと。去來に見せしに、「も」の方よからんと云へり。天津にて先文章に見せしに、「よ」と云て安らかに聞え侍れど、「も」と云て人の聞前たしかなるべしとなり。其日翁に見せ申せしに、師曰。よく出來たり。「け」を「く」とし、「浦」を「里」とせば猶人の心に徹すべし。肩衣のゆがみを直し侍らば、袴にも心を付けて、扇をさして見給へと宜ひし、有がたき事也。

集の爲に卷をせず (同)

七ヶ條 (同)

一發句の姿は青柳の小雨にたれたるがごとくして折々微風のおやなすもをかし。附方はうす月の夜に梅の何所となく響るがごとく、竹林を隔てかすかに琴聲を聞がごとく、情は心裏の花をも尋ね、眞如の月をも観すべし。口は飛流のたゞちに下るがごとく句を吐べし。(此項組翁口訣末項と大同小異なり)

一 式は古式に倣へ。

一 手に葉は古書を見るべし。

一 古池等の句意を問しに、我句を人に説くは我頼がまぢを人に云がごとし。

一 會席等は一座の時宜にまかせよ。

一 見てよき書は何ならん。翁曰。見てあしき書とてはなし。儒佛より國書其外誦淨瑠璃本も見るべし。

一 他門と交りて苦しからずや。くるしからず。交りてあしきものは博奕とぬす人なるべし。

右七ヶ條は、北枝と翁の問答なり。

右七ヶ條は、北枝と翁の問答なり。

「一葉集」にこの項なし。今「去來抄」によりて補ふ。この項とや、似たるもの次に「俳諧芭蕉談」に「我ひとせ」

(一)「俳諧芭蕉談」に「或日の下に翁」の字なし

(二)「俳諧芭蕉談」にこの七ヶ條の前に「六月七日」と日附せるが、北枝の書簡を寫記せり。芭蕉殿に仰せし北枝に、芭蕉の教示あらば、求めたるに對する返書に、多少筆記せしむるものありしが、却して何れもふしめて送るといふ意なり

美濃の落椿が瓜島集出し侍らんと、師の發句にて歌仙一卷を初に載侍らんといひしに、翁の曰。我は集作らんとて卷をしたることなし。昔は撰集ありとて歌をよみし人あり。我俳諧はそれに異れり。

俳諧文 (同)

正秀問。師の書給へるを、俳諧文として學びてんや。師の曰。我俳諧文とて書たることなし。文の體は備へたる處あり。先哲の文を見るべし。今おほく狂文を見て俳諧文と思へり。左にはあらず。我は源氏、狹衣、土佐日記等みな俳諧文とおもへり。

芭蕉は達摩 (同)

(一) 或日、翁幻住庵にして終日文章に對して俳諧の物語有けり。正秀側にて是を聞に、一事として其意を會せず、其後龍が岡にまかりて其事を文章に問。文章云。我問處は言語の俳諧にあらず。禪の俳諧なり。正秀問。禪の俳諧とは如何。文章云。山は只青山。雲は只白雲。ばせをは實に達摩なるはと云り。

連併の別 (同)

〔一〕俳諧芭蕉談
此項前段は前
に出でし「連
歌と俳諧」の
項と大同小異
なり

〔二〕……の所「一
葉集」に「稻の
葉並の」とあり
り。されど「稻
の穂並の」を
よしとす

〔三〕俳諧芭蕉談
に「正秀」の二
字なし

正秀問。俳諧と連歌と心いかなるや。翁曰。誰の
人も先は言語委ちがひぬるごとく、連歌はやさしく、
歌の上下を分ち、一句／＼に事調ひたるをもて、百
韻千句と心をつらぬる聯の字義也。俳諧は俳言に戯
るゝ姿の變化、只に今日世俗の上にして、我俳諧は
心を用る處更にひとしからず。是を以て一體とす。
字義をよく味ふべし。格は中昔の俳諧にひとし。連
歌を極めて去きらひを易くす。其心連歌は前句を放
たず、其理にこたへ、其物にこたへて、更に放れず。
中むかしの俳諧も大かた此場をさらすして利口をか
まふ。我俳諧は前句の心を知てねばりをはなち、一
句の上物に感合す。物の情を探り知てさびしをり有
べし。先のうるはしき……朝日哉の巻にて、一
々申たる通り也。左はいへ連歌も上手は前句にしは
られず。

船つなくいかりのつなは波の上
海は千尋のそこもしられず

と付たるは、上下よみつゞけなりに、歌ながら上の
句下の句に其事別にて、のびたるをもて連歌とす。

あはひほどふる里のさびしさ

次／＼の祭りの目数さだまりて

といへるは勿論俳諧付ならんか。

秋よりのちの朝がほのいろ

例ならぬ身はすさまじきみだれ髪

と云るは、前句の朝顔にあらず。其心にこたへたる
所、にほひとやいはん。しかれば連併のさかひ、心
のむかひ處、今の俳諧の一體と知べし。正秀問。一
通りは斯聞え侍れど、更に分明ならず。翁曰。連歌
は歌に似れど、歌は歌の出所あり、連歌は連歌の出
處あり。其要たる黑白のかはり有て分明なるべし。
連歌士の俳諧をして俳諧に移らざるは、連歌を實に
捨やらぬ故なるべし。俳諧する者の連歌に似よりた
るは、實に俳諧を知らざる也。尤句ぶりは似もしつ
べし。似よらざる處思ひよすべし。

なた削して立る帆ばしら
といへる句に

〔一〕此段簡簡あら
ん

〔二〕「斧」の下に
「と」の一字を
加へて見るべ
し

〔三〕鬼貫が幻住庵
を訪へる事實
なきが如し。
「我に喰はせ」
の句は「禁足
の旅記」にあ
り。この旅記
は旅行せざる
旅記なり。一
項は不審の點
なきにあらね
ど探録したり
〔四〕我とは正秀な
り

さざなみにつら洗たる次郎助

と付しに、或人此句俳言もなし。「さざなみ」の五文
字にて連歌の心より出て、其心を用るの要たるや。
答。妄言にはよらず付たる也といひしに、然らば連歌
の言はかり用ひざるやと。答。なす人の心に尋ねべ
し。發句は殊に物をからねば雅にありて連併を、

花に吹風や柚木の斧の音

と云る句、俳諧に轉すべく、其事は「斧の音」とよ
みたるを、「よきの音」とよみたらば、俳諧になるべ
き也。又

神垣や内とも廣し夏の月

といへる句、俳諧の發句とす。此句俳諧にあらず。
「うちと」と「内ほか」と讀べきひとしき文字にし
て、心のむかひ所「うちほか」とおもひ出なば俳諧
なるべし。「うちと」とおもひ出なば連歌なるべし。
前の「斧」「よき」との字義の言語にあらず。心の出

所也。能心得べし。問。歌よめる人は詞やさしく好
めるゆへに、俳諧弱しといへり。翁の曰。さあらん。
俳諧の意をさとさずんば分明なるべからず。初より

俳諧より出なば歌の詞をかるとも俳諧なるべし。俳
諧とてあらけなき世俗の詞のみにはあらず。その強
弱になんぞ連歌俳諧を論ぜん。此境は俳諧より出る
あり。風雅より出るあり。すべて句々の心を味ひ見
給へ。世間を以て俳諧にあそぶ人あり。風雅を以て
俳諧にあそぶ人あり。此二ツ能々心得て無心所着の
場にあそび給へと也。

御膳がよいと (同)

泉の鬼貫東武行のつゐでとや、幻住庵に翁を訪ひ
申て、翁の先たのむ椎の木もの句を聞侍りて、爰に
此句有て作るべき句なしとて、

我に喰せ椎の木もあり夏木立

鬼貫

と作せり。翁の老鶯の脇ありて、兩吟半バ過けるに、
我文章とともに登山せり。二ノウラうつりの翁の句
に、

うす／＼と色を見せたる村紅葉

といへる句に、鬼貫

下手も上手も染やして居る

と附方あり、一句何の事なく染色におもひよせたる句作也。句作はむかしならねどこゝろはむかし也。翁曰。たゞ常の風情こそあらまほしけれとのたまひければ、鬼貫

田を刈あげて馬牽て行く

と附たり。翁云。句は勿論の場にして、稻をつけんとして馬を牽行、一句のことはり、理をとゞむる所、いまだはなれかねたりとありければ、鬼貫

田を刈あげて鳥啼なり

と云ければ、理はうすくなりて轉じたりと云べけれど、勿論の場ひとし。又轉をなすとてつがもなき物には轉すべからず。心を用ゆるの轉じ様あるべし。元より此所打こし景氣の見移りよからず、秋も三句終りぬれば、一ふし手柄こそあらまほしけれとのたまへば、鬼貫我に句をゆづりし故に、

よめりの沙汰もありてはづかし 正 秀

と附ければ、情を起したる意味ありて、ひゞきをなすといへども、句にあま味ありて、『はづかし』の詞あまりならんか。前のこんやは理より起り、是は場

「色」との二字
恐くは衍

「續猿蓑」に
あり。従ふべし

より出る所、はるかにまさりて心のむかひ所よしといへども、我俳諧ならずと嫌ひ給へり。文章しばらくして、

御膳がよいと松かぜのふく

は何事なく云捨たる一句、さらに前句にとりつかず、松風の吹なぐり捨たる一句の轉ありて、此松風に魂生ずべしとなり。鬼貫再吟して曰。始て俳諧無心所着の場をしりたりとて感吟せられたり。翌日我又登山して問。うす／＼と色と色を見せたる村紅葉也。しかるに「御膳がよいと松風の吹」とつがもなき附かたさらに不聞。きこゆるを以てよしとすといへる兼ての教に相違ならんか。翁曰。聞ゆるがよしといへるは教道の表なり。きこゆるがよしとて、前句を再言せば理をことはるならん。聞ゆるがよしとは、前句の魂をさぐりて、それをあらはす一句の風情なり。すべて見る人の長ヶ分程にして、雙の聞えぬにはあらざる也と。あと申、扱其日は下山しけり。しかるに去冬の頃里圃亭にての歌仙

砂を這ふ藜の中の蟻の聲 沾 圃

といふ句に

わかれを人が云出せば泣 里 圃

と附たり。此句の不聞により、翁に問たてまつりしに、翁の曰。此句前句にかゝはらず、心に答て感合すべし。砂を這ふ藜のうちの蟻は何方にてもあるべし。その心をとゞむる眼力、墓所と見付たる、是則愁をあらはす句也。前句の砂を這ふ藜の蟻の聲はたゞごととなれば、さらに一句に愁なし。故に、

火燵の火いけて勝手をしづませ 馬 寛

とその愁を場にこたへ、風情をあらはす也。前句を更にことはらず、たゞに一句立たる前の句の深情也。親類知音の心を附たるもやうなり。此句に、

一石ふみしからうすの米 沾 圃

と附たるは、愁は別を人が云出せば泣といへるに事濟み、火燵の火いけての一句を見る時は世話也。その世話なる模様をあらはし、その人の情を以、一石の米にあらはれたる身體也。かゝる所無念ならざるとするべし。此味ひ知る人は深く感じ、しらざる人はきこえぬといふべし。其聞へざるは見る人の長ヶ

分也。「御膳がよいと松風の吹」と云ふ付肌見付ざるがゆへに、きこえぬと云也。問。前の砂を這ふ藜の蟻の聲は場所墓原と見らるべし。うす／＼と色を見せたるむら紅葉は心をとゞむべき場は見へず、山野の景氣は中にこもれり。しかるに御膳がよいと打まかせては、取とむる所なしとおもはれ候はいかに。翁曰。その心をもとむる所、汝が心に響合はざるが故也。

ほろ／＼あへの膳にこぼるゝ

と云句に

ない袖をふつて見せたる物おもひ

とはいかにおもへる。「あへものちつて膳にこぼるゝ」とあらば、此ない袖出べきや。是心のとゞまる所、見るもの、眼力に有べし。ほろ／＼といへる詞より直に姿にあらはれて、浪人のむかしを忍ぶ物おもひとは見付たる、その詞の響合せし也。浪人といふては句はなにかすべし、つたなき一言に前句の人あらはして何を以句とせん。能味ひ知るべし。「うす／＼と色を見せたる村紅葉」とは秋も半バ過なる山

「世話」とは芝居の「時代物」の「世話」に同じ
「浪人」以下の文字簡簡あら

がたぐひしきりにもとめけるより、其旨にまかせ、序も素龍にゆづりければ調も無下に落ざりけり。今度土芳半殘等が生國の伊賀にて、撰なきはうらみなどつぶやきし故、後猿蓑とせんと、えらびかゝり侍れど、かの地にて集に出すべき巻なし。あわたゞしく巻したらんには、いかでか心に叶ひ侍らん。美濃の落椿が瓜島集作らんとおもひ立侍れど、其志遂ずして身まかりぬ。其集に贈らんとおもひ侍りたる巻あり。今度曲家亭の巻あり、かれこれ三四巻出すべしと、半殘土芳まで申置侍れど、發句は二百餘も有べし、春の日ほどの小冊なるべし。いづれ集は其風體を撰者の心に合體するをよしとす。萬葉をはじめ二十一代集の時は世の氣稟にまかせたる風體也。夫故古今新古今——其代々の風體を顯す也。此頃にて御撰びなきは、其風體のさだまらざる故也、取ならべたりとて集とは云べからず。夫は歌の事ばかりにいふことならず。俳諧とても同轍なるべし。然るに貞室の天海集のごとき玉に瓦の缺の交りたる、米に砂の交りたる、有雜無雜の集め書也。人の句々もらひ

集められたればとて、我好む一體極らざれば、何を以て風體とせん。只に我も集作れりと名聞の種なり。此類あまたあるべし。ゆめく、貞室を誹謗せるにあらす、人の上を以て教て二三子に示す也。問。しからば撰者其是非分明ならずして、これをよし、それをあしきと云べけんや。翁曰。其人の長ケ分にて、同じ位の句をよしとおもへるもあらん。夫はよしとおもへる句はよかるべからず、よからぬとおもふ句よかるべし、上品の句は心のとどかぬ故によからぬと捨べし。津々浦々遠境波濤のかぎり、もらひ集めて句々を取らべたりとて、いかでか集と云べけん。我後見の集は我家の俳諧の一體の姿にして、我心に應ぜざる句は一句ものせず。曠野集に貞室宗因等の句をのせたるは我家の俳諧の體なれば也。歎しきは俳諧の俚言なる故に文盲愚昧の者はやく口なれて、自己に俳諧をしれりとおもふものゝ多く出來侍らん衆俗の今日なれば、何とかすべけん。斯いへばとて他の人を輕しむるにあらず、我家の俳諧を説ん爲也。穴かしこ口をうつし給ふとなかれと、懇に語り給ふ。

一家を立てよ (同)

舍羅翁の病床に給仕し侍る時。問。家の集を見るべきは冬、春、阿羅野、猿みのなるべきや。又俳諧のたすけになるべき歌書は何れがよろしかるべきと。翁の曰。何にてもよろしかるべし。しかし我家の俳諧にもとめえたる處はもとむとも、我等が跡を口まねせんとおもふべからず。其故は古の歌人の歌書を手本にして、歌よみたる人なし。其時代々の風を考へ、其風を我物にして歌はよみたと見えたり。夫故に一家を立たり。古人の跡をまねて歌よみたる人はいつまでも尻馬にて、生涯我歌よみたる人なしと覺ゆ。我家の俳諧を學んとおもはゞ假にも狂すべからず。初心より上達まで歌書、又は物語等いづれの書たりとも見わたして家の風をうしなはず、尤句をこのむべし。

萬葉觀 (同)

季吟云。或時桃青申されけるは、萬葉集を周覽せ

二二「俳諧芭蕉談」に「舍羅」の二字なし。同書によれば野坡の物語を舍羅が筆記したる也。

二二「俳諧芭蕉談」に「季吟云」の三字なく。又「桃青亭」に「たらく」とあり。亭は恐くは予の誤ならん。

二二「俳諧世説」に「三項に分て

しに、全篇諸兄聊のえらび給ひたるものとは見えす。多くは其人々の家の集を後によせ集めたるものと見ゆ。此こと予が見識の及ぶ處にあらず。桃青が云事を聞てより、大に利をえたりと。季吟物がたり。葉堂より傳ふ。

金城の三俳人 (俳諧世説卷之三)

秋の坊は金城に名高き風流徳化の大隱者なり。祖翁湖南の幻住庵におはせし時、
我宿は蚊のちひさきを馳走なり
とのたまひて、一夜二夜假寝せしに、翁隱遁者の身の上のこと、無常迅速の誠などいと懇に物語りあり。麓まで見送り給ひて
やがて死ぬ氣しきは見えす蟬の聲
と一句の教誨ありしも、此時の事にこそ。

金城にて北枝と秋の坊とは殊更にむつまじき餘りに、獨鮎鱗首の争ひ絶す。おのづから申あしきやうにも見え侍るに、祖翁細道行脚の時、金城にしばらく杖を休め給ひ、北枝などにも對面ありしに、例の中をかしければ、此ことを北枝より秋の坊へ露ばか

りも告す。しばらくして秋の坊此ことを聞出し、いそぎ翁のやどりへまかりて、對面を遂げ、れども、猶北枝が告さることを甚憤りにくみて、北枝秋の坊會良など翁もろともに會したる席にても、其終日は北枝とは一向ものいはで有けるを、翁も啖ひ給ひて坊が氣象を稱し給ひけるとぞ。

牧童は北枝が兄にして才能をあらそはず。殊更同胞のあはれびと云、おのづから世の人のかゞみとも人々に愛せらる。昔は浪華なる梅翁の洒落をしたひ、後蕉翁の門に入て、翁も牧童はよきものなりとほめ給ひしをのこせ。生涯眠るをもてえものとす。常に曰。我むかし芭蕉の翁にまみへて、武の素堂が「浮葉卷葉此蓮風情過たらん」と云句の物語におよぶ。翁の曰。此句は此蓮と音に唱へたるがよしと示し給へり。其外は何事も覺えずとなん申しき。

かやつり草 (俳諧世説卷之四)

芭蕉翁北國行脚の時、北枝の案内にて野田の山本と云所を遊びありき給ふに、北枝かやつり草と申は

いかやうの物なりと翁に尋申せしに、翁そこらを探し給ひて、是ぞとてさし出し給ふ。其時北枝の句に翁にぞかやつり草を習ひけりかやうの即興體も又一格なるべきことなり。

形身乞はれて (同)

智月は江州大津の乙州が母にて、母子ともに風雅に遊びて蕉翁を師とす。ある時、翁に對面の席にて紙硯を翁の前に備へ、紙子の袖かきあはせて、我に形見となるべき物書て殘し給へと望れければ、翁うなづきながら、六十にちかき人に形見を乞れていと力なし。我先にしねと云ことにやと戯れ與じ給ふとぞ。

句空 (同)

句空は金城卯辰山に住して、庵を柳陰軒と云ふ。蕉門に深切の風士なり。抑蕉翁の門人となりて以來、朝夕翁を念じて三拜す。斯までに師の恩をわすれざるもの餘人にいまだ聞ず。翁も曾ていつくしみ給ひ、義仲寺にての旅寝の吟を句空が兼好の畫讃して

(一) 滑稽傳 芭蕉

の條中に「其後江戸に歸り深川芭蕉庵をふたむす。此時許六此むすにまみゆ。珍深川集の俳諧を撰す」とあり句及評語を擧げたり

秋のいろぬかみそ壺もなかりけり はせをとは殘されぬ。此句は兼好のつれづれ草に見へたる世を捨人は浮世の妄愚をはらひ捨て、棋杖瓶一つも持まじきものと云る心を取て、秋風吹盡て草木零落の時に至り、天地一點の塵埃なき斗蓋の身の氣散じを述給へるものならし。もとより此柳陰軒には旅寝の杖をとめ給ひ、いとむつまじくかたらひ給ふ。

ちる柳あるじも我も鐘を聞 芭蕉
藤咲て庵のやうになかりけり 句空
せつかくと床しがらせよ月の雨 同

梅員 (同、卷之五)

梅員は備前岡山の産にして、いとわかきより俳諧を好み、十七歳の頃ならん、山寺や只のさくらが二三本 梅員
蕉翁北國行脚の後、京にて此句を見せ申せしに、甚感じ給ふとぞ。其後翁ほどなく遷化ありし故に、此外翁の電覽を歷たる句なしと云ふ。

汐さしかる (歴代滑稽傳)

許六云。元祿五申の秋、難波の酒堂江戸に来て深川集の俳諧を撰す。乗掛の提灯しめす朝おろし 翁
汐さしかる星川の橋 翁
翁曰。愚老が俳諧四五年の後はみなかやうに成と申されけり。

大根引 (字陀法師)

鞍壺に小坊主のるや大根引 翁
許六云。師曰。大根引は題にならずとて、大根引といふことをと、前書に書て出されし云々。

點取 (同)

翁曰。誰もせまじきものは點取なりと、是をいましめ給ふ。まことに今日は誰をとり、明日は誰點と云て、其氣をかね、しかも我と我句のよしあしをしらす。本式をうしなふ。たとへば天竺に妻二人持た

(一) 去來の「文章」に「先師の言に……とありたまへり」と

るものあり。一人は若く、一人は年老たり。或時老たる妻の方へ行しに、老女の心をかねて黒き髪をぬく。又ある時わかき女房の許へゆきしに、又心かねて白髪をぬく。心多き故に我しらず法師になりたるよし。或書に出たり。是點取に及び本式をうしなふに似たり。勝ちたればとて上手にもあらず。負けたればとて下手にもあらず。只本式をわすれぬこそよけれ。孟子曰。富者不仁、仁者不富とあり。此心を能々心得べし。

壁 書 ()

- 一 席にして壁によりかゝり眠るべからず。
- 一 人のたばこ吞べからず。
- 一 我門の人は茶漬三石六斗喰さるうちは俳諧上手になるべからず。
- 一 無分別の場に句作あることをおもふべし。
- 一 右四ヶ條祖翁の壁書と云傳ふ。

文章を評す (風俗文選文章詠)

(二) 翁文章を宣ひしに、此僧此道にすゝみ學ばど、人の上にたゞんことを月をこゆべからずとなり。

句案の法 ()

翁曰。句と身と一枚に成て案すべしと示し給ふ。

許六の談 (俳諧問答卷之二、自讃之論之上)

(三) 許六云。元祿五、七月東武におもむく時、翁に對面せんことを悦ぶ。橋町より深川ばせを庵を再興して入給ふ年なり。江戸着の日數經ず、桃隣手引して八月九日深川の庵をたゞき、師弟の契約のはじめなり。一座に嵐蘭桃隣淨求法師なり。桃隣いひけるは、翁へ發句持參あるべしといふにまかせ、桃隣執筆して四五句始て呈す。

七月十四日の夜島田金谷の送り火を見て

感をます。

聖靈となりて越けり大井川

十圍子も小粒になりぬ秋の風

かけはしのおぶなげもなし蜘蛛の聲

(二) 「予」とは許六なり

我跡へいぐち立よるしみづかな

この外もありしを失念。

師見終て曰。就中宇都の山の句大きに出来たり。其外清水棧の句もよしと數篇感ぜられたり。大井川の句は其時少し加筆あり。略す。予つく／＼不審を生ず。再篇聞かへし、宇都の山の句よく侍るやといへば、なるほどよしといへり。予が聞かへしたる事を不審におもひ給ふや。翁の曰。許六は愚老に對面し給はざる以前、愚老が門弟に對面し給ふやと問給ふ。予が云。しからず。尙白に二度對しける後は、ひたすら曠野猿蓑の二集に眼をさらし、晝夜句を探ることひまなし。少し探り當たりと思へば、跡より師の吟じ出し給ふ句大きに相違せり。其風探りみれば、又跡の句似たる形もなし。晝夜吟賜を断て、やう／＼此うつ山の句をえたり。此句二十句ばかり仕直し、二日案じ煩て後に『小粒になりぬ』と云ことを取出したりと答ふ。師曰。先達て尙白問答一々聞たり。今日許子の句を見るに、専ら選集にて眼をさらしたる事明なり。愚老が魂を集にて探り當たる

(三) 自讃之論之上に「許子の句を見る」とありとあれど、今一葉集に從ふ

人は、門弟子に許子一人なり、晝夜此魂を門弟子に説といへども通じがたし。愚老が本望今日達せりとて大きに悦び給へり。選集を見ること許子に及ぶ人有まじと返す／＼稱し給へり。予いよ／＼不審出来ぬ。つく／＼思ふに、俳諧はいひ勝と平吞にのみ切て居る時、師曰。許子が俳諧と晋子が俳諧とは符合せず。愚老が俳諧と許子が俳諧とは符合すといへり。此一言に力をえて懺悔す。予云。されば今日對面のはじめより予が心中大に迷へり。此一言に依て少し力をえたり。予高翁に對面せざる以前、晋子が方へこのごろ點を乞ふ句百四五十あり。予がよしと思ふ句には點まれにして、云捨の句に褒美の點あり。今日師の感じ給ふ句大かた一點の句なり。然る處に師ことの外に感じ給ふ。予不審こゝにあり。師の高弟は晋子なり。師弟の胸旨かやうにかはりては、たのもしからず。畢竟俳諧はいひ勝と決定し侍るなり。又問て云。予が俳諧と晋子が俳諧と符合せざるを、并師の風雅と予が風雅と符合せし事を述て不審を明し給へといへば、師曰。許子俳諧をすき出る時、閑

寂にして山林にこもる心地することを悦び、元來俳諧數寄ならずやといへり。答云。しかり。師もすく處斯のごとし。晋子がすく處は此おもむきにあらず。俳諧は伊達風流にして、作意のはたらき面白きものと、すき出たる違ひなり。故に晋子と許子と符合せざるといへり。始て眼をひらき、一言に依て筋骨に石針のごとし。又問ふ。師と晋子と師弟はいづれの處を教へ習ひ得たりといはん。答曰。予が風、閑寂を好ではそし。晋子が風、伊達を好で細し。此細き所師の流なり。爰に符合すといへり。これを感ず。又問曰。予が探り當たる處、眞の俳諧の血脈に侍るやといへば、此所毛頭うたがひ有べからず。心を正しくして俗をはなれ、外なしといへり。其日は退去す。其後予が旅亭に招たる時、師の雜談に曰。愚老許子に對して予が多年の大望を遂たり。嵐蘭子曰。いづれの道か叶ひ侍るといへば、師の曰。われ國々の人に對して俳諧の器をもとむ。求めえて直指の法を附すべきと思ふこと日々に有。今撰集を見て予が腹を探り得たる人は許子なり。千歳の後も許子がごとき

二「自讃之論之上」に「伊達を好で太し」とあれど、今「葉集」に従ふ

三「自讃之論之上」に「財寶まで欲」とあれど、今「葉集」に従ふ

人世に有まじきとも思はず。さればしひて器をもとむることを止たり。今日の望は性痴にして、多年大に執心をかけるといへども、曾て動かさる人有べし。是は愚老がたすけにあはざれば、道に入がたし。器のすぐれたるものは、獨教へずして至るといへり。許子が本性を見るに、愚老がもとむる處に大かた叶ふ人なりといへり。嵐蘭が曰。その事いぶかし、一々論じ給へ。師曰。

- 一、器のすぐれたるもの第一。
- 一、此道に執心にして寢食をわすれ、財寶色欲にかへる人。
- 一、歳四十を越えざる人。
- 一、いとま有る身にあらざれば、道は行ひがたし。
- 一、貧賤にして朝夕に苦しめる人ならず。富貴にあらずといへども、商賣農土に穢れず。
- 一、博識にあらずとも、和漢の文字にともしからぬ人。珍碩がごとき人にあらず。

是六ツなり。此六ツのもの揃へる人まれなり。二ツ三は兼るといへども、六の品具足したる人はまれな

りといへり。師の曰。第一手筋よし器よしといへども、手筋あしきはならず。速に此度俳諧の底をぬかせんといへり。門弟の中に底をぬくものなし。あらゆるの時をえたりといへども、ひさごに底を入れられ、瓢は猿みのに底ありて古今を隔らる。底のぬけたるものは新古の差別なし。きのふけふ又あすと流行して、一日もあしを止すといへり。その冬の頃、愚句、寒菊の隣もありやいけ大根といふ句せし時、酒堂が句に

鶏や憎たく夜の火のあかり
と時を同じう侍る。此兩句翁の論じて曰。世間俳諧をするもの、此場所に至て案するものなしと稱し給ふ。予云。我久しく色々の風を學ぶ故に、古き場、新しき場はたしかに覺ゆるなり。此場所より外に案出す所はなし。然れども能句まれなるをなげくといへば、師の曰。好悪は時のよろしきにつくと示し給へり。又曰。愚老が俳諧は五歌仙に至らざる人、一生成就せず。大事なり。覺悟せよといへり。予師と俳諧する事、全篇たしかに成就する卷二、歌仙半分

二「自讃之論之上」に「予俳諧とす」とあれど、今「葉集」に従ふ

にみてざる卷二、以上四卷なり。師曰。愚老相手となりて俳諧すること三四度なり。いつとても誰々と俳諧するはかやうのものと、容易に思ふことなかれ。眞の俳諧を傳る時は、われ骨髄より油を出だす。必しあだにおもふことなかれと、大に恩を示されたり。その正月、予が亡母の七年追悼に至る。心易き相手もとめて歌仙一卷終る。成て師に呈す。師是を讀て且悦び且稱す。予が云。師の流、此歌仙の外にあらば、予が俳諧終に本意を遂ることあたはずといへば、師の曰。全くこれなり。うたがひ侍ることなかれと大に感じたまへり。其後三月盡の日より卯月三四日まで予が宅に入て逗留し給ふ。晝夜俳諧をきく。其時翁の曰。明日更衣なり。句有べし。聞かんといへり。かしこまりて三四句吐出すといへども、師の意に叶はず。師の曰。當時諸門弟并他門ともに俳諧たしかにして、疊の上に座し、釘錠をもつて堅くしめたるがごとし。是名人の遊ぶ所にあらず。許子が案る處も是なり。風雅の外に子がえたる藝能を察せよ。名人は危き處に遊ぶ。俳諧猶かくのごとし。

〔一〕自謙之論之上に「師」とあれど、今「葉集」に從ふ。

仕損じまじき心あくまで有り。是下手の心にして、上手の勝にあらず。予が常歳且年々や猿にきせたる猿の面

と云ふ句全く仕損じの句也。ふと歳且に猿の面よかるべしとおもふ心一にして、取合せたればしそんじの句也。予が云。名人の師の上にも仕損有や。答曰。毎句あり。予此言を聞て言下に大悟す。おそらくは向後、予が句仕損の場所ならは一句も有まじ。聞給へと廣言をはなつ。予あやうきつり合は探り當たりといへども、心中仕損すまじき心あくまで有。此一言に依て仕損する處を決定せり。時に、

人先に醫者の給やころもがへ

と云ふ句即時にいひ出す。師掌を打て曰。奇也。妙也。俳諧の底此句にてぬけたり。一言下に悟するものはあれども、一言下に句をするものはなしと感ぜられたり。此句秀たる句にあらずといへども、血脈の正しき所より出で、第一更衣に氣をよく付て人の及ばざる處を感ぜられたり。其角に語れば晋子も能聞て、氣のよく付たる所を感じ、則句兄弟に入る

べしとて書付たり。

郭公と驚ど〔三〕(篇突)

師曰。郭公は云あてる事も有べし、うぐひすは中々なりがたかるべしといへり。

一夏一句〔同〕

唇に墨つく兒のすゞみかな

千 那

師曰。涼みと云ふ句人々よく云なぐりて置侍れども、これは大切なる所を本意とする題にて、中々いひ課せがたからん。わづかなる所に手柄をあらはし侍るこそ、涼みの情なれとて、兒の涼みは一夏一句と感じ給へるなり。

未來記〔同〕

亡師ひそかに未來記の一言あり。吾滅後、門葉の輩集作ること定て初心の手にわたるべし。見よ〳〵十年を過べからずといへり。今我々が集作ること、未來記の中の一言いとばつかし。

〔三〕自謙之論之上に「更衣」に「氣を寄よく付て」とあれど、今「葉集」に從ふ。
〔四〕篇突に「師曰」の二字なし。此説は許六の見なり。
〔五〕同に「兒の涼は師も」とあり

二十五條 ()

- 一、霞は朝うすく夕に深し。
- 一、霧は朝深く夕にうすし。
- 一、雲は朝立て夕に歸る。
- 一、春風は朝に寒し。
- 一、秋風は夕に寒し。
- 一、夏は野山深し。
- 一、冬は野山浅し。
- 一、春雨はさうんしくねぶし。
- 一、五月雨は降つゞき、きたなし。
- 一、夕立はさめたるもの。
- 一、秋の雨はあはれるもの。
- 一、霧は夏のもの。
- 一、水けぶりは冬のもの。
- 一、川音は晝靜に、夜さわがし。
- 一、海の音は晝さはがしく、夜靜也。
- 一、草うつぶきて雨を知。
- 一、草なびきて風を知。

- 一、木の花は朝に咲。
- 一、草の花は夕に咲。
- 一、淡雪は春なるべし。
- 一、翡翠は夏なるべし。
- 一、上弦は七日八日頃の月。
- 一、下弦は廿三夜頃の月。
- 一、法樂は寺社に納めず、此方にて手向るを云。
- 一、奉納は則寺社に納ること也。

右二十五條芭蕉翁の口授と云。

路通はいづれの所の人なることをしらす。若かりし頃、放逸のあまり、既に人の軒の下に臥たりしを、翁近江行脚の時、道の側にもいひ、不圖風流の談に及ぶ。幼きより好みし腰折なればとて、一首の歌を扇に書て翁に呈す。書もいやしからずして、

露と見るうき世を旅のまゝならば
いづこも草のまくらならまし

翁嘆じて曰。我いまだ君家につかへし時、洛の季

吟の歌枕をたゞき、敷島の道にいざなはれしに、今は俳諧のみじかきに遊んで、生涯のたのしびとす。汝我に従て来るべしと、師弟のあはれび深く、其より路通の名をば與へられける。

其角の夢 (雑談集)

其角云。貞享乙丑年九月十四日の曉の夢に、鶴岡へ詣待ると覺えて、其身ひら包首にかけ、菅笠手に持て、段かづらの下道、ならびの松を見あげゆくまゝ、沖の方しきりに時雨來て、はやく拜殿にはしりつきたれば、社人立騒ぎて薙さしおろす。其部はむさう屏風と云物をたゞみたるやうに有けるが、はら／＼とさしおろす。其かげによりて、雨しのぎたるさまを、社人見とがめて、とく出よとせめながら、時に取ての氣しき、一句つかうまつらばゆるし侍らめと、つぶやく。あはれ爰にてこそと、夢ごとろにおもしろく、海見やらるゝ松の葉末に、由井の濱風吹わたり、波と空とのわかるゝやうに思ひなして、松原のすき間を見する時雨かな

と申出れば、社人しわめる顔にて吟じかへし、當意よろしく、神もさこそは。とうなづきぬとおぼえて夢さめたり。明れば十五日の朝、深川の八幡宮に詣待る序、芭蕉庵を訪て、ありし夢に申侍りと語りければ、現には斯る口きよき姿は及ぶまじきをと申されたり。たましひの遊ぶ處、まことに虚靈不味なることをしる。

更科の吟 (同)

其角云。翁北國行脚の頃、更科の三句を書とめ、いづれかと申されしに、
佛や嫉ひとり泣く月の友
といふ句を然るべきに定たり、と申ければ、まことしかなり。一句人目にはたゞ侍れども、其夜の月の天心に至る處、人の知ることまれなり。と悦び申されけり。

伊勢の蟹 (同)

其角云。伊勢のあまの貝取るには、おのが子を舟

にのせて、をとこに漕せて出るなり。さてかづきに入てほどへぬれば、其子の乳をこうて、泣聲の底に聞ゆるに、やがてうかみて、からき息をも吹あへず、舷に手をかけて、乳房さし入てはごくみける。此有さままことに仁心の發動せる所なれども、一句にいひとることのかたきなり。と翁の雜談を承りければ、露沾公にて

うき草をつかねて枕さだめけり といふに
蟹の子なれば舟に乳をのむ

と付たれども、三才圖彙の繪など見るやうにて、さのみ一句の感賞にも及ばずなりにけり。附句は殊更時のよろしきをうかゞひぬべし。西尾張にて、

宮守が油さげゆく小夜ふけて
と云句を付合せられければ、熱田の宮のいまだ造營なかりし年にて、人々の心も神さびたる折ふしに叶ひて、みな俳諧のまなこを付かへしは、冬の日と云五歌仙にてひゞらき侍り。

車庸云。漕ゆく船のあと見ゆるまで」といへるは、花多して、實すくなしとや。されば俳諧も詞粧ふのみにて、其一すぢにいへることかたしとは、蕉翁の云へる也。

平話の新しき (けふの世)

朱拙曰。詞以舊可用、情以新爲先。定家卿はしめしたまひ、山谷は換骨奪胎の法を立たるに、誰かつたへし、俳諧は平話の新しきを本意として、あながち古人のことばを用ひずと、芭蕉庵の示されしとて、窮巷僻地には、傾冶の艶言、舞妓の荒唐、俚語俗詞ならねば、俳諧ならず。と此筋の魔境におちいるもの多し。もとより此道は俗によつて眞趣をたのしむ事なれば、いづれを是とし、いづれを非とせん。しかもひたぶる古へにのみ拘らば、詞はあたらしくとも、情致はふるびぬべし。

讚 (雑言物語)

翁一とせ熱田にて例の積聚さし出て薬の事醫師起

「一筋にいひいぞ」(己が光序文)
「一」とせ此所にて」とあり

倒子三節にいひつかはすとて、

葉のむさらでも霜の枕かな

其起倒子が許にて盤齋老人のうしろむける自畫の像に

團扇もてあふがん人のうしろつき芭蕉

と書て贈り給ふ。又貞徳宗鑑守武の畫像に、東藤子讚を乞けるに、何を季に、なにを題に、むづかしの讚や。とをみ給ひ、やがて書てたびけり。其句。其詞書。

三翁は風雅の天工をうけて、心匠を万歳に傳ふ。此かげに遊ばんもの、誰か俳言をあふがざらんや。
月花の是やまことのあるじ達

長雪隠

(一)和漢文藻所載丈草の「三上辯」にや、似たる文字あり
(二)俳諧猿舞師は史邦門人種文の撰なり

翁ある御方にて、會なかばに席を立て、長雪隠をせられけるを、いく度もめし出けるに、やゝへて手洗ひ、口そゝぎて、咲て曰。人間五十年といへり。我二十五年をば後架にながらへたるなり。云々。

牛房くさき

古翁ある時宜ひけるは、史子、我道は牛房の牛房くさきをもつてよしとするに比せり。是をしれりや、と仰られし返しに、

上下や下は紙子のはら背負 史邦

其後、人々此心を尋ねられしかば、師の道は信を以てものにむかふ。物また信に應ずるなり。と答申しけるとかや。

果報いみじき工藤

三河の新城にて支考桃隣も同座せられけるに、白雪問。古事は何とつかひ候て新しめ候やらん。翁曰。ある歌仙に

薦かぶり居る北の橋詰

祐經は武運のつよき男にて

敵打のあらまし事、かゝるけいやうも有ぬべし。多くの年月ねらひけるに、果報いみじき工藤なり。建久四年五月廿八日まで生のびぬ。とをかしがり給

ひしが、是さへ形見となる。句主は誰ともしらず。

俳者、名人 (俳諧問答卷之一、答許子問辨)

むかし先師凡兆に告て曰。一世のうちに秀逸の句三五あらん人は俳者也。十句に及ばん人は名人たり。

よき挨拶 (同、卷之四、自得發明辨)

許六云。洛の和及が弟子何某といへるもの来て、予と俳諧せんことを望む。其時

都人の扇にかける網代かな

と云ふ句せし也。都人の挨拶に、扇はよき噂とおもひて、冬の頃なれども取合侍る也。此句翁に語り侍りしに、よき挨拶の仕様なりと感じ給ふ也。

發句と平句 (同、卷之五、同門評判)

許六乙州を評したる中に、「發句に目立たる事は一卷のおくまでも遠慮すべき事なりと師説。」と記せり

歳旦 (同)

(三)俳諧猿舞師

許六、正秀を評したる中に、「その上歳旦の句三句いたしたり。一句の外はせぬ事と師説に聞置ぬ。」と記せり。

又 (同卷之四、自得發明辨)

當時歳旦の發句と稱して、歳旦にてなき句大分有。師の云。歳旦といふは、元日明わたりたる時の事也。大方歳旦の句にてはなしといへり。

自慢 (同)

許六云。一とせ江戸にて何がしが歳旦びらきとて翁を招きたることあり。予が宅に四五日逗留の後に侍る。其日雪降て暮にまゐられたり。其はいかに、

人聲の沖にて何を呼やらん 桃隣

鼠は舟をきしる曉 翁

予其後、芭蕉庵へ参とぶらひける時、此句をかたり出し給ふに、予が云。さて、此曉の一字ありがたき事、あだに聞かんは無念の次第也。動ざること

大山のごとし。と申せば、師起上りて曰。此曉の一字聞と受け侍りて、愚老が満足かぎりなし。此句はじめは、

須磨の鼠の舟きしるおと

と案じける時、前句に聲の一字有て、音の字ならず、依て作りかへたり。須磨の鼠とまでは氣を廻し侍れども、一句連続せざるといへり。予が云。是須磨の鼠よりはるかにまされり。勿論須磨の鼠も新しく覺え侍れども、舟きしる音と云下の七文字後れたり。上の七文字首尾調はず。曉の一字つよきこと、たとへ侍るものなし。と申せば、師もうれしく思はれけん、これほどに聞てくれる人なし。只予が口よりいひ出せば、肝をつぶしたる顔のみにて、善惡の差別もなく、鮎の泥に酔たるがごとし。其夜此句したる時、一座のものどもに、我遅參の罪ありといへども此句にて腹をいせよ。と自慢せしと宣ひ侍る。

鱈舟と下京と (同)

許六云。五文字の居らざる句、人持來りて五文字

を頼むといふと。李由が句に、

「比良より北は雪げしき」と云ふ句に久しく五文字なし。予翁に尋侍る時、早速「鱈舟や」と云ふ五文字は居へ給へり。此句門人たる人しらぬはなし。此時師の曰。凡兆が句に、

「雪つむ上の夜の雨」と云ふ句に五文字を頼む。

情を費して案じ出して「下京や」と云ふ五文字を居たりと語り給ふ。同じ五文字を居給ふに、容易に出ると出ざるとはいかなる子細なるべしと思ひしに、愚退て發明するに、鱈舟と云ふ五文字は取合せ物なり。下京と云ふ五文字には例の翁の血脈を入られたり。二つの五文字、同じ事と思ふ人は、五文字置く事は成るまじき也。

首さし入れざれ ()

惟然云。ある時翁申されしは、懐に首さし入てよき句はなしとなり。時にとりてのしめしなれば一向に云ふべきにあらねども、思ひ合する事ども多しとぞ。

俳諧も面倒 ()

惟然云。風雅は言句の外にあらんや。又風雅にして風雅ならぬさかひ有べしや。と尋ね侍るに、翁曰。わづかに句の姿にわたりていはゞ、句に残して俳にたちなん事さも有べし。されば風雅々々と我も人も申せども、多くは其心得がたからんにや。俳諧なども生涯の道の草にして、めんどろなものなり。と申されし。いかなる故のあるやらんしらす。只予がわづかにきゝえし處のみ殊勝におぼえて、はな紙のはしに書て覺ると也。

來者を恐る (菊の香序文)

風國云。ばせを庵の先生、一日門人に對せられて曰。今の風體を以、故人のいたされし所を見るに、其趣向作意既にもとむるにたやすし。又我々が今もてあそびて情志をたのしましむる境も、亦さぞしかなりゆくべし。後世何ものか出で、いかなるあたらしみをや探り出すべき。我は只來者をおそるゝこ

とばかりとぞ。

誠 (三冊子、白双紙)

土芳云。師の俳諧は名むかしの名にして、むかしの俳諧にあらず、誠の俳諧也。されば俳諧の名有て其物に誠無が如く、代々むなしく押移る事いかにぞや。師も此道に古人なしと云へり。又故人の筋を見れば求るにやすし。今おもふ所の境も此後何もの出て是を見ん。我是たゞ來者を恐ると返々詞有。むかしより詩歌に名ある人多し。みな其誠より出て誠をたどるなり。我師はまことなきものに誠をそなへ、永く世の先達となる。まことに代々久しく過て、此時俳諧に誠を得ること、天まさに此人の腹を待る也。

俳諧の手本 (同)

名にめで、おれるばかりぞをみなへし
われ落にきと人にかたるな

此歌僧正遍昭さが野の落馬の時よめるなり。俳諧の手本なり。ことばいやしからず、心されたるを上

三冊子「は土
芳の筆記にし
て書中多く芭
蕉の説示を録
せるなり。時
として芭蕉の
説か土芳の
見か判別に苦
しむものあり

三冊子「は土
芳の筆記にし
て書中多く芭
蕉の説示を録
せるなり。時
として芭蕉の
説か土芳の
見か判別に苦
しむものあり

の句とし、詞いやしう心されざるを下の句とするなり。先師の曰。いにしへの俳諧歌雜體あまたなれども、まめやかにおもひ入たる體、

おもふてふ人のこころのくまごに
立かくれつゝ見るよしもがな
冬ながら春のとなりのちかければ
なか垣よりぞ花は咲ける

連歌と俳諧と (同)

又曰。春雨の柳は全體連歌なり。田にしとる鳥は全く俳諧なり。さみだれに鳩の浮巢を見に行と云句は、詞に俳諧なし。浮巢を見にゆかんと云處俳なり。又「霜月や鶴のつく／＼ならびて」と云發句に、「冬の朝日のあはれなりけり」と云ふ脇は、心詞とも俳なし。發句をうけて一首のごとくなしたる處俳諧なり。詞に有んに有。其外此句の類作意に有信所。一筋におもふべからずとなり。

俳諧は至らずといふ所なし (同)

土芳云。詩歌連俳はともに風雅なり。上三の物は餘す處もあり、其あます處まで俳諧は至らずといふ所なし。花に啼く鶯も餅に糞する縁の先と、まだ正月もをかしき此頃を見とめ。又水にすむ蛙も古池に飛こむ水の音と云はなして、草にあれたる中より蛙のはいるひゞきに俳諧を聞付たり。見るにあり、聞に有、作者感ずるや句となる所は則俳諧の誠なり。

式 (同)

俳諧の式の事は連歌の式より倣て先達の沙汰しけるなり。連歌に新式あり、追加ともに二條良基撰政作之。今案は一條禪閣の作。此三を一部としたるは宵柏の作となり。連に三と數あるものは四とし、七句去ものは五句となし、よろづ俳諧なれば事をやすく沙汰しけるとなり。今案の追加に漢和の法あり。是を大やう俳諧の法とむかしよりするなり。貞徳の差合の書、其外其書世に多し。其事を問ば、師信用しがたしと云り。其中に俳無言と云あり。大やうよろしと云り。差合の事もなくては調ひがたし。師の

三冊子に「甚つ、む所也」とあり

詞に有んに「解し得ず」
三冊子に「土芳云」の三字なし
同「あり」の一字なし
「葉集」に從ふ

門に其一書あれかしといへば、甚慎む處なり。法を置と云ことは重き處なり。されども花のもとなどはるゝ名あれば、其法立すしては其名の詮なし。代々あまた出侍れど、人用ひざれば何の爲ぞや。法を出して私に是を守れとははづかしき所なり。差合の事は時宜にもよるべし。先は大かたにしてよろしとなり。但志ある門弟は、直に談じて信用して書留るもの、ひそかに我門の法ともなさばなすべし。

戀のこと (同)

戀のことを先師曰。むかしより二句結ざれば用ひざるなり。昔の句は戀の詞を兼て集め置、其詞をつゞり句となして、心の戀の誠をおもはざるなり。今思ふ所は、戀別して大切のことなり。なすに安からず。そのかみ宗砌宗祇の頃まで、一句にて止こと例なきにもあらず。此後所々門人ども談して一句にて置べきこともあらんかとなり。又或時曰。前句戀とも戀ならずとも片付がたき句ある時は、必戀の句を付て前句ともに戀になすべしとなり。是には此句の

みにてつゞいて戀にも及べからず。新式にも此沙汰あるよしなり。しかれども戀のことは、分て其座の宗匠にまかすべしとなり。

旅の句 (同)

旅の事或俳書に師の曰。連歌に旅の句三句つゞき二句にてするよし。多くゆるすは神祇釋教戀無常の句、旅にてはなるゝ處おほし。今旅戀難所にして又一ふし此處に有る。旅體の句はたとひ田舎にてするとも、心を都にして相坂をこえ、淀の川舟に乗心得、都の便り求める心など本意とすべしとは連の教なりとあり。

旅行の必要 (同)

又、旅、東海道の一すぢもしらぬ人、風雅に覺束なしとも云へりとあり。

本歌取り (同)

本歌を用ること新式に云。新古今以來の作者を用

ふべからずとなり。八代集は古今、後撰、拾遺、後
拾遺、金葉、詞花、千載、新古今これなり。後土御門
依勅、新勅撰、續後撰二代を加て十代集を本歌にと
る。又堀川兩度の作者までの歌は十代の外の集たり
とも、たとひ集に入ぬ歌なりとも、作者の吟味これ
あるかと云也。

等 類 (同)

等類の事おろそかにすべからず。師の曰。他の句
より先我句に我が句等類することをしらぬものな
り。よくおもひ別て味べし。もしわが句に障る他の
句ある時は、必わが句を引べし。趣向に表と裏の事
あり。句にもよるべしとはいひながら、大やうのが
して等類になさず、取べし。古き連歌に、「おもはぬ
方にちらす玉章」と云ふ前句に、「山風や枝なき花を
おくるらん」とあり。此句山風の枝なき花をおくる
こそ、全くちりたる體、前句同意の連歌と沙汰しけ
るよしあり。又いはく。

宮古をばかすみとゝもに出しかど

あき風ぞふくしら河のせき

みやこにはまだ青葉にて見しかども
もみち散しくしら河のせき

此歌のこと、古より色をわかちたる作意によりて、
等類のがれたると云來るなり。さも有べし。今師の
おもふ處、後の歌卯月頃都を出て、十月に及びしら
河に至り、もみちの散しきたるを見て、前の能因法
師の歌を思ひ出し、いよ／＼我歌の妙所を感得した
りといふ心よりよめる歌なるべし。是にて等類能く
のがるゝと云へり。

初心のまどひとならむ (同)

師の曰。切字のことむかしより用ひ來る文字ども
用べし。連俳の書に委しくある事なり。切字なくて
は發句の姿にあらず、付句の體なり。切字を加へて
も、付句の姿ある句あり。まことに切たる句にあら
ず。又切字なくてもきれる句有り。其分別切字の第
一なり。其位は自然としらざれば知がたし。猶口傳

あり。師常に道を大切にして示されしなり。

阿古久曾の心はしらすうめの花

と云ふ句をして、切字を入ることを案じられし。側
に人ありて、此句は切字なくてきるゝやうに待ると
云へば、切るゝ也。されどもきれ字はたしかに入た
るよし。初心の人の道のまどひに成て悪し。常に慎
むべし。ましてさせる事もなき句は、思ひやむとも
常にたしなむべし。と示されしなり。

文章論 (同)

文章の事師の曰。物名を文章と云なり。序に由序
來序内序と云三體あり。由は起るよしを書、來は是
より先の事を書、内は其書の内の事を書くなり。此
三體を一にして序一ツにも書るなり。跋はふみとゞ
まるなり。序有て跋あり。序も跋も其いふ所同じ。
跋は序を猶委しく云たるものなり。ふみとまりて委
しくするの心なり。序跋ともに年號月を書。五字七
字書は長歌の格なり。七五三などゝ地の詞亂に書。
或は對ある時は必對を置。古事を置時は古事の對。

懷 紙 (同)

懷紙の事は、百韻本式なり。五十韻歌仙みな略の
物なり。連歌の古式は表十句、名殘の裏六句、月七句
去、花裏表に一本づゝ、表の内名所必一あり。今も
清水連歌はかくのごとしとなり。師の曰。古法表十
句の例を守て、八句の後二句過るまで、表にきらふ
物の類、連歌に今にせず、俳諧には苦しからず。連
歌に龍虎鬼女さし出たる類、表の内を嫌ふ。俳諧に
も鬼女はなりがたし。龍虎は苦しからず。其外人を
殺す、きる、しばる、などの類は用捨すべし。百韻
一所に過べからずと師の云なり。

表のうち (同)

又戀の詞述懐の類祝言に云たる句は、表の内いか
と侍らんと尋る時、師曰。句によるべし。文字はく
るしからず。祝言にいひなすとも、人の上に云は
いよ／＼述懐なり。花のさびしきの類は苦しから
ず。くづれし壁にさがる夕がほなど、全くの貧家
を移す句は用捨すべし。他人の句はとがむまじとな
り。

嫌ふ事 (同)

又戀無常、其外きらふ古事本説を下心に於て表に
あらはさず、又他物の上にかり用ひたるなどの句の
類、いかゞ侍らんと云へば、師の曰。大かたは表に
きらふべし。事にもよるべきことながら、いづれと
ても心嫌ひなり。詞に出さずして、心の下にきらふ
事を持たるは、作者滑からず心きたなし。一向に打
出ていひたる方しかるべし。されども表の體にあら
ざれば常に苦しからず。打出せと云にはあらずとい

へり。

人名 (同)

又古今の人の名おもてに出すこといかゞ侍らんと
尋しに、師の云。今の人の名は慎むべし。古人の名
は物によりて苦しかるまじ。されども好がたし。心
きらひなりと云へり。

戀なくては詮なし (同)

懐紙に戀をなくて、いかゞしく昔より沙汰し來
る。なくて叶はざる事か好む心はいかゞにと云ば、
此事は知て大切のことなり。懐紙に戀を目立ること、
神代より日本はじまるの例なり。戀なくては詮
なき事なり、慎むべしとなり。

先へ行く心 (同)

師のいはく。たとへば歌仙は三十六歩なり。一步
も跡に歸る心なし。行にしたがひ心の改は、只先へ
ゆく心なればなり。

發句より揚句まで (同)

發句の事は一座巻の頭なれば、初心の遠慮すべし。
八雲御抄にも其沙汰有。句姿も高く、位よろしきを
すべしと、むかしより云侍る。先師は懐紙のほ句か
ろきを好れし也。時代にもよるべき事にや侍らん。
又古來より新宅の會に燃る、焼るなど火の噂、追悼
にくらき道、迷ふ罪とが、船中に歸るしづむ浪風等
の類いむべき心遣ひとなり。五體不具の噂、一座に
差合事思ひめぐらすべし。ほ句のみに不限其心得あ
るべし。

脇は亭主のなす事、むかしより云。しかれども首
尾にもよるべし。客ほ句とてむかしは必客より挨拶
第一にほ句をなす。脇も答ることくにうけて挨拶を
付侍る也。師のいはく。脇亭主の句を云る所則挨拶
也。雪月花の事のみ云たる句にても、あいさつの心
なりとの致也。ほ句に三月に渡る景物出る時は、脇
にて當季を定むべし。是は連歌の習也。併にも其心
遣ひなり。

「一」聯句と云ふ
は漢詩の聯句
にして、「一唱
一句」とは其第
一句也

師のいはく。ほ句に神祇釋教其外一事ある時は、

應じて脇すべし。たとへ詞に出さずとも心にはある
べし。但水祝などの季一通りにして云句は、脇に戀な
くてもあるべし。たとほ句に依るべし。對付違付う
ち添頃留の類むかしより云置所也。師云。第一ほ句
をうけてつりあひ事にうち添て付るよし。句中に作
を好む事あるべし。留りは文字すはり宜すべし。か
な留メ自然にある心得口訣あり。第一應對合體の心
とおもふべし。作者心得べきは、先ほ句出るとよく
聞しめ、させる事見へずとも、作者より句意をあら
はすやうに挨拶して、よく聞ふせて脇すべし。心と
ゞかざれば無禮にして無下成事也。たとへば連歌の
ほ句は聯句の唱句也。脇は對也。此格を以て文字留
也。詩聯句に習て韻といふ也。

第三は、師の曰。大付にても轉じて長高くすべし
と也。或書に留りの事むかし沙汰なし。宗祇よりの
格式なり。常用る通りなり。疑の切字のほ句の時
第三はね字にとゞめずと古來云へり。うたがひの句
一法句故なり。らんはうたがひのはね字なり。句中

に押へ字あり。「や」「か」「い」「何」などの類也。又句によりて押字なくてはねるあり。一字はねなり。「をらん」「ちらん」の類也。哉留りのほ句の第三にて留メせずとむかしより云へり。是治定の哉故にせずなり。「花のさかり哉」「月の光哉」の類なり。「盛にて」「ひかりにて」といふにかよふなり。先師のいはく。にてになるに留メくるしからず。にて留は嫌ふべしとなり。文字留手爾葉留自然にあり。古法口傳有事也。一説古書にあるは脇の句韻字留りゆへ、懐紙に文字留りならばざるやうに留なり。若脇手爾葉にて留メば、第三文字留にて留るとも云へり。かくの事は達人に有。常の留をよしとす。是此道の習なり。

第三は轉するを專とすれども、脇の句によるべし。遠付取なし付等の句の時は、第三にて轉するにおよばざる事なり。ほ句戀神祇等のものにて、脇是に應ずる時第三に至り、必是を轉じ、はなれてすべし。師の説なり。

四句目はむかしより四句目ぶりなど云て、やすく

かるきをよしとす。師のいはく。重きは四句目の體にあらず。脇にひとし。句中に作をせずと也。古事本説など嫌ふ事也。春秋の季つゞき四句目にて、花月の句をする事、必あるまじとの師説也。

五句目七句目の事。「三て五らん」などと古説あり。七句めも同じ心得なり。第三の後一順上の句を賞とす。中にも月の座は名ある所也。老分に當べし。同字を表に嫌ふも懐紙をたしなむ所なり。て留はね字留は句の一體表道具となり。

裏に成て四春八木と連歌に古説あり。四句め春をせず、八句目に高き植物せず、花につかゆる遠慮なり。俳諧も其心得なり。他の句を返すには不及、春出ば花を付べし。是呼出しの花と也。花の前句に秋の字用捨すべし。戀の花はむづかしきわざと連歌に秘して、前句よりつゝしむとなり。俳其沙汰なし。

月の定座をこぼす事。師のいはく。五十句より内はあるべからず。奥に至つては、少の興にもなるものなり。歌仙はくるしかるまじ、略の物故なり。月の座月の字有時も、差合たる時は異名にてすべし。

(一)「名木」恐くは「木の名」ならん
 (二)「櫻の事」以下「恐くは錦簡あらん」
 (三)「赤双紙」に此項「不易流行」と「風雅の道」との間「あり」
 (四)「笈日記」十日の條に「やい似たる記事あり」

異名の仕かた人々の作意にあるべしと師の詞也。又師のいはく。月は上旬勝たるべし。落月無月の句つゝしむべし。時によるべし。法にはあらずと也。星月夜は秋にて、賞の月にはあらず。もしほ句に出る時は素秋にし、他季にて有明などする也。月といふ字に五句隔と新式にあり。

師の曰。表に月二ツ稀に有。此時は月數ハツなり。名の裏はまれにも月なしとなり。

花の事は、花四本の内、下の句は一句ばかり。定座まれにもこぼす事なしとなり。

賞花の句、前句への付心か、又その一句の心か、實は梅菊牡丹など下心にして仕立、正花になしたる句、その木草にしたがひ季をもたすべきか、或は正月に花を見る、また九月に花咲など云句いかゞと云へば、師の曰。九月に花咲などいふ句は非言なり。無き事なり。たとへ名木を隠して花とばかり云とも正花なり。花といふは櫻の事ながら、都て春花をいふ。是等を正花にせずしては、花の句多く出る賞輕しとなり。宗祇の時代迄百韻花三本也。雨一ツなり。

宗長の時にいたり、句ひの花一本雨一ツ勅許を蒙り度旨奏聞せられて、花四本雨二ツには究り侍る。連歌の式と師の詞なり。

裏一順の事も、初のごとくかるくとあるべし。揚句は付ざるよしと古説有。今一句に成て一座興さめる故なり。また兼て案じ置とも云へり。ほ句主并に亭主のする所にあらず。初の一順に執筆の句なくば揚句を筆にすべし。ほ句にある文字をつゝしむなり。にほひの花にて春季五句に至るとも、揚句に季をはなすべからず。たとへ季六句に及びてもすべしとなり。いづれの季戀にても、揚句此心得なり。句ぶり心得あるべし。

眞草行 (三册子、赤双紙)

師末期の枕に、門人此後の風雅を問ふ。師曰。此道のこゝに出て、百變百化す。しかれども其境眞草行の三をはなれず。其三が中にいまだ一二をも盡さずと也。生前折／＼のたはむれに俳諧いまだ俵口を

とかずと云出られし事度々なり。高く心を悟りて俗にかへるべしとの教也。常に風雅の誠をせめたどりて、今なす所俳諧に歸るべしと也。

残れる俳諧 (一)

翁曰。俳諧世に三合は出たり。七合は残たりと申されけり。

賞めし狂歌 (俳諧曾我)

桃先曰。往昔みはら浅間の狩鞍にて、神は竹ひしぐやうに鳴、雨は打まけて降、梶原が狂歌ひとつにて、忽日和となる。御感のあまり、笛吹の籠にて五百餘町を賜ふと此物語に書り。其歌

此物語とは即
曾我物語の
事なり

きふこそ浅間はふらめけふはまた
みはらし給へ白雨の神 景 季

我翁の常に歎美し給ひし狂歌あり。同じ神鳴なれども、黒米五合にもならず。

のぼるべきたよりなければ鳴神の

井戸のそこにて相果にける よみ人しらす

源太が歌に合さば百萬石の損なるべしと笑ひく損ついで我も一首とて、

鳴神にあなたの鬼の噂せじ

もし一門で有るもしらねば

桃 先

不易流行 (三册子、赤及紙)

師の風雅に、萬代不易あり、一時の變化あり。此二に究り、其本一なり。其一といふは風雅の誠なり。不易をしたらざれば實に知るにあらず。不易と云は新古によらず、變化流行にもかゝはらず、まことによく立たる姿なり。代々の歌人の歌を見るに代々其變化あり。又新古にもわたらず、今見る所昔見しにかはらず、あはれなる歌多し。是先づ不易と心得べし。又千變萬化するものは自然の理なり。變化にうつらざれば風あらたまらず。是に押うつらずと云は、一端流行に口實時をえたるばかりにて、其誠をせめざる故なり。せめず心をこらさざるもの、誠の變化を知るべし。只人にあやかりて行くのみなり。せむるものは其地に足を居えがたく、一歩自然にす

む理なり。行末いく千變萬化するとも、誠の變化は皆師の俳諧也。假にも古人の涎をなむることなかれ。四時の押うつるごとく、物あらたまる。みな斯のごとしと云り。

風雅の道 (同)

三册子
「上芳云」の三
字なし

土芳云。常に風雅に入るものは、思ふ心の色、物となりて、句姿定るものなれば、取物自然にして仔細なし。心の色うるはしからざれば、外に詞を工夫。是即常に誠を勤めざるの俗也。誠を勤ると云ふは風雅に古人の心を探り、近くは師の心を能く知べし。其心を知らざればたどるに誠の道なし。其心をしるは師の詠草の跡を追ひ、よく見知て即我心のすぢを押直し、爰に赴て自得するやうにせめる事を、誠を勤るとは云べし。師の思ふ筋に我心を一になさずして、私意に師の道を悦て、其門を行くとこゝろえ顔にして、私の道を行くことあり。門人よく己を押直すべき處なり。松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと師の詞のありしも、私意をはなれよといふ

事なり。この習へと云ふ處を、おのがまゝにとりて、終に習はざるなり。習へと云は、物に入て其微のあらはれて情感するや句となる處なり。たとへものあらはに云出ても、其物より自然に出る情にあらざれば、物と我と二に成て其情誠に至らず。私意のなす作意なり。只師の心をわりなく探れば、其色香我心の匂ひとなりうつるなり。詮議せざれば、探るに又私意あり。詮議穿鑿せむるものは、須臾も私意になる。道なし。只懈らず詮議穿鑿すべし。是を専要の事として、名を地ごしらへと云。風友の中の名目とす。

功者に病あり (同)

功者に病ひあり。師の詞にも俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそたのもしけれなど、度々云出られしも、みな功者の病を示されしなり。實に入に、氣を養ふと殺すとあり。氣先を殺せば、句、氣にのらず。先師も俳諧は氣にのせてすべしとあり。相槌あしく拍子をそこなふともいへり。氣をそこなひ殺す

三册子
「しばらくも
私意にはなる
道あり」とある
れど、今一葉
集」に従ふ

〔一〕この若葉の卷（或は）この句若葉の卷（誤脱ならん）

ほととぎす聲横たふや水の上

此句はさせる事もなければ、白露横といふ奇文を味合たるとなり。一たびは「聲や横たふ」とも「一聲の江に横たふや」とも句作有。人にも判させて後、江の字抜て、水の上とくつろげて、句の匂ひよろしきに定る。水光接天白露横江の横、句眼なるべしとなり。

二十日あまりの月かすかに、山の根際いとくらく、駒の蹄もたどくしくて、落ちぬべきことあまたゝびなりけるに、數里いまだ鶏明ならず、杜牧が早行の殘夢、小夜の中山にいたりて忽おどろく。

馬にねて殘夢月遠し茶の煙り

此句は古人の詞を前書になして風情を照すなり。はじめは「馬上眠からんとして殘夢殘月茶の煙」とあるを、一たび「馬にねて」と初五文字をしかへ、後又句に拍子有てよからずとて「月遠し茶のけぶり」と直されしなり。

ちる花や鳥もおどろく琴の座
この若葉の卷によりて、詞を用ひられし句なるべし。

物語の姿 (同)

粽結ふ片手にはさむ額髪
此句物語の體となり。去來集撰の時、先師の方より云贈られしは、物がたりの姿も一集には有るべきものとおくるとなり。

前書の詞 (同)

此境はひわたるほどといへるもこの事にや
かたつむり角ふりわけよ須磨明石
此句は次の卷の詞を前書にしての句なり。

一聯二句 (同)

観音のいらか見やりつはなの雲
此句の事或集に其角云。鐘は上野か淺草かと聞へし前の年の吟也。尤病起の眺望成べし。一聯二句の

〔二〕心の「恐くは誤脱あらん」

格なり。句を呼て句とすとあり。さもあるべし。

字あまりの句 (同)

朝顔や雲は鏡おろす門の垣
磯うちて我に聞せよや坊が妻
枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

此句とも字餘り也。字餘りの句作の味ひはその境にいらざればいひがたしと也。かの人人は初瀬の山おろしよとある文字餘りの事など云出て、なくてなりがたき所を工夫して味ふべしとなり。

初雪の興 (同)

初雪にうさぎの皮の髻つくれ

此句「山中に子どもと遊びて」と前書あり。初雪の興なり。されたる句は作者によるべし。先は實體也。猶あるべし。

風雅も師走 (同)

節季候のくれば風雅も師走かな

此句風雅も師走哉と、俗とひとつに云侍る。是先師の心の人の句に藏やけてと云句有、とぶ蝶の羽音やかましといふ句あり、高いひて甚心俗也。味ふべし。

大國の句 (同)

早稻の香やわけ入右はありそ海
一おねは時雨る、雲か雪の不二
この句師のいはく。若大國に入て句をいふ時は、その心得あり。都に名ある人かゞの國に行て、くんせ川とかいふ川にて、ごりふむと云句あり。たとへ佳句とても其信をしらざれば也。有そもその心遣ひを見るべし。又不二の句も山の姿是程の氣にもなくては、異山とひとつに成べし。

ふとひし句 (同)

梅若菜まりこの宿のとろ、汗
此句師の曰。たくみていへる句にあらず。ふといひてよろしと跡にて知たる句なり。斯のごとくの句

〔三〕三冊子に「大王」とあるは國の草體の畫の缺けたるもの也

は又せんとはいひがたしとなり。東武におもむく人に對しての吟なり。梅わかたと興じて、まりこの宿にはと云はなして當てたる一體なり。

「二日にも」の句 (同)

二日にもぬかりはせじな花の春

此句は元日晝までいねて餅くひはづしたりと前書あり。此句の時、師の曰。等類氣づかひなき趣向をえたり。此てにはは「二日には」といふを「にも」とはしたる也。「には」といひてはあまり平目にあたりて聞なく、いやしとなり。其角たびうりにあふうつの山といふも、あはんといふ所をあふとは云る。喜撰が「人はいふ也」の類なるべし。

おもひやりたる句 (同)

せりやきや縁輪の田井の薄氷

この句師のいはく。たゞおもひやりたる句也となり。芹やきに名所なつかしく、思ひやりたるなるべし。

「御子良子」の句 (同)

御子良子の一本ゆかしうめの花

此句は一とせ伊勢に詣て、老師梅のことを尋ねしに、子良の館のあたりに漸く一本古き梅あり、其外に曾てなし、と社人の告げゝるを、則ち句としてとあられしなり。師の曰。むかしより此所に連俳の達人おほく句をとむに、終に此梅の事をしらす。と悦しく聞出けるなり。風雅の心がけより此事とゞまを思ひしれば、やすからぬ所なり。

あやしき處 (同)

いなづまを手にとるやみの紙燭かな

此句師の曰。門人此道にあやしき處をえたるものにいひてつかはす句なりとなり。そのあやしきをいはんと、取物かくの如し。萬心遣ひして思ふ所を明すべし。

「旅人」との句 (同)

から句なりといへり。

「新年ふるき」の句 (同)

春立や新年ふるき米五升

此句師の曰。「似合しや」とはじめ五文字あり。口をしき事なりといへり。其後は「春立や」と直りて、短冊にも残り侍る也。

「風色」の句 (同)

風色やしどろに裁えし庭の萩

此句ある方の庭を見ての句なり。「風吹」とも一たび有り。「風色や」ともいへり。度々吟じて風色と云ふ字も過たるやうなれども、色と云ふ方に先すべしとなり。

よく目に立つ (同)

鞍つばに小坊主のるや大根引

此句師のいはく。「のるや大根引」と小坊主のよく目に立つ所句作ありとなり。

「三冊子」に
「武江」とあ
れと今「一葉
集」に従ふ。

旅人とわが名よばれんはつ時雨

此句は師武江を旅出の日の吟なり。心のいさましきを句のふりにふり出して、よばれん初時雨とはいひしとなり。いさましき心をあらはす處、諺のはしを前書にして、書のごとく章さして門人におくられしなり。一風情あるものなり。この珍らしき作意に出る。師の心の出所を味ふべし。

いきごみ (同)

何に此師走の市にゆく鳥

此句師のいはく。五文字のいきごみに有りとなり。

「鹽鯛」の句 (同)

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店

此句師のいはく。心遣はずと句になるもの、自讃にたらずとなり。「かまくらを生て出でけん初松魚」と云ふこそ、心の骨折、人のしらぬ處なり。又曰。「猿の齒白し峰の月」といふは其角なり。「鹽鯛のはぐき」は我老吟なり。下を「魚の店」と只いひたるもおのづ

「六月や」の句 (同)

六月や峰に雲おくあらし山
此句、落柿舎の句なり。雲置嵐山と云ふ句作、骨折たる處といへり。

「川風や」の句 (同)

川風やうす柿着たる夕すゞみ
此句、涼みの云やう少し心得てしたりとなり。

「雲雀啼く」の句 (同)

雲雀啼く中の拍子やきじの聲
此句、ひばりの啼つゞけたる中に、きじの折々啼入る氣色をいひて、長閑なる味をとらんと、いろ／＼して是を究む。

心の味 (同)

から鮭も空也の瘦も寒の中
此句師の曰。心の味を云ひとらんと、數日腸をし

ぼるとなり。骨折たる句と見え侍るなり。

「蛇くふ」の句 (同)

蛇くふときけばおそろしきじの聲
此句、師の曰。「うつくしき顔かく雉子の蹴爪哉」と云ふは其角なり。「蛇くふ」と云ふは老吟なりとなり。

「木のもと」の句 (同)

木のもとには汁も餡もさくらかな
此句の時師の曰。花見の句のかゝりを少しえて、輕みをしたりとなり。

「誰ぞ」の句 (同)

誰ぞ齒朶に餅おふ丑のとし
此句は丑の年の歳旦なり。此古體に人のしらぬ悦びありとなり。

「七夕や」の句 (同)

年々落入ることを悔て云ひ捨たるとなり。

この謎 (笈日記)

支考云。元祿七の夏、阿叟の桃花坊におはす時、人々よりみて物語し侍るに、支考が集作らば、なにがしの桐火桶に似せて侍らん。たとへば、

梅が、にのつと日の出る山路かな 翁

なまぐさし水葱がうへの鮓の腸 同

梅が香の朝日は餘寒なるべし。水葱の鮓の腸は殘暑なるべし。是を一體の趣意と註し候はんと申たれば、阿叟もいとよしとは申されしなり。其後大津の木節亭に遊びて、

ひや／＼と壁をふまへて晝ね哉

此句はいかに聞侍らんと申されしを。是もたゞ殘暑とこそ承り候へ。必ず蚊帳の釣手など手からまきながら、思ふべき事をおもひ居ける人ならん。と申侍れば、此謎は支考に解れ侍るとて咲ひてのみはてぬるかし。

〔三〕三冊子に「夜のはじめ」とあれど書根なるべし。依つて「葉集」に従ふ

〔二〕三冊子に「丈六の」とあり

〔一〕三冊子に「此二句」ある俳書に、梅は餘寒、鮓の腸は是を一體の趣意といはんと門人のいへば、師尤とこたへられ侍ると也。とあり

〔五〕三冊子に「是も殘暑とへば、師宜とい也」とあり

七夕や秋をさだむるはじめの夜

此句「夜のはじめ」はじめの夜「此二に心をこめて、折々吟じしらべて、數日の後に「はじめの夜」とは究り侍るなり。

「丈六」の句 (同)

丈六に陽炎高し石の上

陽炎に佛つくれ石の上
此句當國大佛の句なり。人にも吟じ聞せて、みづからも再吟有て、丈六の方にさだまるなり。

「あけぼのや」の句 (同)

あけぼのや白魚しろき事一寸

此句、はじめ「雪うすし」と五文字あるよし。無念の事なりといへり。

「年年や」の句 (同)

年々や猿にきせたる猿の面

此歳旦師のいはく。人同じ處に止て、おなじ所に

「秋風」の句 (三冊子、赤双紙)

秋風の吹ども青し栗のいが

此句いがの青きををかしとて句にしたるなり。「吹ども青し」と云ふ處にて句とはなして置きたりとなり。

捨打てし句 (同)

一とせに一度つまると齊かな

此句其春の文通に聞え侍る。其後直に尋侍れば、師の曰。其頃はよく思ひ侍るが、あまりよからず打捨しとなり。

「雲に鳥」(同)

旅 懷

此秋は何でとしよる雲に鳥

此句難波にての句なり。此日朝より心にこめて下の五文字に寸々の腸をさかれしとなり。

くひ侍ると也。老人の例にまかせて書捨たり。さ
のことも侍らざればなしがたき事也と云へり。

「月のなり」(同)

秋もはやはらつく雨に月の形

此句はじめは「きのふからちよつ」と秋も時雨哉」と句作りあり。いかに思ひ給ひ侍るにや、いろく句作りして試みらるゝ反故の筆すさび有り。終に「月の形」と自筆の物にも残し置かれ侍るなり。

「初」の字の位 (同)

貌に似ぬ發句も出でよはつざくら

此句は下の櫻いろく置かへ侍りて、ふと「初櫻」にあたり、是初の字の位よろしとて究るなり。

「瓜の泥」(同)

朝露によごれて涼し瓜の泥

此句は瓜の土とはじめあり。涼しきといふに活たる處を見て、泥とはなしかへられ侍るか。

湖水の名月 (同)

明月や座にうつくしき顔もなし

此句湖水の名月也。「名月や兒達双ぶ堂の縁」としていまだならず。「名月や海にむかへば七小町」にもあらで、「座にうつくしき」といふに定る。

蝶の翅 (同)

蘭の香や蝶の翅に薫す

此句はある茶店の片はらに道やすらひしてたゞすみありしを、老翁を見知り侍るにや、内に請じ、家女料紙持出て句を願ふ。其女のいはく。我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其頃難波の宗因此所にわたり給ふを見かけて、句をねがひ請たる也。例おかしき事までいひ出て、しきりにぞみ侍れば、いなみがたくて、かの難波の老人の句に「葛の葉のおつるの恨夜の霜」とかいふ句を前書にして、この句遣し侍るとの物がたり也。其名をてふといへばか

「此道」の句 (同)

人聲や此道歸る秋のくれ

此道やゆく人なしにあきの暮
此二句いづれかと人にもいひ侍り。後「行人なし」と云方に究り、「所思」と云ふ題をつけて出たり。

歩みはじめたる (同)

桐の木に鶉啼なる塀の内

此句いかゞ聞侍るやと尋られしに、何とやら一さまあることに思ふよしこたへ侍れば、いさゝか思ふ所ありてあゆみはじめたるとなり。

名所の句 (同)

朝よさを誰まつ鳥ぞ片ごゝろ

此句は季なし。師の詞にも、名所のみ雑の句にもありたし。季を取合せ歌枕を用る、十七文字にはいさゝかこゝろさし述がたしと云る事も侍るなり。さの心にて此句も有けるか。猶杖突坂の句あり。

(二)其角の句なり

門人の句に、「元日や家中の禮は星月夜」と云ふあり。只門松に星月夜とばかりする句なり。味ふべしとなり。

味ふべし (同)

思ひかへし (同)

(三)支考の句なり

同「松風に新酒を澄ます山路哉」と云ふ句あり。山路を夜寒にすべしといへり。其夜の道の戻りに、集などに若し出す時は、はじめの山路しかるべしとなり。

聞のいふ (同)

同「花鳥の雲にいそぐやいかのぼり」といふ句あり。人の云へる、此句聞がたし。よく聞ゆる句になし侍れば、句をかしからず。いかゞといへば、師の曰。いかのぼりの句にして然べしとなり。聞のことは何とやらをかしき處有をよろしとす。此類のことは有ることなり。昔の歌にも「小男鹿のいるのゝす

き初尾花いつしか君がたまくらにせん」といふも其類なり。聞とげされどもあはれなる歌なりといひならはしたるとなり。

理窟 (同)

同「ぬしや誰ふたり時雨に傘さして」と云句あり。これは初五理窟なり。なしかふべしとあり。後に「跡に月」とはいかゞといへばよろしとなり。

「格を」 (同)

同「時なる哉柘旅客は笠の端にさゝん」と云句あり。初の詞過たり。「格を」とばかりすべしとなり。

予が手筋 (同)

同「黄鳥に橋見する羽ぶき哉」と云ふ句あり。下の五文字師の手すちよく思ひ知たるはとなり。「四五器の揃はぬ花見ごゝろかな」と云ふも爰なるべしとなり。

見様體 (同)

同「春風や麥の中ゆく水の音」と云句あり。景氣の句なり。景色は大事のものなり。連歌に景曲といひ、古の宗匠深く慎み、一代一兩句に過ぎず。初心眞似よき故にいましめたり。俳には連歌ほどには忌まず。惣而景氣の句は古びやすしとて、つよくいましめ有るなり。此春風景曲第一の句なりとて「陽炎いさむ花の糸口」と云ふ脇しておくられ侍るとなり。歌に景曲は見様體に屬すと定家卿も宣ふとなり。寂蓮のむら雨定頼卿の宇治のあじろ木は見様體の歌と或俳書にあり。

付の事 (同)

師の曰。俳諧の連歌と云ふはよく付といふ字意なり。心敬僧都の私語にも、前句に心のかよはざるは、只むなしき人のうつくしうさうぞきて並び居たるなるべしと或俳書にあり。又付の事は千變萬化すといへども、せんする處只俳と思ひなし景氣此三に極り

侍るよし師のいへるともあり。

體 (同)

或時師の詞に、體はさまん有りといへども、世上二三體に過ぎず。今思ふ處十二體には見え侍るなり。物にも書留んや。此後こゝに究め侍るやうに、人こゝに留らんか。しかれば書留るにも至らずとて事やみ侍るなり。

付といふ筋 (同)

師の曰。付といふ筋は、聲響佛移り推量などゝ形なきより起る所なり。心通ぜざれば及びがたき處なり。

傑句「門しめて」 (同)

桐の木たかく月さゆるなり
門しめてだまつて寝たるおもしろさ
先師のいはく。炭俵は「門しめて」の一句に腹をすあたり。試に方々門人に問へば、みな「泣く事のひ

そかに出来し淺茅生に』と云ふ句によれり。老師のおもふ處にあらずとなり。

一の第三 (同)

市人にいでこれうらん雪の笠
酒の戸たゞく鞭のかれ梅

朝がほに先だつ母衣を引つりて

此第三は門人杜國が句なり。此第三せん人々さま／＼いひ出侍るに、師の曰。此第三の付方あまた有べからず。鞭にて酒屋をたゞくと云ふものは、風狂の詩人ならずばさも有まじ。枯梅の風流に思ひ入ては、武者の外に此第三有るべからずとなり。

むづかしき臨 (同)

歩行ならば杖つき坂を落馬哉
角のとがらぬ牛もあるもの

此臨は門人土芳が句なり。先師此句をふとしたり。季なし。みな臨して見るべしとあり。おの／＼さま／＼付けて見侍れども心にのらずして、ふと此句を

見せ侍れば、よろしとて其まゝ取て付られ侍る。師の心味ふべし。

行て歸る心の味 (同、黒双紙)

發句のことは行て歸る心の味なり。たとへば「山里は萬歳おそし梅の花」と云ふ類なり。山里は萬歳遅しと云はなして、梅は咲ると云ふ心のごとくに、行て歸るの心、發句なり。山里は萬歳遅しと云ふばかりは平句の位なり。翁も發句は取合せものと知るべしと云るよし、或俳書にも侍るなり。題の中より出ることはずくなきなり。もし出ても大様古しとなり。

位を見知れ (同)

師の曰。發句の物、臨の物、第三の物、平句の物と其位ある事なり。ことごとにかく云にはあらず。其位を見知べしといへり。又曰。季を取合するに、句の古び易き煩あり、と有し時も侍るなり。門人常に心得べき詞なり。

孕 句 (同)

又曰、人の方に行に發句心に持行とあり。趣向季の取合せ障なきことを考ふべし。句作りは残すべし。孕句出たるは出る所うるはしからずと申されけり。

年の何 (同)

年の松、年の何など、近年歳旦に用ることあり。いかゞと尋侍れば、師の曰。達人の業にあらず。論に及ばずと也。去年今年春季なり。當年といふとも季に心をなさばなるべしとなり。

古みをとらんとせし (同)

師の曰。手の中に蟬を握て啼することを、よろしきものと、句にしばらく取なやみ侍るなり。古みをとらんとせしと、おそろしき物にあひたるやうに語り出られしなり。

てには留の發句 (同)

(二)此項文章不通。恐くは錯簡あらん。

手には留の發句の事。「けり」「や」等のいひ詰たるは常にもすべし。「覽」「て」に「其外云残したる留りは、一代二三句は過分の事なるべし。「けり」留は至て詞つよし。假初に云ひ出すにあらず。「降つみし高根のみ雪解にけり」といふも、至てつよく云ひはなして、其ひゞきに應じて、「清瀧川の水のしらなみ」と云かけて、氣色をあらはすなり。「覽」とはねべき所を「や」と云捨るもあり。「なり」と云べきを「覽」と云て、はゞを取る事なども古歌などに多し。みな句作の處なるべしと師の教也。

骨折るべき處 (同)

師の曰。下の句上の句ともに二字三字の間にあなり。又其二三字に甚ぬかり落る句あり。骨折るべき處なり。

持て來たる詞 (同)

師の曰。持て來る詞と云あり。殊に人の名などに有ことなりとぞ。